
姉びっくばん + (ぶらす)

埼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉びつくばん＋（ぷらす）

【Nコード】

N0873E

【作者名】

埼

【あらすじ】

義姉^{ねえ}さん、義姉さん、夏休みも終わってしまつてあつという間に新学期ですが楽しみですか？僕のクラスは面白い人が多くていつも飽きないんですよ。義姉さんはどうです…？って自転車の後ろで寝ないでください、本気で危ないですから。だからあんなに夜更かしはいけないと言つたじゃないですか、もう…。
こんな感じ（どんな感じ？）まったりと進む日常を僕の目線＋アルファでお伝えします。おもしろいかは…どうなんでしょうか？義姉さんはどう思いますか？って二度寝しないでください。

第一話 はじまりはじまり（前書き）

と、いうわけで季節を無視した新連載ですよ、奥様。ちよいと長くなるかもですがお付き合いいただけると嬉しいです。

元は短編なのでそちらを先にお読み頂けると話の把握は楽かもです。ちなみに短編同様文章ルールがちよっと特殊なのでお気をつけください（主人公は基本的に「」を使わない、など）。

前回、入れられなかった設定を入れていくのでちよくちよくシリアスが入るかもですが、まあ気にせずに。

あ、あとちよくちよく小ネタを突っ込んでいきますので評価欄などでツツコミを入れてくれると作者が喜びますです、はい。

第一話 はじまりはじまり

さあ、始めようか。

彼と彼女の面白おかしくて幸せなお話を。

例え結末が面白おかしくて幸せでなくとも。

突然なのですが現在、僕は少しだけ焦りながら自転車のペダルをこいで、朝の住宅街を疾走しています。定員は僕を含めて二名です。

「あらあら！ 朝から大変ね」

…おはようございます。矢作さん。

「あんまり急ぐと危ないわよ」

…気を付けます。篠原さん。

朝独特の冷えた空気を切りさきながら、すれ違ったご近所さんたちと挨拶を交わします。

やっぱりご近所付き合いは大切だと思います。お醤油とか切れたら貸してくれますしね。

ちなみに後ろの荷台に乗っている人は器用に眠りについていきます。危ないったらありません。

…落ちちゃいますよ、義姉さん。
「……んん、落ちないよう」

僕の言葉に反応したのか、はたまた自転車の揺れに反応したのか、自転車の後ろに乗っていた僕よりも一つ年上で、高校二年生の義理の姉が目覚めました。

「…まったく誰のせいで遅刻しそうなのよー」

義姉さんは後ろから僕の頭を叩きながらブチブチと文句を言っています。

そうです。僕たちは今、遅刻しそうになっているのです。理由はベタに寝坊です。

ちなみに今日は九月のはじめ。つまりは新学期なのです。

「ほらー、誰のせいか答えてみなさい！」

未だにべしべしと僕の頭を叩いている義姉さんが僕に詰問します。

…痛いです。痛いですよ義姉さん。それとお願いですから暴れないでください。危ないです。

叩かれるたびにぶれる視界に若干の危機感を覚えてなんとかやめてもらいます。

あと一応訂正しておきますが、義姉さんは僕に非があるように言っています。原因は間違いなく義姉さんです。

寝たまま家中の時計の電池を抜き取って自分の枕もとに集めるという奇行のせいで、今こうしていつも乗らない自転車をこいでいる訳です。

僕たちは大きくはなく、かといって小さくもない一戸建ての家に二人きりで住んでいます。

僕たちはもともと孤児で、義理の両親に養子として迎え入れられるまで同じ孤児院で生活をしていました。

両親は二人ともんでもない変わり者で尚且つとんでもない金持ちでした。

そんな二人がある日、ふらりと出かけた先で事故に遭い、あつけなくこの世から去ってしまいました。

そこから、改めて話す必要もないくらいドロドロでデロデロな展開が僕たちを待っていたわけですが、今ここでそれを思い出してしまつと朝から泥沼のようなテンションで一日を過ごさなければいけなくなるので、またの機会にでも。

「あとちょっとだね。ほらハイヨーシルバー！」

…どこのカウボーイですか。それにさつきも言いましたが叩かないでください。結構危ないんですよ。

駅まで残り数分というところで再び僕の頭をべしべしと叩く義姉さんをなだめてすかして止めると、駅までの道のりの中での最難関、いわゆる心臓破りの坂に向けて勢いをつけます。

…しっかりつかまっててくださいね。一気に上りますよ。

「……ねえねえ。ここで一つ、ゲームでもしないかい？」

僕が腰を浮かす直前、義姉さんがそんなことを口にしました。

…ゲーム、ですか？ 一体どんにやつ！？

僕が言い終わる前に、義姉さんは手を動かしていました。
僕のわき腹に。

「ぐっふっふっふっ、相変わらずここは弱いみたいだねえ」

義姉さんはまるで悪代官のような笑い声をあげながら、僕の急所であるわき腹に指を這わしてきます。

…い、一体にやつ！

「ほれほれ、ボディーがお留守だぜえ」

…自転車をこいでるんですから当たり前でえっ！

「では、ルール説明！ この坂を私の妨害に屈することなくテッペンまで上りきれたら君の勝ち！ 今日のごはん当番を私が代わろうじゃないか！」

拳をグツと握って、フフンと義姉さんは勇ましく鼻を鳴らしています。

その自信満々な様子に僕は一抹の不安を抱きます。
そしてあまり聞きたくはないのですが、聞かなくてはならない重要なことを聞きます。

…じゃあ、僕が敗けた場合はどうなるんでしょうか？

「うーん、そーだなあ。……じゃあ『一日私に逆らえない券』を発行ってことで」

…なんだかとてもなくリスキーな博打を強制させられている気がするのですが。

「男の子が細かいことを気にしない！ 残すところあと少し、頑張れ！」

義姉さんは『頑張れ』という言葉とは裏腹に、両手を再びわき腹に戻してピアニストよろしく、指を動かしてきます。

体をよじってその魔手から逃れようとしますが、当然、自転車をこいでいるわけですからうまくいきません。

ずっと前を見ると義姉さんの言うとおり、頂上ゴールはもうすぐです。避けることを諦め、覚悟を決めて一気に頂上を目指します。

「うわっ！ 急にからだが固くなった！」

…ふふふ、そう長くは保ちませんが身体全体の筋肉を張らせてますからね。半端な妨害こっげきは効きませんよ！

「なんですって!？」

僕が得意げに鼻をならす様子を見て、義姉さんはぐつつと唸りながら黙りこみます。なにがしかの対策を練ろうとしてるのでしょう。しかしながらそれは遅いのです。戦場いくさばではその一瞬の躊躇はいばくいが死を招くのですよ！

「……くつつふ」

何でしょうか……？ 若干の余裕すら見せている僕の姿を見て義姉さんがニヤリと笑った気がします。しかしながらそれと反するようにその手は止まっています。

ものすごくイヤな予感がしますが何にせよ今がチャンスです。最後の力を振り絞り身体を硬直させたままペダルをこぎます。

…この勝負！ 僕がもらいまし

「……ふつつふ、だから君は若いというのだよ義弟君おにい」

僕の勝ち名乗りをさえぎって義姉さんが眼鏡を直す仕草をします。

ちなみに義姉さんは眼鏡などかけていません。

「剛を制するのはいつも柔なのだよ」

そう言つと義姉さんは立ちこぎをしている僕にくつつくようにして半立ちの状態になります。坂を上っている状態で全体的に斜めになっているなか、難なく立つバランス感覚はすさまじいものがあります。

端から見れば何がしたいのかわからない意味不明な格好ですが、やられている方からすればちょっとマズイ格好です。特に背中が…。

しかしながら頂上まではあと少しです。このまま……！

「ふつつふ、喰らいなさい！ 我が必殺技、『ごつどぶれーす』！！」

義姉さんは高々と必殺技の名前を叫びながら 僕の耳に息を吹きかけました。

…い、い、いやああああああッ！！

当然、腹筋と背筋に力を入れていた僕はなす術なく脱力してしまいました。

そしてこれも当然ながら自転車は上ってきた坂道をすさまじいスピード逆走を始めました。

…結局、学校は遅刻になりそうですね。
「アハハハハ、はやーい！」

逆走する自転車の上で僕はため息をついて現実逃避気味なつぶやきを洩らしてしまいます。

…それにしても、これどうやって止めましようかね。

「ジェットコースターだああああ!!」

誰にともなくつぶやいた僕の疑問に答えてくれる人はいませんでした。

第一話 はじまりはじまり（後書き）

結局、新学期早々遅刻をしてしまったわけですがとりあえず急げば始業式に間に合うかもです……。

…とにかくにも、相変わらずやたら滅多に僕の心配をする義姉さんを電車で詰めて、僕も急がなくなっちゃいけませんね。

次回『愉快的仲間と義弟君』

お楽しみに！

第二話 愉快的仲間と義弟君

友達つてのは割と大切な財産だ。

金でもなく、打算でもなく、体裁でもない。

何かをしてくれるでもないが、いつも隣にいて話を聞いてくれる他人。

人生にはそんな人間が必要になることが必ずある。

一度どん底にまで落ちた彼はその辺りをよく把握している。

昔の彼の回りには、そんな人間がいなかったから。

「へい、橘はこれでペケ三たちばなな」

息も切れ切れに教室に飛び込んだ僕を迎えたのは、体育を担当している男性教師、橋本先生はしもとの慈悲無きお言葉でした。

急ぎに急いでここまで走ってきたのですが、結局始業式には間に合いませんでした。

それもこれもあのようなよからぬゲームを始めた義姉さんのせいなのですが今さらなにを言い訳しようと無駄なのでなにも言いません。

ちなみに『橘』とやたらに画数の多い苗字は僕のもの……といいますか義母の家の名字です。

「何だ？ 何でそんな遠い眼をしてるんだよ」

…何でもないですよ。近い将来、僕の顔には一体どんな落書きがなされるのか恐怖におののいているだけです。

「安心しろ。目立たないように蛍光ペンで落書きしてやるよ。ま、その日の授業は全部暗い部屋でビデオだけだなあ！」

橋本先生はふははと笑いながら手元にある名簿に少しだけペンを走らせます。

たぶん、僕の出席欄に遅刻^{ペケ}をつけているんだと思います。

このクラスの方針は破天荒な先生の性格を見事に体现しています。遅刻であったり、無意味な欠席はなんらかのペナルティーが科せられるのです。

このご時世にそういうスパルタ的なことをする先生は得てして嫌われるものですが、この人に至っては無駄にほとばしっているカリスマ性がそこら辺の不満を中和させているのです。

あ、ちなみにペケが五つで一日落書きされた顔で生活しなくてはいけないので何としてもこれだけは避けたいところですね。

それにしても……、先程から先生の後ろに気になるモノがあるのですが、何かツツコミ待ちのような顔をしている先生に素直にツツコミを入れるのは釈然としないものがあります。

かといってこのまま放っておくと、先生の性格からきつとそのまま進んでしまうので、やはりなにがしか言わなければならないでしょう。

…で、一応聞くのですがその黒板に大量に書いてある僕の名前はなんですか？

「んあ？ ああ、委員会の役員だよ。だれも手えあげないから遅かったお前に」

「……いえいえいえいえ。物理的に無理って言いますか、そういうたことを大きく通り越してもうこれは単なる嫌がらせにしか見えなんでしょう？」

「……まあ、何だ。オジサンとしてはもうちょっと上手なツッコミを期待したんだがなあ。ちよつとがっかりだ。がっかりついでお前の所にペケをもう一個書いちゃおう」

なにか変なところで期待されているのはこの際目をつむりましよう。

ただ、それでまた一步落書きに近づくのは困ります。

その行動をどうにか止めようとした時、とつぜん飛来してきた教科書が先生の頭に直撃し、先生の行動を止めました。

ちなみに先生の頭を直撃した教科書はふわふわと宙に浮かんでいきます。

普通なら騒然となる事態ですがこのクラスの皆さんは気にした風もなく談笑しています。このクラスにおいて、そういったポルターガイストまがいの出来事は理由も原因もハッキリとしているので誰も騒がないのです。というか皆さん、雑談がすぎませんか？

「……ヒロ君をいじめちゃダメ」

「なんだよ……ちよつとした冗談だろ？ そんなに怒んなよ新宮」

ぶう、といい年をした男性が頬を膨らませている姿は通常ならちよつとアレなのですが、橋本先生は教師の中でも群を抜いて容姿がよいのでそんな姿も様になります。

先生が難しい顔をしながら宥めている女の子 肩口まで伸びたきれいな黒髪に吸い込まれるような黒い瞳が印象的な新宮波音にいみやはのんさ

んが目を細めて先生の真意を読み取ろうとしています。その間、浮かんでいる教科書が先生の頭を何度となく叩いています。

彼女　波音さんは俗に言うエスパーさんなのです。感情の高ぶりとともに手を触れずに物を動かせたり、否応なく人の思念を読み取ってしまったりと、なかなか大変な能力を持つていたため色々ちからと辛い思いもしたようです。一学期の頃に彼女が教室でその能力を暴走させた事件は記憶に新しく、このクラスを一つにまとめさせたいい思い出もあります。

現在は彼女も強い意志を持ち、その能力の制御も出来るようになったらしいです。色々と大変でしたが結果的に大団円となつてよかったです。

さて……さすがに先生の頭を叩いている教科書は書道のものでかなり薄いとはいえ、このまま放つておいたら先生の頭がパーになつてしまいます。波音さんが……

「……エスパーだけに？」

…波音さん。僕にそれを聞きますか？　ボケは説明してしまうと死んでしまうのですよ？　それと僕の心を読まないでください。

首をかしげて僕の方を見ている波音さんに苦笑いを返します。

波音さんは純粹で非常に可愛らしいのですが……

「……………」

…はい、波音さん赤くならないでください。それと何度も言うようですが僕の心を読まないでください。

「はあ……、とりあえず新宮も落ち着いたようだし橘も席につけ」

叩かれていた部分を手で押えながら先生が僕に指示を飛ばします。

その手元の名簿が閉じられているところからペケをつけるのは諦めてくれたようです。後で波音さんにお礼を言わなければいけませんね。

「…気にしない」

……。

こちらにVサインを出す波音さんの姿に、僕は気付かれないようにため息をつきました。

「ははは、ヒロも大変だなあ、朝から」

…タロ君、お久しぶりです。しかし、実際問題これは笑いごとではないのですよ？

「そうだよな」。一日落書きされたままってのは正直しんどいよな」

僕のグチを難しい顔をして、それでいて妙に楽しそうな顔をして肯定するのは、隣の席に座っている体格のよい男子、伊田太郎君

通称タロ君です。

この色物クラスの中にいて、特殊な能力^{もの}を一切持っていないその存在感は虚無皆無に限りな……

「オーケー、聞こえてるぞヒロ。ってか、わざとだろ？」

…バレましたか。笑われたお返しですよ。

ニヤリと笑みを浮かべるとタロ君も同じように、いえ、僕なんかとは全く違う。誰とでもすぐに仲よくなれる明るくて邪気のない笑みを浮かべます。

先程、彼に特殊能力の類が一切無いと言いましたがこれはもう立派な能力なのかもしれません。

そう、僕なんかには到底手が届かないような素晴らしい能力です。

何故だかわかりませんが胸に痛みが走ります。

「どうしたの？ 難しい顔して？」

…いえ、何でもありませんよ。真君。

視線をタロ君の逆側に向けるとそこには中学生、見ようによつては小学生にも見えるやたらと小さくて可愛い男の子
小川真君 おがわまこと
がカクンと首をかしげてこちらを心配そうに見ています。

何といいましょうか……その姿はまるで天使です。髪に浮いた天使の輪はきつと彼が天使であつた名残りなのです。服に隠された華奢な背中にはきつと純白の両翼がある筈です……っ！

「全面的に同意せざるを得ないです」

僕の心の声が聞こえていたのか、真君の前の席の長身美麗な女子
立川茜 たちかわあかね がくるりと振り向いて、落ち着いた雰囲気を持つ彼女にしては珍しくグツとサムズアップをしています。

茜さんはこのクラスの委員長さんです。いえ、委員長さんだった、ですかね？ 新しい学期になったのでもしかしたら違う人が委員長になるかもしれないですが、無意識的に発揮してしまうリーダーシップからおそらく今学期も委員長さんになるのでしょうね。

そして、どうやら茜さんは真君と夏休み前に付き合い始めたらしいのです。本人たちは何も言いませんが信用できる情報筋からのお話です。まず間違いないと思われます。

まあ、本人たちの態度を見ていれば大抵の人は気付くんですがね。

だって『ば、僕らはそんな関係じゃないおっ!』とか『え……ええっ!? そ、そそそんなわけじゃ、ないじゃないですかあ!』など、もう二人とも日本語が話せないほどに動揺すればさすがに……、です。

本人たちはそれで隠しおおせたと思っているのですから、恋は盲目とはよく言ったものです。ん? ちょっと違いますかね?

「ちなみに翼は生えてませんでした」

…あはは、そんなのは冗談に………っ!?

人差し指を立てて僕の冗談に生真面目に答える茜さんに思わず戦慄を覚えます。

隣ではその言葉の真意を読み取ったのか、タロ君が引きつった笑顔を浮かべたまま固まっています。

「おーい、どうでもいいが真面目に委員会を決めるぞ。このままじや昼メシまたいじまう」

どこからツッコミを入れればいいのか全力で右脳(左脳でしたっけ?)を働かせているところに、今まで黙っていた先生の声が響きます。

昼食の時間をまたぎそうなのは先生が最初から真面目にやらなかったからなのですが、今はそんな無責任な言葉にも救われた心境です。

「どうしたの?」

「どうしたんですか?」

僕とタロ君のただならぬ様子に二人が何事かと尋ねてきますがぶ

んぶんと首を振って何でもないアピールします。

「……………やったん、だ？」

僕の後ろに座っていた波音さんの歯に衣を着せない眩きが妙に大きく聞こえました……。

第二話 愉快的仲間と義弟君（後書き）

僕の心を読んで口に出してしまう波音さんをなだめてすかしてとりあえず黙ってもらい、女の子がそんなことを言っちゃいけませんとたしなめます。

ぶうたれる波音さんの頭を撫でてこれからの学園生活に思いをはせます。

…はあ、やっぱり大変そうですねえ。

次回『放課後でいず』

お楽しみに！

第三話 放課後でいず

彼女が喚けば世界は変わる。
彼女が泣けば世界は変わる。
彼女が笑えば世界は震える。

全てを、世界を塗り替え潰す力を持つ彼女は、孤独に震えて怯えている。

虚ろな瞳で手を伸ばし、誰にでもなく声をあげ、世界に、人間に、変貌を要求する。

一人にしないで、と。

…やはりと言いますか当然と言いますか、二学期も学級委員長ですね、茜さん。

「ほとんど満場一致だったもんね。さすがだよ！」

「……………他に適任がいなかったから当然。次点は北条^{きたじょう}さん？」

某有名ファーストフード店のテーブル席に僕と真君、茜さんと波音さんが向かい合って座っています。

今はいわゆる放課後、とはいっても半日授業なのでまだ一時を回ったくらいの時間です。

ちなみにタロ君はバスケット部があるので学校でお別れしました。

あのあと、委員会や体育祭、文化祭の委員役員を決め直して帰宅となりました。その間、ものの数十分とかなりのスピード決議でした。

橋本先生が本気になったときの処理能力は過去に『鬼神』と呼ばれていたとかいなかったとか噂の校長先生に匹敵する……らしいです。違うクラスのちょこまか動く姿が印象的な女の子に聞いたので真偽のほどは不明ですが。

閑話休題です。

そして、いざ解散となったときに真君と茜さんに昼食に誘われた、というわけです。

義姉さんが心配でしたがそう遅くならなければ問題ないと思います。

…まあ、真君も『仲良く』一緒に学級委員長になれたんですから万事うまくいった感じですよ。

「……………こつちも圧勝」

感慨深げにもらした僕と波音さんの言葉に二人がお揃いで買ったシェイクを同時に吐きだしました。

ちなみに真君の委員長が決定したのは茜さんのあとだったので男子の若干生温かい視線（男子の大半は二人の關係に気付いています）と女子の若干熱っぽい視線（女子の半数ほどが真君のファンクラブ、もしくは茜さんのファンクラブに所属しているらしいです）を受けながら二位にトリプルスコアをつける大差で見事に男子の学級委員長に選出されました。

二人ともぱつとみて分かるほど真っ赤です。

相変わらず二人はにやーにやーきゃーきゃー日本語として成立してない言い訳をしているわけですが、何て言いますか、こういう姿を見てると和みますよね。

僕がグレープジュースを飲みながらハイハイと生返事をうっていると視界の端になにか写った……気がしました。

… ちょっと、家に電話してきますね。

「えっ？ …… うん、わかった」

未だにやんにやんと弁解をしている真君は僕の唐突な言葉にきょとんとしながらも首を縦に振りました。

二人の弁解の対象が波音さん変わったのを心の中で謝罪しながら……

「…………… 気にしない」

相変わらず心を読まれていることにため息をついて席を立ちました。

「要求通り情報委員になってくれたようっすね」

お店を出て、すぐ隣の路地に入ったところで開口一番、目の前の制服を着た女の子がそう言いました。

その女の子の身長はかなーり小さく……

「ちっさいとか言わんでください!」

声に出てました。

やり直します。

その女の子は身長は真君と同じくらいで、頭の上に結われたお団子の髪とクリッとした目が特徴の……

「情報委員会所属一年A組、神津クイナっす！」

…僕の説明を奪わんでください。

グツとつきだした手を握っている同年の女の子、神津^{かみつ}クイナさんはその小さな姿にぴったり合う元気な声で僕の説明を遮りました。小さい体に大きな声。さながらその姿は小学せ……

「小学生じゃないっす！　ぴっちぴちの十五才ですっ！」

…ちよつとした冗談です。あまり本気にしないでください。

ぷりぷりと怒っているクイナさんをなだめてなんとか落ち着いてもらいます。

なんとなくですが、姿形を抜きとすれば義姉さんにすごく似ている気がします。

クイナさんが所属する（あつ、僕も所属するはめになったんでした）情報委員会とは学校の配布物の編集がおもだった仕事です。なんと学校で配布されるプリントの九割が委員会で作られているらしいです。

ただ、彼女はなにをどこら辺から勘違いしたのか『探偵』とか『情報屋』とかの仕事だと思い違い、なにやら今でも暴走を続けているのです。

本来、知り合いとしては止めてあげるべきなのですがなにを言っても聞き入れてもらえずに今にいたるわけです。

で、です。今回僕は彼女に一つお願い……というよりも脅しを受けてしまい彼女と同じ情報委員に入るはめになってしまったのです。

「……やっぱり、無理やり委員会に入れたこと怒ってるっすか？」
「まあ。怒っていないと言えば嘘になりますね。」

少しの間とともにクイナさんが口に出したのはそんな言葉でした。少し意外な気がしましたが、僕がやたらと彼女をいじめていたから勘違いしたのだと思います。

「嘘ですよ。そんな暗い顔しないでください。」

泣きそうな顔をしてしまったクイナさんの顔を見てるとちよつと可哀想になってしまいすぐさまフォローを入れます。

んー……やっぱり義姉さんと対面しているような気分になります。

僕の言葉にクイナさんの顔が少し明るくなります。が、同時にぶうと顔を膨らまします。

「……ヒドイっす！ 私は私でけっこう気に病んでたんですよ！」
「だってあんな強引にことを進めるとは思ってもみなかったですからね。少し位は気に病んでもらわなければ僕も溜飲をおろせません。」

僕がわざとらしくうんうんと顔をしかめるとクイナさんがばつの悪そうな顔をして目をそらしました。

彼女のお願ひ、もとい脅しは僕の『ある情報』について黙っているかわりに孤軍奮闘している彼女の委員会に入って（おもに彼女を）手伝え、というものでした。

その『ある情報』とは、僕が夏休み前に他校の男子生徒数人を裸

に剥いてちよつと恥ずかしい姿に縛り上げてそのまま街中に放置して帰った、というものでした。その時の一部始終をクイナさんに見られてしまったわけですね。

あつ、もちろん僕にそんな趣味はないですよ？　ちよつと彼らにイラッとしたので、物理的な死と精神的な死のどっちがいいですか？　つと聞いたらどつちかというとな精神的な方が……、と言うのでそこら辺に捨ててあつた荷造り用のビニールロープで縛り上げたのです。

「だって一人じゃさすがに限界があつたし、なんか最近空回りばかりしちゃうつす……」

…わかつてます。僕もクイナさんが頑張ってるのは知ってます。けど、そんなに焦らなくてもいいんです。少しずつ、自分の納得するように進めばいいんです。僕も少しですがお手伝いしますから。

「うつ……あう、ありがとうございます」

クイナさんは少しだけ涙がにじんだ顔を制服の袖でぐいとぬぐい、気合いを入れ直すように頬を叩きました。

「そうと決まればちよつと学校に戻ります！　スクープが私を待つてるっす！」

…僕は今日はお手伝いできませんが頑張ってくださいね。あ、ところで今はどんなことを調べてるんですか？

「教頭先生の不倫とその壮絶な女性関係についてっす！」

ビシッと学校がある方角に指をさして目に見えるほどやる気をみなぎらせているクイナさんの後ろ姿をみて心の中で思うのです。

教頭先生ごめんなさい……と。

第三話 放課後でいず（後書き）

結局、かなり微妙な心境でクイナさんを見送り、席に戻った僕なのですがなんとなしに真君の様子がおかしいことに気付きました。はて、そんな思いつめた顔をしてどうしたんですか？
真君にそんな顔されると僕まで悲しくなってしまうですよ？

次回『放課後でいず おまけと絶対守護人形』

お楽しみに！

第四話 放課後でいず おまけと絶対守護人形（前書き）

作者のパソコンがへそを曲げているため、しばらくは他の小説ともどもまったく更新です。はい。

あ、あと後々訂正を入れていくかもです。

第四話 放課後でいず おまけと絶対守護人形

我は護るのだ。

彼に迫る有象無象、あらゆる脅威から。

我が幼少の頃より学ばされたあらゆる武を用いて護るのだ。

理由は明快。

好いているからだ。

愛しているからだ。

しかし、彼を前にしてそれを口に出すのは憚れる。

だって、だって……………

女の子だもん。

誰かを愛するって大変ですよね？

きつと人が人として生きていく中で一番悩ましいことなんだと思います。

だって、良きも悪きもこれ一つで人生の転機を迎えてしまうこともあるわけですし。

そうですねえ。例えるなら平坦なはずのサーキットコースに突如として現れた『バナナの皮』だとか走っている車と併走するくらい速い『カメの甲羅』だとか。

で、ですよ。僕がいきなりこんな話をしはじめた理由なのですが、

目の前でしょげかえっている天使君の話を聞いていたからなのです。ちなみに波音さんと茜さんはお手洗いに行っています。

「どうすればいいと思う……？」

探るような目線で僕に問いかけてくる真君。

彼にしては珍しくひどく難しい顔をしています。

今回、真君から相談された内容なのですが、なんでも真君の『友達』が恋愛について悩んでいるらしいのです。

往々にして『友達の』とか『知り合いの』とかいう話はその人自身の話であることが多いわけですが、僕も一応、空気が読めると自負していますからそこら辺は華麗にスルーします。

で、その友達はひどく迷っているのだそうです。付き合っている彼女と二人きりでらぶらぶするのが怖くてたまらない、とか。

普通に考えればおかしい話です。矛盾していますよね。

好きで好きでたまらなくて一緒にいることを選んだのにそこから怖くて踏み出せない。

まあ、正直その気持ちは痛いほどわかるのですが。

…たぶん、その人は一線を超えることを恐れているだけなんですよ。……一線？」

…そうです、一線です。大切な人だと『思っていた』人が本当に、それこそ体でも心でも本当に大切な人だと認識し直す一線です。

「…そこでためらっちゃうのは、実は彼が彼女のことをあんまり好きじゃなかったってことなのかな、かな？」

僕の見解がよほどショックだったのか某竜宮さんちの娘さんのような口調になっている真君に苦笑いを返します。

…違います、とは言い切れませんがたぶん違います。原因は他にありませんよ。

そこで一つ息を吐いて氷が溶けきってしまったグレープジュースをすすります。

あー……、改めて自分のことを話すのは辛いですねえ。傷口に塩とキムチを同時にすりこまれる気分です。

まあ、すりこむのは僕自身なのですが。

…たぶん、真に恐れているのは今の自分が変わってしまうことなのですよ。

私は少し考え事をしていた。

何を、と聞かれれば好きな彼にあまり相手にされてない気がする、とかさつきから壁一つまたいで向こう側にいる彼の心の中に何か霞がかっているけど女性の笑顔が浮かんでいる、とかそこら辺を即答する。

「どうしたの、波音ちゃん？ 難しい顔をしてるけど」

場所は洗面所、平たく言えばお手洗いなわけだが、一際大きな鏡

には確かにムツとした私の顔が写っていた。
昔から両親にもよく言われていた。

『笑えないのか？』

『もつと楽しそうに出来ないのか？』

『何が納得いかないの？』

別段、つまらなかったわけでもないし納得がいけないことがあつたわけでもない。何となく笑顔を浮かべるのが苦手だっただけで、心の中では割とその日あつたことを反芻したりして楽しんでいた。しかし、まあそんな親の態度で更に表情の乏しい人間になった気がするけど、他人^{ひと}のせいにするつもりはない。
そんな風に思えたのは私の思い人が私を止めてくれたから。叱ってくれたからだ。

「今度は笑顔。どうしたの？」

「…何でもない。気にしない」

いけない、いけない。

彼の顔を思い出したらニヤケ顔になっていたらしい。

隣にいる可憐で綺麗でモデル体型な（身長は百八十位はあるのではない）女の子　立川茜に出来るだけそっけなく返して内心を読み取られないようにする。

下手をすれば相手が不快に思いかねない私の返答を、かつてしたるか右から左に受け流して私の髪を『人形みたいだ』と言いがらいじりだした。

彼同様、彼女にも相当にお世話になっているため、私も無下には出来ずにされるがままになっている。

彼の友達のちょこまかと動く姿が印象的な女の子　名前を思い出せないが、彼女曰く『立川さんはちっちゃいものに目がない』

す。私も何度襲われたことが…。あやうく私の純白が汚されるとこ
でした』だそうだ。

彼女の情報はそれなりに信用できるので最後のところ以外は鵜呑
みにしていると思う。

そんな猫みたいな習性を持つ彼女にいいいじされながら本題に入
る。

「…で、どうしたの？ わざわざトイレにまで来て」

私がそう聞くと彼女の動きがピタリと止まる。

私は生まれつき人の心を読むことが出来るのでそんなことを聞く
必要もないが、現在、そこら辺の力は閉じている。そんなことを出
来るようになったのはつい最近のことで彼の協力なしにはなしえな
かったことだろう。

まあ彼に対してはこの力をガンガン使っているわけだが、そこは
気にしてはいけない。

「実は……友達のことなんだけど……」

かなり言いづらそうに切り出した彼女の顔は真っ赤だ。

友達とか知り合いとかそこら辺の前置きは、自分のことだ！ と
大声で叫んでいるのと同義な気がするがそれは置いておく。

この反応、この前置き。正直、次の言葉が予測できる。たぶん、

『こ、恋の悩みが、あ、あ、あるんだって！』とかそこら辺だ。

「こ、恋の悩みが、あ、あ、あるんだって！」

まさかの大正解に頬がひくつくが彼女にそれに気付くほどの心的
余裕は無かったらしい。

「…で？」

先を促してみるがもじもじしてなかなか言い出せない様子だ。

彼女は女の私から見てもかなり魅力的だ。

勉強では県内有数の進学校である我が学校で、一学期の一学年最優秀生徒賞をとるほど図抜けている。

運動では一年であり、何ら部活に所属していないのにひっきりなしに至るところから勧誘が来ている。理由は体育の時間の体力測定で校内一の成績を叩き出したからだ。

見ての通りの性格、前述した容姿、無言の内に発揮されるリーダーシップ、そして運動に勉強と非の打ち所がない完璧超人な彼女にも致命的な弱点がある。

それが蛙と恋愛沙汰だ。これらは如何な彼女でも、どうにも苦手なようでそれに直面したときは顔を青くしたり赤くしたりしている。

「な、なんかね、その友達には彼氏がいるらしいんだけど……」
「…よくある話」

私が無言で彼女の言葉を待っているとたつぷりと間を持って話し出した。

一見、何らおかしい話ではない。高一とは多感で恋多き年代だ。
斯く言う私も彼に熱烈攻撃中である。

まあ、彼女の言う『友達』はイコール自分のことと捉えて問題なさそうなので間接的に恋愛相談を受けていると考えてもよいのだろう。というか彼女は未だに、自分があの小さい男の子と付き合っていることがバレてないと思っているのだろうか？ それに気付いていないのはいつも彼女に勝負を挑んでは負けている北条さんくらいだ。

「そ、そのね、彼との関係はうまくいってると思うんだけどどうにも相手の押しが少ないと思うんだ。……って友達が言ってたの！」

この期に及んで未だ隠し通そうとする気概を汲んでまあ、知らない振りを続けてみる。

「たぶん、大丈夫」

「ほんとかな……？」

私の根拠のない言葉に更に心配そうな声を出す彼女。

一応、私も彼女の友達だ。何かしらの言葉をかけて彼女を勇気づけてあげたいとも思う。

「…彼の心の中は彼女でいっぱい。思いが空回りして動けないだけだと思う。男女とはそんな感じ。それでも不安なら……」

そう前置きしてから、私は鞆の中に入っていたハウトゥー本（女の夜這い初心者編）を片手に彼女の説得を開始した。

自分の過去をあることないこと脚色しながら真君に話していた僕は少し長めにため息をつきました。

「アルフにそんな過去があつたなんて……」

真君は僕の話聞き終えて目を潤ませていました。

ちなみにアルフとは架空の小説の架空の人物です。自分のみつともない過去を赤裸々に話すのはさすがに恥ずかしかったので小説の話というにして話していました。危ういところもいくつかありましたが、なかなかうまく誤魔化せたと思います。

…で、どうです？ 決心、と言いますか心の整理はつきましたか？
「……うん。覚悟完了だよ」

先程までの弱々しい瞳が嘘のように今は覇気で満ち満ちています。なにか最後の方は『友達の』恋愛相談ではなかったように思いますが、やる気を出しているところに水を差すのも気が引けますし、再び華麗にスルーしようかと 思ったのですが。

隣の通路を歩いていた学生集団の鞆が波音さんの飲んでいたオレシジューズを倒してしまいました。

「あー、カバン汚れちゃった」

「ハハハ！ ばっかじゃねーの」

「きったねえな、オイ！」

まさか物理的に水を差されることになるとは、とため息をついてテーブルの上のジュースを拭こうとした時に、学生集団から出てきたのはこんな言葉でした。

ムカツときたのも事実です。ですがここでことを大きくしてもお店に迷惑です。それにクイナさんの件もありましたから、うかつに動くのはちよつと避けたい…

「ねえ、まずはこっちに謝るのが先じゃないの？」

と思っていたのですが、真君は彼らの態度が気にさわったのでしよう。ムツとしながら彼らに食って掛かります。元来、正義感の強い真君ですからガラの悪そうな学生集団にも気後れしないんですね。

「ンだとっ？」

「テメエらがそんなところに座ってんのが悪いんだろ？」

それに対して、ヤクザよろしくに肩を怒らせていちゃもんをつけてくる茶髪の男子学生の顔を見て…妙なものを感じました。

…あれ？ 前にどこかで会いませんでしたっけ？

「アアッ！？ んな訳ね………… ああああッ！」

僕がカクリと首を傾げてその男子学生に問い掛けると、彼は一瞬眉を寄せましたが次の瞬間には声にならないといった様子で悶絶しはじめました。

それにつられるようにして後ろにいた男子学生の何人かも同じような表情を浮かべています。

その様子を見るに、僕と彼らにはなにがしかの接点があるのでしよう。

えー……。あつ、思い出しましたよ！ 件の事件くだんで僕がぐりぐりと縄で縛った人たちじゃないですか！

ポンと手を打って立ち上がる僕に恐怖で強ばったままの表情が張り付いている数人の男子学生。意味がわからずにポカンとしている真君と残った男子学生数人。

時が止まったように静まり返った状況の中、最初に動いたのは僕のことを知らない男子学生でした。

とりあえず倒すべき敵として判断したのでしょうか。先陣をきる形で飛び出して来たのは僕よりもだいぶ大きな人です。

僕を掴んで動きを止めようとしたのか、腕を広げて走ってくる彼に僕もスルリと近付きます。

距離は数間歩。

彼の手が僕の肩を掴むより間合いをつめた僕の掌が彼の腹部にそえられる方が幾分か速かったようです。

軽い踏み込みと重い踏み込み。

緩やかなスピードと瞬発力をいかした短距離走のようなスピード。絶対的な体格差。

僕には、突進してきた彼に勝る有利な条件はないはずなのですが吹き飛んだのは彼の方でした。

ずっとずっと昔の話です。

裕福な家に拾われた僕と義姉さんは、いの一番に叩き込まれたことがありました。

それは単純に身に振りかかる火の粉を払うだけの力とそれを行使するだけの技術でした。

その中でも、身体の小さかった僕には義母^{かあ}さんが独自に練り上げた、ある格闘術をことさらにみっちり教え込まれました。

それがこれです。

：知ってましたか？ 人っていうのはただ歩くだけでもとてつもないエネルギーを使ってるんです。だってそうでしょう？ 日常的に何十キロもある体をいとも容易く動かしているんですから。

呆然とその場に立ち尽くす彼らが聞いているかはわかりませんが僕はことさらにゆっくりと話し続けます。

ちなみに吹き飛んだ彼は気を失ったまま通路に転がっています。

…だから、です。その力の流れを阻害しないようにすれば、強い踏み込みもスピードもあまり必要ないんですよ。もちろん床がすり減るような訓練と魂がすり減るような応用訓練は最低限必要なんですからね。

自然、カタカタと笑い声が漏れてしまうのは昔の修行と称した『死業』を思い出したからです。

山奥にいる茶色くて大きくてハチミツが大好きなあの生き物とか、遠くアフリカとかの川辺にいるバナナが似合うあの生き物とかとの衝撃的な出会いは今も鮮明に思い出されます。

「そんなご託はいいんだよ！ 動くんじゃねえ！」
ヒステリックに叫んで僕を制止するのは最初に僕と会話していた男子学生でした。

…男の子のヒステリックはみつともないんですよ？
「うるせえ！ 減らず口叩くな！ こいつがどうなってもいいってのか？」

取り出していたのはずいぶんと切れ味の悪そうなサバイバルナイフでした。そのナイフで僕の隣の真君を指しています。

…知ってますか？ ナイフって切れ味が悪いと刺されたとき痛いんですよ？ 傷口から化膿もしやすいですし。

「だからうるせえって言うてんだろ！」

そう叫びながら駆け出す先には真君がいます。彼を捕まえて僕の動きでも封じようとしてるのでしょう。お店の中は狭いですが乱戦になれば僕とて彼を守りきれぬ自信はありません。
いい狙いです。ですが残念ながら彼には…

「……真君に、何してるんですか？」

絶対守護人形ゴーレムがついているのですよ。

結局、お手洗いから帰ってきたばかりの『ゴーレム』こと茜さんが真君に危害を加えそうな輩を、その規格外な身体能力を存分に使つて地に沈めていきました。

さながら拘束具が外れた汎用人型決戦兵器のような暴走っぷりでしたが、一人も重傷者を出さなかったところから一応は理性もあったようです。

一方僕は、軽々空を飛ぶ（飛ばされている）学生たちが他の人たちに迷惑をかけないように避難してもらったり、備品を壊さないように彼らを受け止めていたりしていました。

そのおかげか、あれだけお店に迷惑をかけたのにお咎めはありませんでした。なんでも彼らにはお店側も困っていたそうで、ちょうどよかったのかなんとか。

それにしたって無罪放免とは…、店長さんもずいぶんと豪気な方です。

彼らの処遇をお店に任せて、好奇の視線から逃げるようにして僕らは帰路についたわけですが、途中で真君と茜さんが二人で話があると云って別れました。

二人がどうなるかはわかりませんが余計な詮索や心配は不要ですよ。

唯一気がかりなのは、二人の別れ間際に波音さんがニヤリと笑ったことくらいでしょうか。

で、今に至ります。

時間は何だかんだで四時すぎです。少し遅くなりましたが問題ないと思います。

嫌がる波音さんを電車につめて、いつものようにニッコーリマートによります。

晩ごはんたるしょうが焼きの材料を買い、ついでに義姉さんの好物であるアロエヨーグルトなども買っておきます。

物で釣るといっのはあまり好きじゃないのですが、おそらく遅くなったことをぶちぶち怒っているであろう義姉さんを懐柔するには必要不可欠なものでしょう。

怒っているようにみせて、心の中ではいつも笑顔を絶やさない。太陽のように、ひまわりのように、底抜けに明るい彼女はぶつぶつと文句を言いながらもきつと僕を許してくれる。最後には笑顔をを見せてくれる。

そう、思っていたんです。

「……一人に……しないで」

義姉さんの涙を見るまでは。

第四話 放課後でいず おまけと絶対守護人形（後書き）

わかっていたんです。知っていたんです。
もしかしたら、こうなってしまうのではないかと。

僕はきつと、忘れたかっただけなんです。
僕の罪と義姉さんに負わせた心の傷を。

次回『おそく起きた朝に』

…僕の護りたかったものは

第五話 おそく起きた朝に

少年は夢を見ました。

それはとても懐かしい夢です。

大きな大きな家がありました。おいしいおいしいご飯がありました。そして何より暖かい家族がありました。

まるで絵本の中のようなそれは、孤児院にいた頃から求めていたモノで、大好きな人に恥ずかしさに顔を赤らめながらもつい話してしまうほど夢と希望に満ち溢れた青写真。

それが突然に叶ってしまったのです。少年は純粹に、ただ純粹にそれを喜びました。

ゆつくりと、歯車が動き出したのにも気づかずに。

まどろみの中から完全に目を覚ましたのはつい先程のことでした。いつもと違うところに置いてあるデジタル時計に目を向けると七時三十分と表示されています。

あれ？ タイトルと違うよ……ゴニョゴニョ。

脳内自動ツツコミ機能を解除してぱーっと天井に視線を這わせる僕ですが、不意に隣でもぞもぞと動く気配を感じました。

「……んんん」

寝言と言いますか呻き声と言いますか、そんな声をあげたのは僕の腕の上で眠る義姉さんです。
僕たちは今、義姉さんの部屋にある少し大きめのベッドで横になっ
っているのです。

やや……、一応説明しておきますが僕たち、服は着てますからネ
？ と言いますか二人とも制服なんですが。
結局、あの後そのまま寝ちゃったんですね……。

腕の上でうごめく髪感触にこそばゆさを感じながら空いた方の
手を義姉さんの顔に近づけます。
涙の痕が残っている頬をなぜ、少しだけ罪悪感に苛まれます。

『一人に……しないで』

胸にズキンと痛みが走り、たまらずに義姉さんから視線を外しま
す。

『護るから……今度は絶対に、ボクが護るから』

無責任に言い放った約束事が頭の中をぐるぐると回っています。
僕はきつと、それを言うことで少しでも自分の中の罪悪感を和ら
げようとしたのですよ。

義父さん、義母さんが死んだという情報が流れてから、関係者の
人たちの搾取が始まるまではそれほど時間はかかりませんでした。
まるで最初からそうなるのがわかっていたような手際の良さで債

権や株式、その他を僕たちの知らないところで根こそぎにしていきました。

子供であり、経済的な知識など皆無に近かった僕たちでしたから、なすすべなくそれらを喰い破られ、蹂躪されていきました。

メチャクチャにされたのはなにも資産だけではありませんでした。心も、それに引つ張られるように体も。

時計の秒針のように確実にゆっくりと。

掌の中の砂のように確実にゆっくりと。

気が付けば僕の前には倒れている義姉さんがいて、僕は膝をついていました。

『一人に……しないで』

その時、義姉さんが漏らした一言は、僕のその後の人生を決めました。

…ダメじゃないですか。

ぼつりと、頭の中で考えていたことが口からこぼれました。

わかっていたはずです。

義姉さんがあの一件以降精神的に脆くなっていることを。たまに幼児退行のように幼い部分を見せることを。

なのに、僕は……僕は……

「そんな悩まなくてもいいんじゃないか？」

思考の渦に飲まれそうになった僕に、聞き覚えのある男性の声が掛かりました。

声の発信源、先程まで閉まっていた部屋の入り口にはキツネ目にビシッと決めた黒髪、それと対照的によれよれのスーツを着こんだ長身の男性がコーヒークップを片手に壁に寄りかかっていました。

「久しいな、坊。一年ぶりくらいか？ 相変わらず女難の相が浮かんでるぞ」

…余計なお世話ですよ竜也さん。あと最後に会ったのは二ヶ月前です。

そうだったっけか、と笑いながらトレードマークのキツネ目をさらに細めて笑うのは僕たちの恩人、この家や日々の生活費を他の人たちから守り抜いてくれた義父さんの側近である水無月竜也さんです。
みなづきりゅうや

「坊にしては珍しいな、こんな時間まで眠ってるなんて」

…土日くらいはゆっくり寝かせてください。

「ハハ、なんか言うことがジジ臭いな」

…放っておいてください。

昨日は金曜日でした。新学期始まってそうそうに土日と二日休めるのは嬉しいことです。

特に今日みたいな日は、です。

「それにしても、その、なんだ……？」

…どうかしましたか？

眉根を寄せて微妙な顔をする竜也さんに僕は自由になっている首

だけを傾げて聞いてみます。

「坊も意外と大胆なんだな。義姉の部屋に夜這いとは……。しかも制服プレイだと？　ちくしょう……羨ましいぞ、ちくしょう……っ！」

「いやいやいやいや、もうどこから説明すればいいかわからないんですが。てかもう最後の方は僕もツツコミきれませんからねっ！？」
「しかもだぞ！？　そういうオプシヨンは別料金発生 of システムがあつてそれがまたけっこう高いんだ。けど一度それを体験すると俺の「ピヨピヨ」が「ピヨピヨピヨ」で……」

事のあらましを説明しようと試みましたが残念。僕の話の聞かずに竜也さんはぶつぶつとなにかを呟いています。

ちなみに「」内は不適切な発言だったのでピヨコの鳴き声を被せておきました。かわいいですね。

この小説のジャンルが変わってしまう前にどうにか止めなければ、と頭を捻っていると援軍は思わぬところからやってきました。

「ん……んんん………」

義姉さんが漏らした寝言です。

それに気付いた竜也さんはぶつぶつと呟くのやめてこちらに向き直ります。

「……こんなところで騒いだら嬢のこと起こしちゃうか。とりあえずリビング行くぞ」

心持ち、声のトーンを下げた竜也さんに従い、腕を義姉さんの頭の下から引き抜いて替わりに枕を入れます。

最後に義姉さんの寝顔を見ると、どこか悲しげな表情をしている、気がしました。

コーヒーの香ばしい匂いがキッチンを占領するなか、それを切り裂いたのは僕の話の黙って聞いていた竜也さんでした。

「ふむ、それで結局お前はどうしたいんだ？」

新しく入れ直したコーヒーに砂糖を大量投入しながら竜也さんが僕に話を振ってきました。

僕たちの事情をおおよそ把握している竜也さんに説明をはじめて十数分。話しながら気持ちの整理をしようとしたのですが……。

「正直、どうすればいいのかわからないんです。

「ま、そうだろうな」

僕が漏らした一言に、気抜けするほどあっさりと竜也さんが肯定しました。

なんとなく怒られるかと思っていただけに意外でした。

「別に坊を怒る必要はないだろ」

僕の顔色から心中を察したのか、そんなことを言いながらコーヒーカップに口をつけました。

「やりたいことなんて分からないやつの方が圧倒的に多いんだ。何だかんだで就職なり恋愛なりして過ごしちゃいるがみんなそれを本

当に求めちゃいないからな」

…そんなものですかね？

「そんなもんさ。人はそういうジレンマの中で生きてるんだ」

コーヒーがまだ苦かったのか、はたまた嫌なことでも思い出したのか、苦い顔をして言葉を吐き出す竜也さんは虚ろげな瞳で天井を見上げています。

…実験ですか。

「まあ……肯定だな。あの人達に拾ってもらうまで、俺もぼちぼち悪いことに手を染めてたんだ。生きるためにな」

あの人　義父さんと義母さんのことでしょう。あの人たちは底抜けにいい人たちでしたからきつと竜也さんもお世話になったんでしょうね。かくいう僕も、お世話になりっぱなしだったんですが。

「坊の人生はまだまだこれからだ。もちろん嬢もだが、まだ考える時間は山ほどあるんだ。なら考え続ける。自分の生きる道と、嬢との関係をな」

…考えても答えが出なかったら？

「出せ。それが坊、お前の命題だ」

いつものようにひょうひょうとしながら、それでいて強い調子で竜也さんが断言します。

話はそれで終わりだと言わんばかりに鼻を鳴らしてコーヒーカップに口をつけましたが、その中身が無くなっていることに気付いて立ち上がりました。

いつもとどこか雰囲気が違う竜也さんの姿を見て、僕は少しだけ考えた後に口を開きました。

…竜也さん。

「なんだ？」

…シリアスは似合いませんよ。

「うるせーよ！ わかってるよ！」

僕の言葉に先程以上に苦い顔をして怒鳴る竜也さんでした。

なんやかんやで竜也さんは自作のコーヒーを飲み干して帰っていききました。

相変わらず元気な人だなあ、と呆れると同時に感謝の念も沸いてきます。

たぶん僕らの状況をどうにか知って、わざわざ朝早くから駆けつけてくれたのでしょう。

そういうお節介なところも昔と変わりません。
けど、本当に……ありがたかったです。

…よいしょ、っと。

腰を上げ、空になったコーヒーカップをカチャカチャと音を立てながらキッチンに運んでいきます。

早く洗わないと食器にコーヒーの跡がついちゃいますからね。

水音。食器の音。外から聞こえてくる子供の声。

色々な音が混ざりあって、それでいて静寂を称える奇妙な時間が過ぎていきました。

…こんなところでしょうか。

タヌキのアップリケが付いているエプロンを外して手を拭きます。
テレビの上に乗っている時計はいつの間にか十時を過ぎています。
何となく主婦の悲哀を感じながらご飯の用意をするか思考します。
お米だけでも炊いておきましょうか？ あー、けど……。

義姉さんの昨日の様子を思い出して、少しだけ心が折れそうになりましたが同時にあの様子だと夜ご飯は食べていないだろうとも思いました。

……。

よし！ 今日のお昼は冷蔵庫の大掃除と称して思い切り豪華にいきましょう！

グツと握りこぶしを作って気合いを入れたところでリビングのドアがやや乱暴に開きました。

竜也さんが帰った今、この家にいるのは僕と義姉さんだけで、そのドアの向こうに立っているのはやっぱり義姉さんです。確かに義姉さんなんです……。

…な、なぜに麦わら帽子……ですか？

「海賊王に、私はなる！ ……じゃなくて」

水色のワンピースに麦わら帽子と典型的な夏ファッションな義姉さんに、今は秋だと教えるべきか悩んでいると、当のご本人である義姉さんはビシッと北の方角を指差しています。

「野郎共ッ！ 海に行くわよ！」

…そっちには山しかありませんよ。

「帆を張れ！ 酒を用意しろー！ ヤイサホー！」

僕のツッコミを華麗に無視する様は、まさに海賊王のそれでした。

第五話 おそく起きた朝に（後書き）

用意を済ませました。

日焼け止め、ピクニックシート、おにぎりに水。

濡れてもいいように替えの靴下をリュックに詰め込んだ所で僕は思わずため息を吐いてしまいました。

…何にせよ、元気になってくれるのなら問題はないのですが。

次回『海と夢のあとに』

…義姉さん、スイカは持っていきませんって。

第六話 海と夢のあとに

交錯する思いは、届いているようで届かず。

伝えたい言葉は、口に出せているようで出せず。

届けたいぬくもりは、稚拙な行動でしか現せず。

振り切ったと思った過去は、いつまでもあなたの目の前に立ち塞がり続ける。

……まるで、あなた自身の墓標のように。

「うわーっ！ 広い！ 広いよ海！」

砂地に足を取られながら歩く僕の前で、齢十七になる義姉さんが非常に新鮮なリアクション取っています。

少し恥ずかしいのですが、それくらいいい反応をしてくれると連れてきたかいがあるというものです。

それにしてもです。

…意外と人が多いですね。

「そだねー。しかもカップルばかり」

そうなのです。すでに秋だというのにこの砂浜には意外と人がいて、なおかつそのほとんどがカップルなんです。

なんと言いますか……、目のやり場に困る光景です。

…有名なデートスポットだったりするんでしょうかね？

「そ。この前テレビでやってたんだよ。静かでキレイな穴場だ、つて。やっぱりデートスポットになっちゃってたね」

…分かってて来たんですか？

「分かってて来ました！」

風で飛びそうになった麦わら帽子を押さえながらニヤリと笑う義姉さんを見て、思わずため息が漏れます。

…なんでまたそんなところに

「いいじゃん、いいじゃん。たまには”でいと”しようよ！」

一見ふざけた様子の、それでいて一切含みのない義姉さんの言葉に心臓が一瞬、凍りつきました。

「……ん？ どしたの？」

…な、何でもないです！ 荷物を置く場所を探しましょう！

内なる動揺を見透かされないように顔を逸らして辺りを見回します。

そんな僕の些細な抵抗は義姉さんの次の行動で見事に打ち崩されます。

僕の腕をぐいと引き寄せると、そのまま抱きついたのです。

「あつちなんて空いてていいんじゃない？」

…あ……あう。……え、ええあそこにしましょうか。

「んん、どうしたのかなあ？ そんな玉のような汗をかいてえ？」

…にや！？ や、やめてください！ 耳はッ！ 耳わぁッ！！

何というか、形容しがたい妙な感情と闘っている僕の耳を義姉さんの息がかかります。

全身の毛が逆立つような感覚に身震いが止まらず、同時に顔が赤く染まっていくのが自分でもわかりました。

「気持ちいいくらいの反応だねえ。義姉さん”いぢめ”がいがあるよー」

…のおおおおおおおお！！

身を擦って逃げようにも捕縛された腕が抜けずに奇妙な踊りを踊っています。

あれ？ ものすごく既視感が……？

「んふふ、もう少しいぢめてもいいんだけどとりあえず座ろっか」

ひとしきりくすぐられた後、義姉さんが僕を引きずるように空いている場所に連れて行きました。

何か……、何か大切なものを失った気分です。

「んんんん、潮の匂いつてたまに嗅ぐと気持ちいいよねえ」

…まあ、そうですね。

僕が引いたピクニックシートの上に座って何事もなく笑う義姉さんにどんな表情かおをしていいか分からずに微妙な顔で微妙な相づちを打ちます。

「……笑えばいいと思うよ」

…ほつといてください。

「ぷはっ！ 冷たいなあ」

楽しそうに笑う義姉さんの隣に座ると、視界にはどこまでも続くような海が広がっていました。

なるほど……確かに穴場ですね。

思いのほか綺麗な景色に思わず息を飲みます。

「……前に海に来たのは施設にいた時だっけ？」

…そうでしたね。随分前に行ったきりだったんでしたっけ。

「…そかそか。やっぱりいいね、海は。私は山よりも海派だよ」

…山は暑いですからね。

苦笑いしながらいつものように、どうということもない会話をします。

何も海でそのような話をしなくてもいいかもしれませんが、何となく幸せです。

少しだけ沈黙が落ちます。

波が寄せては返し、寄せては返し。何回かそれを繰り返した時、義姉さんが口を開きました。

「……ごめんね」

一瞬、何故謝られているのか分かりませんでした。それが昨日のことだと思いつくまではそれほどかかりませんでした。

「あの日の朝にね、すごく怖い夢を見たの」

話し始め、すぐに俯いてしまった義姉さんの表情は、長い髪と麦わら帽子に隠れて窥えません。

僕の手すぐ隣にある義姉さんの手は小刻みに震えていました。

「一人きりになっちゃう夢だったんだ。みんななくなっちゃって、暗闇に一人取り残されちゃう夢」

子どもみたいだね、と呟いて少し笑う義姉さんはそのまま話を続けます。

「……けど、朝起きてヒロの顔見たら、そんなこと忘れちゃって。ああ、ヒロはいつも隣にいてくれるんだって思ってた」

手の震えが少し大きくなります。まるで何かに脅えるように、力タカタと震えています。

「だから、ヒロと離れるのがすごく怖かったけど、サキもいるし他にもいっぱい友達もいるから怖くないって言い聞かせて学校に行きたんだ」

ぼたぼたと何かが落ちる音がしました。たぶんそれは

「サキと別れて、家に帰って。しばらくは大丈夫だったんだけど、ちよつとしたら震えが止まらなくなって、涙が止まらなくなって…

……」

風が吹いて、義姉さんの麦わら帽子が飛ばされました。

「もしかして、このままヒロがいなくなっちゃうんじゃないかってあの夢が本物になっちゃうんじゃないかって。本当は私のことわす

らわしく思つて、そのまま帰つてこないんじゃないかって。怖くて怖くて……！」

…僕はここにいます。

震えている義姉さんの手に触れます。手がぴくりと跳ねて、やがて落ちていたのが震えが止まりました。

「けど……」

…けどもクソありません。僕は今、あなたの　　アキの隣にいて話を聞いて、話しています。

少し、汚い言葉使いましたがそんなこと構つてられません。

僕は竜也さんに会つてから……いえ、そのずっと前から考えていたことを口に出しました。

…僕はアキの隣からいなくなりません。例え何が起ころうとも、アキが望むなら、僕はいつだってあなたの近くにいて、あなたの手を握ります。だから……

握った手に少し力を入れて、ハッキリと義姉さんに向けて言います。

「泣かないでください、お願いします」

嗚咽に震えていた義姉さんの身体が、ピクリと止まりました。不意に空いていた右の手を引っ込めると、ぐいぐいと顔を拭い始めました。

「……そだね、ごめん。ありがと、もう大丈夫だよ」

上げられた顔には少しだけ砂がついていましたが、浮かべられていたのははにかんだような笑顔でした。

そして自然な動きでコテンと僕の肩に寄りかかってきました。

…え、えーとこれは。

「……充電中です。バッテリーを抜き差ししないでください」

どきまぎしている僕をよそに、義姉さんは目をつむったままじっとしています。

若干、声が上がっているように聞こえましたが何なんでしょうか？

雨が降る気配もないのに雲がかかった太陽を見て、少しだけため息を吐きました。

ありがとね、ヒロ。

『僕はいつだってあなたの近くにいて、あなたの手を握ります』

ヒロは優しいね。

私、本当に嬉しくて。

けど、少しだけ悲しくて。

たぶん、ヒロは私のことを思って、私のためにそう言ってくれたんだよね。

けどね、ヒロ。私が本当に聞きたかったのは、そんなことじゃないんだよ。

私が聞きたかったのはヒロの本当の気持ちなの。
嫌いでも、好きでも。何でもよかった。

ヒロ、あなたは優しすぎるよ。

第六話 海と夢のあとに（後書き）

誰が泣こうとも世界は淡々と廻り続ける。
誰かが辛くても世界は黙々と歩み続ける。

……人の想いなど顧みず、日常は再び動き出す。

次回『学園の大会長』

お楽しみに。

第七話 学園の大会長

大会長、それは尊きもので、崇められる存在である。

大会長、それは全ての生徒の代表であり、生徒会長の中の生徒会長である。

大会長、それはあらゆる手段でもって、学校をより良い方向に進める人間である。

大会長、間違っても大怪鳥ではない。決して、桃色のアイツではない。

…えーと、どうしたんですか？ タロ君？

「何でもない。ただ、ただただ申し訳ない」

…いやいやいや、土下座とかしちやってる時点で何でもないのかな
と思うのですが。

土日が過ぎ、いつものように学校に来て教室に入ると、僕の隣の席でタロ君が土下座をしていました。

状況がつかめません。現時点でわかるのはタロ君の謝罪対象が僕であることと、その理由が彼を土下座に駆り立てるほど重いものだけだということです。

…何かあったんですか？

「何があつたかは言えない、殺されるから。……あと新宮、お願いだから黒板消しはやめてくれ」

すでに頭が三色くらいになっているタロ君が、波音さんのサイコキネシスで宙に浮く黒板消しを必死に止めようとしています。

「…ヒロ君イジメたら、ダメ」

「ぶはっ！ だから俺のせいじゃないんだって！」

顔面に黒板消しが直撃したタロ君はそれでも何とか弁明しようと四苦八苦しているわけですが、波音さんはそれを聞き入れません。まあ、このまましばらく放っておいてもよいのですが、さすがに気の毒なので波音さんにストップをかけます。

「お願いだ。もう少しはやく止めてくれ……」

…まあ、あまり愉快な話でもなさそうなのでこれくらいは前もって。

「…当然」

落ちついた波音さんの頭をなでつつポケットからハンカチを取り出してタロ君に差し出します。

無然とした顔でそれを受け取って頭を拭くタロ君はふと諦めたような表情でため息を吐きます。その様子を見て何となくピンと来ました。

…まさか『あの人たち』が動き出したんですか？

「まあ……そ、その何だ。俺から何とも言えないなあ」

明らかに動揺している様子のタロ君に僕は確信を深めます。
タロ君が話したがないのは、『あの人たち』のことですから盗

聴器の一つ二つ自分に仕掛けられていると踏んでいるからでしょう。
ちなみに先程からどこぞのボスキャラみたいな呼び方をされているのは……

「おはよー、どうしたの？ 朝からそんなに騒いで」

「おはようございます。それにしても……チョークの粉が凄いいんですが……」

声をかけられた方を向くと、キョトンとした表情の真君と茜さんが並んで立っていました。

登校したばかりだと思われる二人を見て、逆に僕が目を丸くします。

「おはようございます。……ところで今日は二人で学校に来たんですか？

「ん？ うん、そうだよ。それがどうかしたの？」

僕は苦笑いを浮かべて首を横に振ります。

（一応）クラスの人たちには付き合っていることを隠していたので、二人と一緒に学校に来たことはありませんでした。もちろん何人も集まって登校した時には一緒になることもありました。

その二人が急に一緒に登校してきたのですから、この休日に何か転機となることがあったのは想像に難くないわけですが……

「……作戦、通り」

ポソリと呟いた波音さんの言葉を聞いて、この裏で暗躍している人物が誰なのかは何となくわかりました。

とは言え、それが結果的にいい方向に進んだのは目の前の二人を

見ていれば明らかなわけですからその行動を咎める必要はないでしょう。と言いますか、僕も過去の話なんかしちゃって真君を焚き付けてしまったわけですから何も言えません。

「…共犯、共犯」

何も言えません。

取りあえず、憂さ晴らしに波音さんの頬をビヨンビヨンと引っ張っている、不意に校内放送を知らせる軽やかなチャイムが鳴りました。

基本的に校内放送は重要なことを伝えるときにしか使われないので、自然、クラスの中に静寂が落ちます。

『……えー、テストテスト。っとオーケーですね……。はい、ではこれから呼ぶ人は急いで生徒会室に来てくださいねー』

どこか気抜けしそうなほど明るい声が静かになった教室に響きます。

何となく場違いなその声に教室が少しざわつきます。

気のせいでしょうかね？ 胸騒ぎが治まりません。

『一年の橘くん、至急生徒会室に来てください。生徒会長が呼びですよー』

じゃあねー、とフレンドリーに校内放送が終わりました。

ふと、隣を見るとタロ君が再び土下座していました。

とりあえず生徒会室の前まで来たわけですが、何かもう、猛烈に帰りたいです。

…失礼します。

とは言え、そんなことは出来ません。

この学校の生徒会長殿は圧倒的な知識と人脈でもって一年後期に前会長を蹴落とし、その後釜に就任。以後、今に至るまで（会長さんは現在三年です）独裁政権を続けているわけです。

当然ながらそのような強硬な行動はあらゆるところで敵を作るのですが、それら反抗勢力をさらにあらゆる手段にて撃破していきました。

現在に至っては、何人かの教師を裏で操っているとかいけないとか。実質、学校を牛耳っているのはあの人なのでしょう。

そんな人に呼び出されているわけですから、逃げるにも逃げられません。

「あ、ヒロくん！ 久しぶりだねえ」

…お久しぶりです、奏さん。とりあえず放してください。苦しいです。

扉を開けざま、おっとりとした顔が印象的な茶髪の女性が手に持ったティーカップを置いて抱きついてきました。

僕も男の子ですから、こういったスキンシップはやめてほしいです。義姉さんにも常々言っていますが、女性はそんな簡単に男の人と触れ合っちゃいけないんですよ？

「だって久しぶりなんだもん。遊びに来てって言ったのに全然来な

いし」

…タロ君に迷惑がかかってしまいますからね、しょうがありません。

室内に視線を巡らせると、白猫が眠っている大きな机に向かってパソコンのキーボードを叩いている眼鏡をかけた金髪の女性に行きつきました。

僕のその視線に気付いたのか、その女性が顔を上げました。

「久しぶりだな、義弟君。おとうと大きくなったものだ」

…お久しぶりです、琴音さん。あと、前にも言っただと思いますが、その『義弟』というのやめてもらえませんか？

「何故だ？ 奏の伴侶となる相手を義弟と呼んで何の問題があるというのだ」

…問題山積です。

「私には無いけど」

…僕にあるんですよ。

ため息を吐きながら、とりあえず奏さんを元いたソファアに座らせ、慇懃に気をつけの姿勢などとってみます。

二人の顔を見て、僕は改めて心の中で思っただけです。ああ、似ていないな、と。

伊田奏さん、いだかなで二年生。茶髪をカチューシャで止めオデコ面積が広い方です。ちなみに副会長さんです。いだことね

伊田琴音さん、三年生。長い金髪をなびかせて目つきが鋭い方です。さながらその雰囲気はライオンでしょうか。言うまでもなく會長さんです。

苗字を見ればわかると思うのですが、タロ君のお姉さんたちです。

「ふむ、奏が気に入らんか……。姉の私が言うのもおかしいが奏はいいぞ、性格とか身体とか感度とか」

「やだなあ、お姉えーったら！」

…もうツツコミを放棄してもいいでしょうか？

なんと言いますか、無性に泣きたくなってきました。

…それで、用件はなんでしょうか？ もうすぐ一時間目が始まってしまうのですが。

「ああ、その件は安心してもらって構わない。後々教師の一人でも脅せば済む話だ」

何か今、さらっと恐ろしいことを言いました。

とりあえず今のことは全力で忘れることにします。

「我が校がこれから冬に向かって行事が詰まっているのは知っているな？」

…ええ、まあ、知っていますが。

突拍子のない琴音さんの言葉。僕は思わず目を丸くして返事します。

一昨年までは夏に体育祭をやって秋に文化祭をやる、というスタイルだったらしいのですが、昨今流行りの地球温暖化なる理由から夏の体育祭は秋に変更になったのです。

そのため、現在は秋と冬の間で学校の二大行事を消化しなければならなくなり、『殺人ローテーション』などと揶揄されるほど厳しい日程となっているのです。

「で、だ。本題なのだが、義弟君にはそれら行事の警備監督をして

もらいたいのだ」

…は、はい？

「何、手駒の心配ならいらん。部下には私の私兵も出す」

眼鏡の奥に怪しげな光をたたえてニヤリと笑ってとんでもないことを言い出した琴音さんに、思わず口ごもります。

「最近、物騒な輩が多くてな。変質者や他校の生徒に良いようにされては我が校の名誉に関わる」

…な、何で僕なんですか？ 僕はまだ一年ですよ？

「上に立つ者の年など、重要な物ではない。要はそれらを纏め上げるだけの能力があるかどうかだ」

…僕にそんな能力があるわけ

「いや、あるな。義弟君には人を魅了するカリスマ性がある。音楽祭での君の裏での働き、新宮波音の暴走抑止、及びクラスへの順応化、悪漢への大立ち回り……どれも凡人なら何も出来ずに立ち尽くすだけであろうそれを、君は立ち向かって解決した。それは非凡と称しても過言ではない」

一息にそう言うと、琴音さんは僕をじっと見つめます。

何でしょうか……、少し動揺します。

「故に、奏の婚約者に相応しい」

もつと動揺しました。

もはやどこからツツコミを入れればいいのか分からないので、とりあえず華麗にスルーします。

僕がスルーするのを気配で察したのか、なかなかやるな、とぼそりと呟くと琴音さんは僕をじっ、と見据えてから視線を外し、口を開きました。

「では、警備監督の件、よろしく頼んだぞ。詳細は追って報告する」
…え？ 僕の意見は無視なんですか？

「ああ、問答無用で無視だ」

机の上に置いてあるパソコンの画面を見ながら、決定事項だと言わんばかりに淡々と話す琴音さんは不意に顔を上げ、僕の顔を見てから盛大に顔をしかめます。

僕の不満げな顔が気に入らなかったのでしょうか。ですが、時には僕とてこんな顔をします。理不尽な決定がなされようとしている時なら尚更です。

「今回、我が校に体育祭の喧騒に紛れて乗り込もうという計画を建てている不逞の輩の情報が事前に入っている。義弟君の友人の神津クイナ嬢は優秀だな」

…えっ？ ええ、そうですね。

思わぬタイミングで思わぬ人の名前が出てきたので、驚きのあまりすつきりとしなない返事を返してしまいます。

クイナさん、そんなアグレッシブな行動をとってたんですねえ…。

本人は空回りしていたと言ってましたが、その結果、生徒会に貸しをつくったのですから驚嘆すべき行動力です。しかもただの生徒会ではなくこの学校の生徒会です。その貸しがいかに大きいものか、考えるまでもないでしょう。

とは言え、僕は普通のスクールデイズを送りたいのです。余計なことに首は突っ込みたくはないのです。

…それで、何なのでしょう？

「『帝稜高校』。聞いたことない？ 割と有名なんだけど」

…帝稜ですか？ えー……あつ。

「覚えがあるだろう。義弟君がぼつこぼつこのめつためつたにした連中だ。駅前のファーストフード店と商店街の路地裏だったか？」

何でそんなことまで……。それに路地裏の件はクイナさんが教えたとしても、ファーストフード店でのことはクイナさんは学校に行っていたのですから知らなかったはずですよ。と言いますか、どつちかというと暴れたのは僕ではなく茜さんです。

「あれだけ大っぴらに暴れたんだ。クイナ嬢がいなくとも情報は回ってこよう。ちなみにあのチェーン店の経営をしているのは私の遠い親戚だ」

…そうですか……。つてさらつとすごいこと言いましたね。あのファーストフード店、全国チェーンですよ？

「今更だな。我が家も、昔の君の家までとはいかんが名家だからな」

心底つまらなそうに琴音さんは鼻を鳴らしました。

自分の家が有名なことに一切興味がなかった様子です。

…では、あの豪気な店長さんは？

「あれは店長ではなく取締役だな。ああして神出鬼没に出現しては社員と共に働きたすのだ。管理職は暇らしい」

なるほど……。あれだけ豪気な人はそうそういないと思っていましたが、変わり者が多いと言われる伊田家の関係者というならば納得です。

「愚弟は凡庸だがな」

…愚弟はかわいそうですよ、さすがに。

琴音さんは殊更冷やかにタロ君のことを罵ります。その口元が三日月描いていることから、彼女がいかにタロ君をいぢめることに命を賭けているかわかります。

「愚弟のことは置いておいて、本題に戻ろう。つまりその帝陵の者が我が校に攻め入ろうというのだ」

…まさか、僕への
「復讐でしょうねー」

優雅に紅茶を啜りながら奏さんがにつこりと笑います。

実際問題、笑いごとではありません。

…僕のせいで他の誰かを巻き込んでしまうのは非常に忍びないのですが……。

「あまり気に病むな。あの高校の風紀の乱れは酷かったからな、遅かれ早かれこのような結果になっていたろう」

僕が頂垂^{うなだ}れて過去の過ちを後悔していると、珍しく琴音さんのフオローが入りました。

それに驚いて顔を上げると、そこには不敵な笑みとともに、モノアイばりに光ってやまない眼光のお二人がいました。

「けど、可哀想ですねえ。お姉えの世代に学校に攻め入ろうなんて」「ああ、後悔してもらおうじゃないか。……それこそ、母なる海（羊水）に還りたくなるくらいにな」

嗚呼、今、何か殺人予告めいた言葉を聞いた気がします……。

本当は止めるべき現場なのでしょうが、僕にはいささか荷が勝ちます。

「うっふっふっふっふ……」

「くっふっふっふっふ……」

もう、本当にごめんなさい……。

未だ見ぬ帝陵の皆さんに、心の中で深く謝罪しました。

第七話 学園の大会長（後書き）

心なしかふらつく足取りで教室に戻ります。

教室の後ろから、しずーかに入室して席に着こうとしたところ、一時間目の社会の先生と目が合って……逸らされました。

琴音さん、あなたは先生のどんな弱みを握ってるんですか……？

次回『第一次お弁当戦争』

お楽しみに……。

第八話 第一次お弁当戦争へ勃発編

日本には『家事のさしすせそ』なるものがある。

曰。裁縫。

曰。躰。

曰。炊事。

曰。洗濯。

曰。掃除。

まあ、ベタと言えばベタであるが、これらを完璧にこなしてみせるのは決して容易なことではない。

今回のお話はこの『さしすせそ』の中の『す』に悪戦苦闘しながらも、果敢に勝負を挑む乙女たちの物語である。

なんと言いますか、形容しがたい妙な思考が頭を駆け巡っています。

いうまでもなく、そのメランコリックな気持ちの原因は琴音さんと奏さんに押し付けられたアレのせいなのですが、押し付けられるに至った理由が自分にあるのですから、何かぶつけようのないもやもやとした感情が僕の中でくすぶっているのです。

止まる気配のないため息に、自分自身びっくりですよ、はい。

僕は視線を手元から窓の外へと飛ばします。

青い空に薄い雲のコントラストが素敵です。都会のなかでもこれほど美しい風景が見られるんですね。忙しい日常では見落としがちですが、改めてこうやって見ると日常の一風景も一枚の絵画になれるのではないでしょうか。

そう考えると、自然と笑みが浮かびます。

あつ、小鳥が飛んでますよ？　かわいいですね。

「……や、現実逃避中に悪いんだがノールックで野菜を切るのはやっぱり危ないと思うんだが」

「あ、すごい。見ないまま鮭切りだしたよ」

……ん？　どうしたんですか？　そんな微妙な顔をして。

隣でエプロンと三角巾を着けたタロ君と真君が僕を気の毒なものでも見るような目で見ています。

手を拭きながら二人の方に向き直ると、目が合ったタロ君が苦虫でも噛み潰したような渋い顔をして口を開きました。

「……やっぱ大変か？」

……ぼちぼちです。若干眠いですが。

「少し眠いぐらいじゃ料理しながら寝たりしないと思うんだがな」

「お願いだから無理しないでね……」

僕の言葉と様子に若干苦笑しながらタロ君がレタスを水で洗い、真君が心配そうな声をあげながら危なっかしい手つきでジャガイモの皮を剥いています。

はい、もうここまでくればこの時間に何をしているのかはわかりそうなのですが、今の時間は家庭科の定番、調理実習なのです。お題は特にありませんでした。

事前に欲しい食材を報告して、男女別れて三、四人のグループを作り、好きなようにご飯を作れ、というひどくアバウトなものでした。

なので、今回は普段家事をしている僕が指揮をとることになったのですが、昨日、例の警備の配置について学校の見取り図を持ってきたくれたクイナさんと夜遅くまで頭を捻っていたので思い切り寝不足だったりします。

この学校の塀は軒並み平均よりも高いので、登って侵入するのは不可能のように見えますが、それこそ本気になればハシゴでも台でも置いてよじ登ることは出来ます。

そうなると正規のルートにだけ人員を割くことが出来ず、どうしても学校全体に人を配置しなければいけません。

ですが、人員にも限界があるのでしよう。風紀委員の方々を警備に回すからうまくやりくりしてくれ、と言われてましたが、一学年二十人、三学年合わせて六十人　その半分は女の子で人員として計算出来ないの、男の子三十人しか人手が見込めません。さすがに三十人程度では学校全体をカバーすることは難しいのです。

しかも襲撃が確実とあらば一人で見回りをしてもらうわけにもいきません。三人組、スリーマンセル或いは四人組で動いてもらわなければいけないでしょうから、実質、目が届く場所はさらに狭まります。

あちらが一点突破を目指してくる可能性、分散して一斉に攻め入ってくる可能性、はたまたどこにかして学園内に侵入して内外から同時に食い破ってくる可能性、などなど考慮して配置を決めると、どうしても警備が薄い場所が出てきてしまうのです。

一応、その旨を琴音さんと奏さんに伝えたのですが、『了解した』
としか言われずに割と混乱しています。任せられたからにはこれくらい自分で解決出来なければいけないんでしょうね……。

「ま、なんだ。あんまり大変なようだったら俺にも声をかけてくれ

よ。一応、身内が迷惑かけてるわけだしな」

「僕も。友達が辛そうなのは見てられないよ」

……んん。心配を掛けてしまい申し訳ありません。

ふと、気がつくと僕は自然に笑みを浮かべていました。

二人が僕のことを気遣ってくれているのが、申し訳ないと思う反面、すごく嬉しかったのです。

友達とは、いいものですね。

昔の僕は人と向きあうことを恐れていました。施設にいた頃は、話しが出来たのが義姉さんと園長先生くらいでした。

義父さんと義母さんに出会っても僕の人見知りはあまり改善されませんでした。初見の人とは口を聞かないどころか、目すら合わせない始末です。いつも義姉さんの後ろに隠れて様子をうかがっていました。

たぶん、自分のことを理解されることが、自分の心に踏み込まれることが怖かったんだと思います。

同時に、誰かを理解することをも恐れていました。誰かを理解することで、自分が自分を保つことが出来なくなるのではないかと考えていたからです。

まあ、今してみれば、何言ってるんだこのすつとこどつこいは！　とか思ったりもするのですが当時の僕は真剣にそんなことを考えていたのです。

結果、全てを失ってしまった時に誰にも相談が出来ず、塞ぎ込んだ僕は義姉さんを傷つけてしまったのです。

瘦せた腕。

閉じた瞳。

白い天井。

繋がった点滴の管。

僕が僕のしたことに気がついたのは、義姉さんが倒れてからしばらくしてからでした。

「んー…、お前やつばすごいぞ。そんな状態でも料理って出来るもんなのか？」

「心ここに有らず、って感じだね……」

…ふえ？ 何か言いました？

「んにゃ、何でもない。とりあえず包丁と火イ使ってたから気をつけるよ」

…え、はあ。

タロ君が苦笑い、というか呆れたような表情で手のひらを僕の方に向けました。

…えっと、何ですか？

「ほら、貸せよ。代わるから」

「じゃあ、僕はお鍋担当しようかなー」

…ええ？ しゃ、じゃあよろしくお願いしますね。

包丁だけでなくお鍋も真君に持っていかれてしまいました。

焦げないようにすればいいんだよね、とか、魚を捌くのはなかなか難しいな、とか言いながらガヤガヤと料理を始めた二人を見て、ようやく二人の意図に気付きました。

お気遣い感謝します……。

やっぱり、友達はいいものですね。

私は割と悩んでいた。

一応、生物学的には女になる私だが、家事全般はあまり得意な方ではない。特に料理は苦手な分野に入る。

”料理はセンスが必要である”

誰かが言った名言だ。全面的に同意せざるを得ない。

多分に私にはそういったセンスが欠如しているのだと思う。

一カ月ほど前に、卵一ダースを漏れなく産廃にしたところで私はようやくそれを確信した。

ちなみに作ろうとしたのはダン巻き卵だ。

「私は認めませんことよ！」

「…それでも私たちには何も出来ない」

「それでも認めたくないものは認めたくないのです！」

隣で先程からぎゃあぎゃああと騒いでいるのは巻き髪と喋り方がいかにもな感じのお嬢様 ほしごうめか 北条美佳だ。

ちなみにその目は、目の前で良妻賢母よろしく、エプロンを着けて料理を作り続けている長身の彼女 立川茜を睨み付けるように向けられている。

今更説明が必要とは思えないが、一応説明すると、今は調理実習の時間だ。

そして、私と巻き髪の彼女は何も出来ないどころか、手伝え間違はなく目の前の長身の彼女の邪魔になるため、大人しく椅子に座っているというわけだ。

まあ、本当に何も出来ない、というわけではない。

時折出る洗い物を洗ったりするなど、一応、現時点で私達に出来ることをやっているのだが、普段料理をしている人間はさすがに違う。最低限の洗い物しか出ないのだ。

詰まる所、暇なわけだ。

「貴女は悔しくないんですの！？ 私は悔しいですわ！ こんなところでも彼女に水を開けられていたなんて……っ！」

キーツ、とハンカチの端を嚙んで悔しそうにしている彼女を見てから、鼻歌まじりにリズムカルに包丁を扱っている彼女を見る。

まあ、何というか、器が違うのだなと思った。

とはいえ、そんなことを迂闊に口に出す程、私は空気が読めないわけではない。ここは黙って生温かい視線を送るべきなのだろう。彼ならたぶんそうするだろうから。

はたと気がついてその彼に視線を移す。

今日は彼にしては珍しく何やら眠そうな顔をしていた。心を覗いてみたところ、思考も纏まっていなかったから、相当なのだと思うが。

…彼は虚空を見据えながら包丁を握っていた。

いや、もう言うまでもなく危ないのだが、それでいて危なげなく野菜を切っていた。

手際の良さは熟練の主婦を思わせる。

……ちよつと悔しくなってきたかも。

「あら！　ようやく貴女もその気になったようね。やはり一人の女としてこんな所で遅れを取るわけにはいきませんことよ！」

「……………」

私の手を握って目に炎を浮かべる巻き髪の彼女に、周囲から冷たい視線が注がれている。

何かと長身の彼女に突っかかる巻き髪の彼女とその取り巻き達、という構図はこのクラスになってから一ヶ月後にはすでに出来上がっており、今までに挑んだ対決の数は十や二十では足りない。

三人寄れば文珠のなんと、とは言うものの、長身の彼女のスペックはちよつと異常だ。前に言ったような気がするが恋愛沙汰と蛙以外はあらゆる分野において隙がない。

まあ、そうなるとアンパンのヒーローに毎度懲りずに吹き飛ばされるバイキンの悪役、という予定調和的な関係が生まれるのは想定範囲内であり、たぶん、卒業まで変わることのないパワーバランスなのだと思う。

「あの娘をギャフンといわせる方法……」

とは言え、巻き髪の彼女も中々に頭が切れる。

それこそ、名家の跡取りとして恥ずかしくない程度にはあらゆる能力がある。

問題があるとするならば負けん気が強すぎることで、次のパートナー候補が私だということくらいだ。

「そう……、そうですね！　来週の体育祭でお弁当対決をしましょう！」

巻き髪の彼女は、まるで名案でも思い付いたといった様子で手を打つと、瞳に宿した炎を更に激しく燃え上がらせてそう高らかに宣言した。

…斯くして、巻き髪の彼女と巻き込まれた私の、限りなく勝ち目の無い、薄氷の上でランバダでも踊るような戦いが始まったのだった。

悩みの種がまた一つ増えました。

よく茜さんに突っかかつては返り討ちにあっている北条美佳さんが、
またも茜さんに勝負を挑みました。

それだけならばさほど問題はないのですが、何故か僕がスペシャルアドバイザーSAとして呼ばれてしまいました。

何でも、今回のお題目は体育祭に持っていくお弁当らしく、僕が家で家事を一通りこなすことを知っていた美佳さんが僕に、料理を教えてくださいませんか、と打診してきたのです。

本来ならば、そんな荷の重い大役は丁重にお断りするところなのですが、今回はお手伝いをさせて頂くことになりました。

何故そんな依頼を受けたのかですが、常に真正面から、決して諦

めずに何度でも挑戦していく美佳さんの姿勢に心打たれたというの
もありますが、実は他にも理由がありました。

まあ、やるからには全力でサポートさせて頂きます。

何故かむくれている様子の波音さんの頭を撫でつつ僕は携帯を取
り出しました。

「…ヒロ君が携帯を持つなんて珍しい」

不機嫌そうな表情が少し和らぎ、代わりに不思議そうに目を細め
て波音さんが首を傾げました。

「誰にかけるんですの？」

…援軍です。僕よりもよっぽど頼りになる人ですよ。

波音さんと同様に、不思議そうな顔をしている美佳さんに苦笑を
返しつつ、僕は短縮ダイヤルの一番を押して目当ての人に電話をか
けました。

第八話 第一次お弁当戦争へ勃発編（後書き）

…と、いうわけで協力願えますか？

『いいよいいよー。みんなで作るご飯は楽しくておいしいからねえ』

…助かります。買い物をしてから帰るので家に着くのは五時過ぎになるかと思います。

『うん、わかった。あー、あとこれで貸し二つ目だからねー』

…え？ 一つはわかるんですが二つですか？

『ふふ……詳しくは第一話を参照してくれたまえ』

…ちよっ！ アレって海に行ったのでチャラじゃないんですか！？

『何を仰る。アレは単なる私のわがままですよ。ってわけで！ 近

々その返済を求めるからよろしくねー』

…ちよっと待ってください！ もしもし！？ もしもし！？

……

次回『第一次お弁当戦争 準備編』

お楽しみに。

第九話 第一次お弁当戦争へ下ごしらえ編（前書き）

申し訳ありません。前話で予告したタイトルがあまりに適当であつたためタイトルを変更します。

とはいえ、このタイトルも中々に適当なのですが。

第九話 第一次お弁当戦争へ下ごしらえ編

生活力を付ける。

義母が彼に言った言葉である。

どんな時も。どんな境遇に陥ろうとも。腕一本でも余裕綽綽に生きられるようになれ、と。

そして義母はニヤリと笑ってこつも言った。

残った腕はお前の大切な人を護るために使え、と。

大方の予想通り、お弁当作りの特訓場所は僕の家ということになりました。

美佳さんの家、という選択肢もなかったわけではないのですが、タロ君の家と同等レベルの豪邸はさすがに気後れしてしまいますから、それ以外のどこか、と考えていたら結局僕の家でやるしかありませんでした。

まあ、勝手知ったる我が家でやった方が何をするにもはかどりますし、”助っ人”こと義姉さんに一から場所を教えるのも大変なので都合はいいのですけどね。

我が家御用達のにっこりマートで帰り道に寄りました。

珍しげにお店の中を見て回り、感嘆の声をあげながら片っ端から

買い物かごに商品をつっ込んでいく美佳さんを止めつつ、ある程度目星をつけて野菜や調味料を選んでいきます。

「今回の代金はもちろん私が持たせて頂きますわ。橘さんにこれ以上迷惑は掛けられませんもの」

「…今月は割とピンチだったので夜一食を浮かせる事が出来るのは助かります。」

トレイに入った牛ミンチを何パックも大量に持って帰ってきた美佳さんに苦笑しながら一パックだけ受けとります。

まあ、本当はさほどお金には困っていなかったのですが、美佳さんにこれ以上気を使わせるのも悪いのでそう返しておきました。

「…私のため？」

そんなことを考えていた僕に並んで、黙って歩いていた波音さんが不意に口を開きました。

ギリギリ意味が読み取れる限界点まで削られたその言葉は波音さんの心情を如実に表しています。

簡単に言つと怒っているわけですね、ものすごく。

「…やっぱバレましたか。」

「…私に隠し事は通用しない」

「…ですよねえ。」

あつはつはつ、と空笑いをしてバツが悪いのをごまかそうとしましたが、波音さんが不機嫌そうに目を細めているのを目にして笑顔が引きつりました。

一学期の頃からクラスの雰囲気馴染めずにいた波音さんは、そ

の『力』も相まって精神に掛かった荷重に耐えきれずに暴走してま
ったことがありました。

このクラスの皆さんはそれ事態大したことではないと見事に受け流
してくれたのですが、彼女自身はそうはいきませんでした。

どうしても他の人と距離をとろうとしてしまうのです。負い目、
とでもいうのでしょうか。

まあ昔よりは幾分良くなったのですが、このままでは……、と考
えていたところでトラブルメーカー美佳さんが波音さんを巻き込ん
で勝負などを起こしてくれたので、これ幸いにその勝負のお膳立
てを手伝ったのです。

「…余計なお世話」

…そう言わないで下さい。

「……………」

プイとそっぽを向いてしまった波音さんの頭を撫でますが、いつ
ものように機嫌を直してはくれません。

ん……、かえって悪いことをしてしまったかもしれません。

波音さんには波音さんのペースがあるでしょうし、むやみやたら
にお節介を焼くのはひどく迷惑だったのかもしれない。

「…別にそこはそんなに怒ってない」

…あれ？ それで怒ってないんですか？

相変わらず波音さんは僕の心を覗き込んで話しを進めるわけです
が、状況が状況だけに何も言えません。と言いますか、僕のお節
介に怒ってたのではないんですか？

「…違う。ヒロ君が私を気に掛けてくれるのは嬉しい」

…んん？ では何に怒っているのですか？

「…ヒロ君は自分のことを気に掛けなさすぎ」

…へ？ 自分のことですか？

「…いつも自分のことは二の次。私の時も、それで倒れた」

波音さんの不機嫌そうなオーラが少しだけ消えて、代わりに不安げに揺れる瞳で僕のことを見上げました。

前に波音さんが能力を暴走させてしまった時、テレキネシスと同じ時にサイコキネシス、テレパスまでもを完全に『開いて』いました。その只中にいて机、椅子、思念の嵐にさらされている波音さんを教室から救出しようとした際、僕がマズってしまい飛んできた椅子を避けることが出来ずに当たってしまったのです。

片手で頭部への直撃だけは避けたのですが、思いの外出血量が多く、波音さんと教室から抜け出た直後に倒れてしまったのです。

僕が次に目を覚ますとそこは保健室で、目に一杯に涙を溜めた波音さんに手を握られていました。

ああ……、そうでしたね。

自分のせいで誰かが傷ついてしまうのは、自分が傷つくよりもよっぽど辛いのです。

そんなこと、僕は誰よりも知っていたはずなのに。波音さんに同じ思いをさせてしまいました。

「…もう少し、自分のことを考えて」

…はい。

「…何か辛いことがあったら言って」

…はい。

「…私の言うこと、何でも聞いて」

…はい。……って、はい？

うなだれながら返事をしていた僕は、思わず顔を上げて波音さんの方を見ます。

今のは……聞き間違いでしょうか？

「……違う。間違いない」

してやったりな顔をしている波音さん。や、個人的には波音さんのムツとした表情が和らいだのでもいいのですが、まさか波音さんがこのようなユーモア溢れる言葉遊びを展開してくると思いませんでした。見方によればこれもまた成長なのかもしれませんが……。

「……じゃあ最初の命令」

……もはや命令ですか。まあいいです、こうなったら何でも来いですよ。

「……ここからヒロ君の家に着くまで私に対して敬語はダメ」

……はい？ 波音さん何を

「……ダメ」

即座にダメ出しです。

どうやら僕には何かを言う権利すら与えられていないようです。

五秒ほど目をつむって唸ってから、一応最後の確認を取ります。

……小学校からコレだったので上手く喋れないかもしれないのですがいいですか？

「……構わない。さあ早く」

うう……、目が怖いのです。

瞳に剣呑な光を宿し始めた波音さんに少々怯えながら泣く泣く腹

をくります。

うーん……、何だかすごく変な緊張をしているのですが。

しょうがありません……、いきますよ。

両手に持ったもろもろの荷物を器用に動かして手のひらから手首に移すと家の鍵を取り出します。

家の鍵を取り出した右手でそのまま玄関を開けます。

…ただいまです。

「……おかえりー」

少し間を置いてから義姉さんの声と足音が聞こえてきました。

「橘さんは家でも敬語ですか？」

…はい、そうですね。何か変なところでもありましたかね？」

「……いえ、まあ、何でもないですね。私も人様のことは言えませんが」

明らかに妙な言い回しと態度をとって頭を振る美佳さんに首を傾げていると、廊下の奥の方の部屋から制服姿のままの義姉さんが姿を現しました。

「あつ、いらつしゃーい。そこにスリッパがあるから使つてねー」

「は、はい。わかりました」

「じゃあ、ヒロは荷物を……」

美佳さんに笑いかけたあと、僕の荷物を受け取ろうとした義姉さ

んが僕の背中を見て少し固まりました。

コンマ五秒ほど固まってからその顔は次第に苦笑いに変わっていききました。

「……デジャブ？」

…やっぱりそう思いますか？

僕も苦笑いを返します。

まあつまるところ、僕の背中には波音さんがいるわけです。

何故か帰り道の途中で顔を真っ赤にして気絶してしまった波音さんを背中におぶって帰ってきたのですが、両手に荷物を持ってカバンも肩に掛けているこの状態はいつぞやに体験した気がします。とはいえ、いつまでもこのままというわけにはいきません。

…波音、さん。起きてください。もう家に着きましたよ。

「…ん」

首だけひねって波音さんに声を掛けると、閉じられていたまぶたがゆっくりと開かれます。

波音さんは状況がわからないといった様子で辺りを見回したあと……僕と目が合いました。

…一人で立てますか？

「…問題ない」

そう言っただけで心なしか頬を引くつかせて僕から目を離すと、波音さんがよじよじと僕の背から降りました。

あれ？ まだ機嫌を直してもらえてなかったのでしょうか？

「え〜と、波音ちゃん、かな。こっちにどうぞ。ヒロは荷物貸して」

…はい、お願いします。

「…邪魔します」

僕は義姉さんに買い物袋を渡す横で、波音さんはスリッパに足を通すとフラフラとした足取りで義姉さんの後を着いて家の奥に消えました。

「……あの方が噂のお義姉さんですか？」

…はい、そうです……って、噂になってるんですか？

ちよつと驚きの事実思わず頬を歪めて美佳さんの方を見ます。
たぶん、広げたのはあの人ですよ……。

「それにしても……噂に違わぬ美人ですわね」

…いったいどんな噂が流れてるんですか？

何か色々と尾ひれが付いていそうな噂話に気のせいか頭痛まで……。

「確か、橘さんは義理の御姉さんと二人暮らしをしていて、その御義姉さんはとても綺麗だけど、少し変な人っす、と」

…変なところがあるのは事実ですけどねえ。まあ僕たちも上がりましょう。

僕は苦笑しながらスリッパを二足分用意すると、片手で携帯を取り出してメールを打ちながら義姉さんの笑い声が聞こえてきたキッチンに向かいました。

第九話 第一次お弁当戦争へ下ごしらえ編（後書き）

いつもどおり私が情報収集に街を駆けずり回っていると不意に携帯が振動した。

「珍しいっすねえ……こっちの携帯にメールが来るなんて」

最近、電話としての職務を放棄していた携帯を取り出して送り主を見て驚愕した。それはもう盛大に。送り主の欄には、橘と映っていた。

メールアドレスを交換してから三カ月、すでにワンシーズン過ぎていたわけなのだが今の今までメールなど送られてきたことはなかったのだ。

（こっちからはよく送ってるのに……。不公平っす）

とは言え、今日、今、とうとう来たのだ。いったいどんな内容なのか……胸の高鳴りが止まらない。

意を決して震える指で携帯の決定ボタンを押した。

『……覚えておいくださいね、クイナさん』

「……えっ、え？ 何すかこれ！？ 何か怒ってないっすか、凄く！？」

次回『奇跡の家事は』

ちよっ、せつかくハードボイルドに決めてたのにこんな終わり方っすか！？ っていうかヒロさんは何でこんな怒ってるんすか！？

お楽しみに

第十話 第一次お弁当戦争へ特訓編（前書き）

第九話で予告しましたタイトルを変更します。ついでに第九話のタイトルも変更します。

…それはそうと、更新が大変遅くなりまして申し訳ありません。しかも年内更新を目指してかなり急ピッチで仕上げましたので、後々手を加えていくかも知れません。またまた申し訳ありません。

第十話 第一次お弁当戦争へ特訓編

とりあえず頑張ってみよう。

義父が彼らに言った言葉である。

報われるか、救われるか、それに意味があるか、そんなことはわからないけど、今、出来ることを精一杯やってみよう、と。

そして義父は優しく笑みを浮かべてこつも言った。

足掻くだけ足掻いても駄目だったなら、きっとその時は誰かが助けてくれるから、と。

今回、僕が義姉さんを援軍として呼んだのは義姉さんが僕よりも料理が上手というのがありますが、それ以上に別の理由がありました。

「こ、こんな感じで如何でしょうか？」

「んー、包丁はこう持って逆の手はこんな感じ。その持ち方だと木の彫り物みたいになっちゃうよ」

「…こつ？」

「そうそう。波音ちゃん上手だねえ」

「…当然」

「に、新宮さんにも負けてるのですか。さすがにショックですわ…」

…」

義姉さんには人に物を教える天性の才能があるのです。義姉さん自身はそのことに気付いていないのですが、小さい子に算数を教えたり漢字を教えたりするのが相当に上手かったりします。

とは言ったものの、小さい子がする勉強と大人が作る料理とは違いますから多少なり不安があったのですが、あの様子を見るかぎり問題はなかったようです。

僕はその何とも形容しがたい暖かな場面に、自然と笑みを浮かべながらもうそろそろ必要になりそうな物を取りに二階に向かいました。

「……痛い!!」

「…っ!」

後ろから聞こえてきた美佳さんと波音さんの苦鳴に、今度は苦笑を浮かべながら足を早めました。

料理を作る際には、レシピより、材料より、才能^{センス}より、まず必要になるものがあります。

それが経験であり技術^{スキル}です。

如何にすばらしい料理本があろうとも、如何に豪勢な材料があろうとも、如何に優れた料理器具があろうとも、料理の経験がなければカレーライス一つ満足に作ることは出来ません。

そしてそんな料理ビギナーが最初に積む経験は言わずもがな、包丁の扱いであり、野菜などの皮むきです。

この包丁の扱いというものは意外と言いますか当然と言いますか

非常に難度が高く、ハンター稼業における桃色怪鳥の討伐のように初心者に最初に立ちはだかる登竜門的な存在なのです。

…と、言うわけでこれも経験なのですよ。

「うう、わかつてはいますがやっぱり痛いですわ……」

「…油断した。痛い」

「最初の間はやっぱりしょうがないよ。私達もそんな感じだったもん」

絆創膏が巻かれた親指を忌々しげに見つめている美佳さんと波音さんに義姉さんが笑いながら言いました。

確かに僕たちも義父さんに初めて料理を習った時は酷く痛い思いをしたものです。今となっては良い思い出ですが。

…じゃあ、諦めますか？ まだ何も始まってませんが。

珍しく弱音を吐くお二人に、僕は努めていやらしい笑顔を浮かべてそう訊ねました。

「んー、美佳ちゃんも波音ちゃんもこんなところで折れちゃうほど意志が弱い子なのかなー？」

僕の狙いに気付いたのか、義姉さんは首を傾げながら二人に問いかけたあと、僕に続くようににやにやと笑みを浮かべ始めました。

まあ、あれです。僕も義姉さんもお二人を挑発しているわけです。美佳さんは当然ですが、波音さんも意外と負けん気が強いのです。こうやって二人でにやにやしながら挑発していけば……と考えていると美佳さんと波音さんが俯いて顔を伏せてしまいました。その肩は心なしか震えているようです。

もう少し、ですかね。

…こんなところで諦めているようでは茜さんには一生勝てないんでしょねえ。

「簡単な料理くらい出来ないようじゃ男の子にはもてないんだろうな」

…こうしている間にも茜さんとの実力差は開いていつてるんでしょねえ。

「将来、仕事で疲れて帰ってくる大好きな人に美味しいものを食べて欲しくはないのかなー？」

「……………なところで」

「……………だまだ」

棒読みよろしく、淡々とお二人を挑発していると肩の震えが次第に大きくなり、何か声が聞こえたと思うとピタリと震えが止まりました。

「んー？ 何て言ったのか聞こえないな」

「……………こんなところで」

「…まだまだ」

美佳さんと波音さんはそこで一旦言葉切ると、まるで申し合わせたように顔を上げました。

その表情は……

「負けてられませんわッ！！」

「…出来る。諦めない」

「んん、いいねえ。よーし、じゃあ実践編に行こー！」

あー、いい感じに瞳に炎が灯ってますね。

義姉さんはその表情を見て今まで浮かべていた笑みとは雰囲気の違い、いつもの太陽のような笑顔を浮かべると、二人のことを引き連れて台所に向かいました。

某RPGの勇者のように、後ろに美佳さんと波音さんを連れている義姉さんの背中を見ていると、何となく昔の自分を思い出しました。

自然と頬が弛み、胸が暖かくなるのを感じながら、僕もお手伝いをすべく台所に続きました。

先に皮をむいておいたじゃがいもをざっくりと切り、お湯を張ったお鍋に入れます。本当はお湯で茹でたあとに皮をむいた方が栄養が逃げないのですが今回は熱いので先に処理をしておきます。

同時進行で軽く油をひいた（バターでもよいのですが後々に使うのでここは油を使います）フライパンに細かく刻んだタマネギとニンジン、牛挽き肉を入れて軽く炒めます。

炒め終わる頃にはじゃがいもも茹であがっているのでそれをボールに入れて潰し、炒めたものと混ぜ合わせます。この時にバター、塩、コショウ、その他調味料（うちでは少量のケチャップを入れたります）を入れて味をつけます。

それらをよく混ぜたら小判形に形成し、小麦粉、卵、パン粉の順番でしっかりとつけます。ここで面倒がると後で油で揚げる時にバラバラになってしまうので注意が必要です。

あとは190度程度まで熱した油で黄金色になるくらいまで揚げたら、晴れてコロツケの完成！というわけです。

…と、まあこのような感じで実践終了です。大丈夫ですか？

「……ええ、まあ、何とか」

「……疲れた」

「二人ともお疲れさま」。はじめての料理は疲れたでしょう」

舞台は再びリビングです。先程と違うのは美佳さんと波音さんがテーブルに突っ伏していることと、そのテーブルの中央に出来立てのコロッケが乗っているお皿があることでしょうか。

「お二人とも手際が良すぎです……」

「料理っていうのは基本的に無駄な時間をかけないように作るものなんだよ。素材の鮮度が下がっちゃうからね」

「……そ、そうなんですか」

「そうなんですよー」

突っ伏したまま、絆創膏が増えた手のみを動かしている美佳さんの頭を撫でまわしている義姉さんの表情は満足げです。

「なんかねー、妹が出来たみたいで楽しいよー」

「……あうあう」

……それは良かったです。あと、さすがに美佳さんの頭がぐりんぐりんなっているのを撫でるのは止めてあげてください。

「んん、残念」

義姉さんをどうにかなだめつつ、壁に掛かっている時計を見るといつの間にか七時になるうかという時間になっていました。

よい頃合いでしょうかね。

……波音さん、美佳さん。お二人が迷惑でなければこのコロッケを試食がてら、うちで夜ご飯を食べていきませんか？

僕の言葉の後に、キッチンの方でピーと炊飯器の音がタイミング

よく鳴りました。

いつもよりも多めに炊いておいたお米が完全に無くなったことに少しだけ歓喜しつつ、水に浸しておいたジャーを洗います。あとはこれに新たにお米を入れてタイマーをセットすれば明日も問題ないでしょう。

「…これで大丈夫？」

…はい、完璧です。お手伝いありがとうございます、波音さん。
「…当然」

お米の研ぎ方をマスターした波音さんはどこか誇らしげに頷きます。

濡れた手をエプロンで拭こうとする波音さんの手をタオルで拭きつつ、洗い物にかかろうとしたところで腕をつかまれて行動を制されてしまいました。止めたのは当然、隣にいる波音さんです。

「…それもする」

覇気すら感じそうな力強い言葉と腕をつかむ力に幾分驚きながらも、その理由を聞こうとしたところで

「…これは私の戦いでもある」

とピシヤリと一蹴されてしまいました。

何故にそこまでお皿洗いに情熱を傾けているのかはわかりませんが、そこまで言われてしまったては手を出す方がヤバというものです。こういう心境は何て言うのでしょうか、巢立つ雛鳥を見守るような、一人で立てるようになった娘を見守るような、そんなほの温か

いい心境です。

さあ、どんなことがあっても黙って見守りましょう、という僕の心模様は、波音さんがスポンジに食器用洗剤を大量噴射しようとしたところで早くも心変わりしてしまったのでした。

「包丁の扱いの基礎は今日教えた通りね。あとは練習練習」

「はい、分かりましたわ。……しかし、これだけですか？」

「ん……物足りないって顔だねえ。大丈夫だよ、っていうかこれ以上はやるだけムダ！」

「む、無駄ですか？」

「一日に覚えられることなんてそんなに多くないんだよ。それに何事もまずは基本から！」

…作戦会議、お疲れさまです。どうぞ、お茶です。

白熱している義姉さんと美佳さんにお茶を出して、僕と洗い物が終わった波音さんもテーブルに座ります。テーブルの上にはどこから持ってきたのか、大きな模造紙が広げられていました。

書かれているのは……、日程ですか。

「…スケジュール表？」

「そ。敵は強力だからね、きつちり予定を詰めてかないと」

義姉さんは洗い物が終わりテーブルに戻ってきた波音さん抱きつきながらさらに二三書き加えていきます。

その状況から何とか脱しようと思えば波音さんはパタパタとがきますが逆にどんどんときつく抱き締められ、抵抗することを諦めたのかされるがままになっています。その光景はクモの巣にかかった蝶を彷彿とさせます。

「はい、このあとの日程はこんな感じで進むから。以後精進するよ
うに！」

「は、はい！ わかりましたわ、頑張ります！」

いつの間にか奇妙な師弟関係が出来上がっていることに苦笑いしつつお茶をすすっていると、不意に義姉さんが時計を見て首を傾げました。

「そういえば二人は家に帰るのが遅くなってもよかったの？ もう
けっこうな時間だけど」

「……………あ」

「……………」

義姉さんのその言葉に美佳さんははじかれたように時計のかかっている方に視線をおくり、絶句しました。波音さんは特に変わらずに義姉さんに捕縛されたままお茶を飲んでいきます。

「……………た、大変ですわ」

しばらくの沈黙のあと、美佳さんそう呟いて膝をつきました。

五秒ほど時間が止まったでしょうか。義姉さんがはたと思い出したように手を叩きました。

「あつ、あの時計って三十分くらい早くなってたかも」

「……………そ、それは本当ですよッ！？」

手をついて典型的な絶望の姿勢をとっていた美佳さんが義姉さんの言葉を聞いて起き上がると義姉さんにすがりつきました。

女性三人が絡み合ってる図は何と言いますか、ある種壮絶です。

「うん、確かそうだったけど……。違ったつけ、ヒロ？」

「…そうでしたつけ？ えーと……。あっ本当に遅れてますね。」

ポケットの中の携帯を取り出して確認すると確かに三十分ほど遅れていました。今まで気付かなかった自分に驚きです。

「それならまだ間に合いますわッ！ 今日は本当にお世話になりました、申し訳ありませんが今日はこれで！！ 新宮さんは後でうちの車を一台行かせるのでそれで帰ってくださいまし！！」

美佳さんはバツと立ち上がり、ガバツと頭を下げてそう言つと力バンをひつ掴んで一気に家を飛び出しました。

「まるで嵐みたいな子だったねえ。んー、にぎやかで結構！」

その姿を見ていた義姉さんが楽しそうに笑ってそう言いました。正直なところ、僕としては賑やかさなら義姉さんも負けてないと思うわけですが。

「…同意」

「…ありがとうございます。波音さん。」

「え？ 何の話？」

僕と波音さんのやりとりに義姉さんが何のことかわからないといった様子で眉根を寄せて首を傾げました。

第十話 第一次お弁当戦争へ特訓編（後書き）

……はい、恐らくそうでしょう。こっちでも強力な磁場の発生を確
認したので間違いないと思います。

……今のところ大きな混乱は無いようです。とはいっても俺達も何
が起きたのかすぐには把握できませんが。

……はい、俺にとってもアイツ等は兄弟みたいなものですから。出
来る限りは。

……それでは、また一週間後に。失礼します。

次回『大運動会開催前日』

お楽しみに。

第十一話 大運動会開催・前日

彼には命の恩人がいました。

小さい頃からどうしようもないほど劣悪な環境にいた彼を、どうにか元の世界に戻してくれた恩人です。

軽々しく、命などという言葉を口に出すのは彼の信念に反しましたが、彼としては本当に命を賭けてもいいと思えるほど大切な人でした。

それまでずっと独りで生きていた彼にとって、その人は陽だまりで。こんな日々が何時までも続けばいいのにと、ありふれた言葉に思いを寄せました。

「……何と云うか、相変わらず坊は押しに弱いな」

…別に押しに弱いわけではありません。あの人の押しが強いだけです。

「ぶはっ！ そんな仏頂面するな、面白いから」

ちょうど太陽が顔を出し始めるころ、僕と竜也さんは家の近くにある古びた道場で柔軟体操をしながらそんな会話をしていました。ちなみに服装は動きやすいように改良された拳闘着を身につけています。

「しかし坊の方から組手の申し出があるとは思わなかったな」

…最近では走り込みもろくに出来ていませんでしたからね。いざ動こうとしても身体がついてこないのでは話になりませんし。

「たかがガキ同士の喧嘩だろ？ 何も坊が本気を出さなくてもいいんじゃないか？」

腕の柔軟をしながら不思議そうな顔をする竜也さんを見て、思わず苦笑がもれます。

…買いかぶりすぎですよ。現に義母さんにも竜也さんにも組み手で勝ったことがないじゃないですか。

「や、それで十分だろ。そこらのガキじゃ幾ら束になっても坊に敵いつこないだろ」

それが買いかぶりだと思つのですが、いくら言つても僕のことを過大評価している竜也さんには無駄なようです。

取り繕うことを諦めて、少しばかり本音をもらすことにしました。

…確かに、僕の身一つ守るだけならさほど問題ではないのですが、今回は違います。守らなければいけない人が大勢いますから。

苦笑を浮かべたまま今の心境を吐露すると、竜也さんは一瞬きよんとした顔をしましたが、すぐに呆れたような表情を浮かべてため息を吐きました。

「………つたく、相変わらずの甘ちゃんぶりだな」

…申し訳ありません。

「実はあんまり申し訳なく思つてないだろ？」

…はい、あまり。

竜也さんはもう一度大きくため息を吐くと柔軟体操を止めて半身の姿勢をとります。

「……そう言うことなら、手加減無しだ。受け身はしっかり取れよ」
…わかってますよ。何回投げられてると思ってるんですか。

僕の返答にニヤリと笑いながら竜也さんは一息で間合いを詰めてきました。

僕と竜也さんの戦闘術の基本は、共に義母さんから教わったものなのですが、鍛錬を続けて行き着いた先は竜也さんは投げ、僕は打撃、という異なるスタイルでした。

そういった戦闘スタイルの違いは、習った格闘術によってももちろん変化するのですが、習得する側の内面の違いでも大きく変わるらしいのです。義母さん曰く、僕は意外と攻撃的なのだそうです。

瞬きの間に間合いを詰めた竜也さんが襟を掴むために伸ばしてきた腕を軽く払いながらその勢いのまま姿勢を低くして半身だけ回転します。

ムチのように思いきり振りかぶった右手で竜也さんの足を打とうとしましたが、弾かれた腕をそのままにして放たれたショルダードックルで吹き飛ばされ、残念ながら不発に終わってしまいました。

「……お前、それ喰らったら三日は普通に歩けないの知ってたよな？」

…はい、もちろんです。

吹き飛ばされた勢いのままに後転して立ち上がりながらその質問

に答えると、竜也さんの頬がかすかにひくつきます。

…怒ってます？

「いや、ぜんぜん。おにーさんはかんだいなのだA」

…いえいえ、もう完全に怒ってますよね？

語尾に星でもつきそうなほどの完璧な笑みを浮かべる竜也さんが完全に戦闘体勢に入ったことを確認しながら、今度は僕から間合いを詰めていきます。

半端な小細工は逆に自分の首を絞めることは、昔から格上相手と組み手することが多かったので身に染みています。そのため、あらゆる打撃を最速で放てる自然体のまま歩いて間合いを詰めます。

セーフティ

間隔が徐々に狭まりそれがゼロになった直後、ギリギリまで脱力していた右足が身体の全ての力を受け止め、今出せる最高のスピードで上段に放たれます。しかし、それは目標である竜也さんを捉えることはありませんでした。

竜也さんが視界から消え

黒い影が一瞬、僕の軸足に絡んだのを見たところで、僕の身体は宙を舞っていました。

「不用意に足刀で攻撃しようとするな。確かに脚は腕よりも強いがその分バランスを手放すことになる」

…はい。

「各関節の連動が甘い。力の流れが一瞬だが阻害されて動きが鈍った。もともと体格がいい方じゃねえんだからそれは致命的だぞ」

…はい。

「対一の場合は一瞬でも相手から視線を切るな。打撃エリアよりも更に接近を許せば坊の場合は確実に不利になる」

…はい。って言いますかそろそろ僕の上から退いてくれませんか？

「ダメだ。ペナルティだと思え」

思い切り投げられ、仰向けに倒されている僕の上で、どこからか取り出したタバコを吸いながら竜也さんは僕の要望を即座に却下しました。ヒドイです。

「喧嘩なら馬乗りにされる。戦場なら喉をかつ切られる。そんなものとかよりいくらかマシだろ」

不満が顔に出てたのか竜也さんは笑いながらそう言うと、タバコを握りこんで火を消しました。

「ま、組み手も罰ゲームもこれで終了だ。今日は坊が朝食当番だろ？ 急がないとお転婆姫が目え覚ますぞ」

…あー、それは困りますね。あの人、朝起きてご飯がないと暴れるんですよ。

「まるで酔っ払いの親父だな。嬢らしいよ」

竜也さんは苦笑しながら僕の上から腰を上げたところで、なにかを思い出したのかこちらに向き直りました。

「そろそろあの日だが準備は済ませてあるのか？」

ずいぶんと端折った言葉で、普通なら首を傾げるところですが思い当たる節があります。ありすぎます。

…はい。ですが今回は家でやるのではなく、どこか外に行こうと考えています。

「まあ、たまにはいいんじゃないか。あんまり暴れさせるなよ?」

…善処します。

「ま、頑張っでどうにかなるような相手じゃないけどな。せいぜい機嫌を損ねないように努力しろよ」

竜也さんは楽しそうな様子でそう言うと、そのまま道場の入り口の方角に歩いていきました。

…もう帰るんですか? 朝食をご馳走するつもりだったんですが。

「ん、魅力的なお誘いだが今から仕事がな。今度時間があるときにまた来るからその時な」

…おかずは何がいいですか?

「……んー、ブリ大根」

…了解しました。それではお仕事頑張ってくださいね。

「おーよ」

前を向いたままこちらに手を振って竜也さんが道場から出ていきました。

仰向けのままそれを見送ってから、少しだけ目をつむります。

この道場を軽く掃除してから朝ごはんを作って、義姉さんと一緒に家を出て学校に向かって……。

一日の予定を頭の中で反芻し、ゆっくりとまぶたを開けます。右手を持ち上げて、握って開いて。

…僕の非力な手で、どれだけの人を守れるか。

誰にともなくそう呟き、最後に一際強く手を握りしめてから立ち

上がりました。

「……ふむ、よく纏まっているな。さすが義弟君だ」

…よかったです。寝ずに資料作成をしていたかいました。

時間はお昼過ぎで、場所は生徒会室です。ちなみに今日は体育祭前日ということで半日授業となっています。

ソファーに深く腰かけている琴音さんの前に立って、昨夜ようやく完成にまでこぎ着けた資料の出来をうかがっていましたが、どうやら問題ないようです。

「まあ問題は警備の人員が足りないことくらいか」

…はい。そればかりはどう勘定しても足りません。他にいくつか手を打ちますがどこまでしのげるか、といったところです。

「他の手、か。コレだな」

琴音さんは資料の一枚をつまんでこちらに見せてきます。

…はい。まあオマケみたいなものですが、何もしないよりはいくらかマシだと思います。

「まあそつだな。こちらの指揮は……、奏が適任か。任せられるか」

「はいはい。けど、通信機一式の用意は済んでるの？」

常は琴音さんが座っている机で、何やらパソコンに打ち込んでいる奏さんが首を傾げてこちらに向きます。

…手配はすでに終わっているはずですよ。そうですね？ クイナさん。

「……………あつ、は、はい！　ばつちりカンペキつすよ！」

僕が何故か先程から隣で放心したままのクイナさんに話をふると、思い出したかのように首をかくかくと振りました。

「ふむ、大丈夫か、クイナ嬢？　この大切な時期に貴重な人材に風邪でも引かれるのはごめんだぞ？」

「は、はい！　気を付けます！」

声を裏返しながら敬礼のポーズをとるクイナさんの様子に、僕だけでなく奏さんと琴音さんも軽く笑みを浮かべました。

「……………まあ、とりあえずはこんなものか。明日は二人とも朝早くから来てもらうことになるが構わないか？」

「はい。六時半でいいんですよ？」

「ああ、それで頼む。それと人員の件、こちらで手を打とう」

「…あ、そうですね！　助かります！」

僕が琴音さんの言葉に小さく小躍りをしていると、後ろからの不意な衝撃につんのめりそうになります。

後ろを向くと、先程までデスクワークに勤しんでいた奏さんの顔が目と鼻の先にあり、頬を引くつかせて慌てて前に向き直ります。

「いきなり突っ込んでこないでください。それとはやく僕の背中から下りてください。」

「いや、楽しみだね。まるでお祭り！　最近は学校で問題が起らないからつまらなかったんだよね」

僕の注意を軽くスルーし、嬉しそうに笑って僕の背中にブラブラしている奏さんをどうにかしてほしいと琴音さんに視線を送ります。

その視線に気づいたのか、琴音さんは、ふむ、と唸ったあと、腕を組みました。その視線は心なしか少し厳しめです。

嗚呼、やりすぎだと奏さんをたしめてくれるんですね？

「見せつけてくれるな、義弟君。奏、もっとやれ」

「あいさー」

ですよー。琴音さんなら僕のことを素直に開放したりしませんよねー。

僕は大きくため息をついて、この嵐が過ぎ去るのを待つことにしました。

奏さんに遊ばれること十分、ようやく退出の許可が出たので、放心しているクイナさんを引きずりながら生徒会室を脱出しました。

生徒会室から十二分に離れてから、適当な空き教室に入り、未だ放心中のクイナさんを頬を軽く叩いて目を覚ましてもらいます。

「こ、ここはどこっすか！？ 私は誰っすか！？」

…ここはA棟の三階で、あなたは神津クイナさんですよ。

クイナさんの定番のボケに丁寧にツツコミながら、僕は自分のYシャツのボタンを一個一個外していきました。ちなみにYシャツの下には黒いTシャツを着込んでいます。

その僕の行動にクイナさんは何故か顔を真っ赤にして吹き出し、ひどく取り乱したようにあたふたしました。

「な、何やってるっすか！ いきなり！！」

…むしろ、クイナさんはどうしてそんなに焦ってるんですか？

クイナさんの質問に質問で返し、脱いだYシャツの首元や胸ポケットを探ります。無いですね……。

予想外の事態に少し思案していると、目の前で何ごとかまくし立てているクイナさんと目が合いました。

なるほど、その手がありましたか。

…少し、いいですか。

「え、は、何すか！！？ いったい何の許可を取ろうとしてるんすか！？」

脱いだYシャツを畳んで机の上に置き、じりじりと距離を詰めると、ちよつと申し訳ないくらい動揺しはじめたクイナさんにさすがに少し罪悪感がわいてきました。

なので、出来るだけクイナさんが安心できるように笑顔を作って口を開きました。

…なるべく、痛いようにはしません。すぐに終わりますから。

「……あ………はい」

顔を赤くしたまま急におとなしくなったクイナさんの様子に首を傾げながら、クイナさんの肩に手を置きました。その際、びくりとクイナさんの身体が震えました。

…大丈夫ですか？ 震えているようですか。

「……大丈夫っ………す！ 初めてじゃ、ないから」

初めて、ですか？　　いったいクイナさんは何のことを言ってるんでしょうか？

疑問には思いながらも、とりあえずクイナさんの顔に僕の顔も近づけます。同時に右手でクイナさんのＹシャツの首元に巻いてあるリボンに触れます。

「こ、こんなところで……」

何となく非難がましいクイナさんの声が聞こえましたが、それよりも僕には早急に済まさなければいけないことがありますから聞こえなかったことにします。

…むむ、ここにも無いのですか。

「す、するなら早く済ませてよっ！」

…申し訳ありません。今、済ませますから。

先ほどから何故か目を瞑っているクイナさんに急かされながら、手を背中に回します。

…と言いますか、いつものログセはどうしたんですか？

「……ああ！！　もう今はそんなことどうでもいいでしょ!？」

…まったくもってその通りです、ね。ん、やっぱりありました、盗聴器。

「……………ふえ？」

首の後ろ側の襟に挟み込んであった十円玉程度の大きさのそれを摘まみとってクイナさんに見せます。

閉じていた目を開きぱかんとした表情をするクイナさんについてい笑みを浮かべてながら、外した盗聴器に、空き教室に置いておきますよ、と話しかけ（?）、Ｙシャツを乗せておいた机の上に置き

ました。

…あのお二人の部屋に行ったあとは、盗聴器を仕掛けられてないかしつかりと調べておいた方がいいですよ。この前、僕も酷い目に会いましたから。

「……………」

Yシャツに腕を通してボタンを留めようとしたところで、対面しているクイナさんの様子がおかしいことに気付きました。

もしかして、泣いてませんか……？

「……か」

…え？ 何でしょうか、うまく聞くと

「馬鹿馬鹿馬鹿あああああゝ！！ この天然フラグクラッシュ
ー！！！！」

クイナさんは顔をこれ以上ないくらい真っ赤にし、涙を流しながら空き教室から飛び出していきました。

呆氣にとられてしまった僕は、その場を一步も動くことができず、その背中を見送ることしかできませんでした。

遠くで琴音さんと奏さんの笑う声が聞こえた気がしました。

…僕がいったい何をしたんですか？

ぼつり、と自然にそんな言葉がもれました。

遠くで聞こえる笑い声のボリュームが大きくなったような気がしました。

第十一話 大運動会開催・前日（後書き）

疾走。疾走。疾走。

体育祭は明日だというのに、私は全力で疾駆していた。

何を期待していた？

笑顔を向けられてどう感じた？

肩を掴まれてどう思った？

そんな取り留めのない思考を置き去りにしたくて、思い切り駆けていた。が、脳が考えていたより早く、私の肺も、両足も、限界を迎えた。

足を止め、肩で息をしていると置き去りにした思考が早くも追いついてきた。

今まで、誰かを好きになったことなんてなかった。そんなことよりも面白いことが私にはあったからだ。

それでいいと、何も知らなかった私は思っていた。

それがあの日、保健室で彼と再会してから、全ての歯車が狂いだした。

……否、ようやく正常に廻り出したのかもしれない。

次回『大運動会開催・午前の部』

ああ、認めよう。認めてやる。私は彼のこと

第十二話 大運動会編 壱・開会式（前書き）

1．はい、というわけで、天気予報並に当てにならない次回予告なわけです。今回もタイトル変更してしまいました。申し訳ありません。

2．春休みのくせして更新がいつもより遅くなりました。悪気は一切ないので、短編の下地を幾つか作っていたら遅くなっていました。……まあ他にも色々理由があるのですが言い訳にしかならないので黙ります。やっぱり申し訳ありません。

3．地味にユニークが一万ヒットしました。コメディスゲエっす。

一応、記念に外伝でも書こうかとも思うのですがリクエストありますか？ よほど無茶なシチュでなければ実現できるかと思っています。

第十二話 大運動会編 壱・開会式

血潮吹き出し、肉片弾けて、骨がめっきゃんめっきゃんになる学校行事、体育祭！

液体窒素ばりに心が凍りついた文系人と、赤道直下でサンバを踊りまくるみたいな暑苦しい体育会系人とが一堂に会する学校の大、大行事です！！

文化祭と並ぶ学校行事ですから、皆さん力の限り頑張りましょうね！！（生徒会副会長）

私は来年で高校卒業となる。

これはそんな私が手掛ける最後の体育祭だ。

気の利いたサプライズなどは用意出来なかったが、皆が楽しめる場くらいは死守しよう。

何の心配もいらない。好きなように楽しむといい。

最後になったが、目に余るような手抜きが発見された場合は……、まあ、皆まで言うまい。（生徒会会長）

（ひいらぎ通信9月号・体育祭特集から）

もう秋だと言うのに、ジリジリと肌を焼く太陽は未だ健在です。

「今日という日は皆の魂に刻まれる運命の日となるだろう」

そんな中、汗一つかく様子もなく、朝礼台の上に乗って全校生徒の前で演説をしているのは、本校指定のジャージを着た琴音さんです。

「皆が欲しい物は何だ？ 地位だろうか？ それとも名誉だろうか？」

ちなみにこの時間、本当は生活指導の先生が体育祭開催についての諸注意を話す予定だったのですが、琴音さんがそのマイクを奪いとり、今のゲリラ演説に至るわけです。

「ならば奪い取れ。この日、この時間ならばそれが許される。否、許そう、この私が」

一応、補足しておくのですが、琴音さんが先生からマイクを奪ったといっても力づくで奪ったというわけではありません。急に壇上に上がった琴音さんが、先生に二三耳打ちをした結果、先生自身が恭しく両手で琴音さんにマイクを渡したのです。

「一年は死ぬ気でもがいて生を掴め。二年は下（下級生）を蹴落とす上（上級生）に媚びを売れ。三年はその権力でもって総てを潰せ」

まあそういったことはこの学校では珍しいことではないようで、ざわざわとした雰囲気は琴音さんが演説を始めるとピタリと静まりました。こういったところから琴音さんの求心力が垣間見られます。

「前置きはこの位にしよう。皆、悔いを残して散るなよ」

『オオオオオッッ！！！！』

後半はいつものようにシニカルな笑みを浮かべ、琴音さんが演説を締めると、それを待っていたかのように生徒の一部……、いえ、大部分の怒号が学校を包みました。

…何て言うんでしょうか。皆さんやる気満々ですね。

「な。いくら二学期の成績にも影響が出るっていつても度が過ぎるよなあ」

未だ興奮冷めやらぬといった様子で方々に散っていった他の方々（ほとんどが上級生の方たちです）を見ながら隣にいるタロ君と僕はそんなことをぼやいていました。

『はあ………』

僕とタロ君、どちらからともなく大きくため息を吐きました。

とにかくにも、一騒動も二騒動もありそんな体育祭が始まりました。

開会式が終了してから、始めの競技が開始されるまでには三十分ほどの間が空きます。

その時間に風紀委員の方々、総勢六十名に仮設テントまで集まってもらい軽く今回の活動の概要を説明します。

本来、こういった作戦会議は何日か前から段取りを組んで説明し

ていくものなのですが、今回は少しばかり事情が違います。

簡単に言ってしまうと、敵の攻め手がわからないためです。攻め手がわからない以上、この中に帝陵高校の方々と通じている人がいて、何らかの妨害工作に時間をかけられてしまう可能性もあるのでこのように直前まで作戦内容は伏せられていました。

また、いくら内密に事を運んでも多人数にそのことを話せば必ずどこかから話しは漏れます。そうなれば皆が心置きなく体育祭を楽しめなくなるだろう、といった琴音さんの配慮もありました。何と言いますか、つくづくいい人なのだと感じます。味方の間だけですが。

「各自、今渡したスケジュール通りに行動してね。じゃあ女子は私と神津さんに、男子は橘くんについていてくださいーい」

僕が思考にふけっている間に、集まっていた風紀委員の方々をまとめた奏さんが女子を連れて校舎のある方に歩いていきました。

「……………」

何でしょうか？　しばらくその場を動かなかったクイナさんが射殺さんばかりにこちらを睨み付けているんですが……。

…な、何でしょうか？　クイナさん。

「……………何でもないっす」

僕の問いかけにぶくつと頬を膨らませてからそう答えると、そのまま奏さんの後を追って校舎の方に走っていつてしまいました。

やっぱりまだ何か怒ってるんですかね……………？

「まあ、あれだ。男にはそういう時もあると思うぜ！」

「おうおう。女に振られたくらいでくよくよすんな！」

うなだれる僕の背を叩いて励ましてくれる先輩方の心配りが胸に
しみます。

何か勘違いをされているような気がしなくてもないですが、たぶ
ん気のせいだと思います。

風紀委員男子の方々を連れ、人がまばらになりはじめた学校内に
入り、とある場所を目指して歩いて行きます。

「なあなあ、これからドコ行くんだ？ やることは学校の警備だっ
てのはわかるんだけどさ」

後ろを歩いていた先輩の一人にちょいちょいと背中をつつかれ、
そんなことを聞かれました。

…伊田会長のところですよ。今は教員会議室にいるはずですよ。

「……あの会議室か。いくら体育祭の日だからって普通は貸し出さ
ないよな」

…そこは伊田会長ですから。

「なるほど。あの伊田だもんな」

「まあ確かにアイツならな」

「大魔王だもんな。ウチの学校の」

その先輩だけでなく、近くにいた他の先輩方もうんうんとうなず
いて納得しています。その様子から、琴音さんが学校でどれだけ畏

怖されているかわかるというものです。

立場、琴音さんの肩を持ちたいところなのですが、他ならぬ僕自身が皆さんと同じことを考えていたので何とも言えません。

苦笑いを浮かべてそんな気持ちを誤魔化していると、突然、前方もつすぐ目の前に見えていた教員会議室から鬼気迫るほど大きな敬礼が聞こえてきました。しかも軍隊式の声を張り上げるアレです。

「……………」
「……………」
「……………」

僕を含めそこにいる皆さん全員が、それはもう盛大に引いているわけなのですが、いつまでも廊下に立っているわけにも行きません。動きたくないところまわっている心と体を叱咤し、一息に教員会議室のドアを開けて

閉めました。

変な人がいました。それも一杯。

「アレって軍服か……………」

「……………しかも結構な数いたぜ？」

「いや、さすがにないだろ？　きつと見間違えただけ……………」

「なるほど、じゃあ今のは夢か？」

「ありえるな。最近部活が忙しくって疲れが抜けなかったんだよな、俺」

「俺もだ」

「俺も」

「何をしている？ さつさと入って来い。あまり時間が無いのだぞ」

今見たものはすべて幻であつたという先輩方の希望的観測を、再び開いたドアから顔を覗かせた琴音さんがものの見事に粉碎しました。

痛恨、といった言葉しつくりくる顔をして眉間を抑えてため息をつく先輩方を一瞥^{いちへつ}だけして、琴音さんがこちらに視線を向けます。

「ほら、義弟君も早くしろ。時間は有限だぞ」

…今さらで何なのです、その呼び名、せめて皆さんの前ではやめていただけませんか？

「何を今更。既に校内掲示板にも張り出したことがある公然たる事実であろう」

…えっ！ ちょ、そんなこといつしたんですか！！ 初耳ですよ！？

初めて聞く、さりげなく僕の今後の人生を左右する事実にはさすがに動揺を隠せずに琴音さんに詰め寄ります。

「……ふふふ、相変わらずいい顔をするな」

…いえいえいえ、そんなことを言われても嬉しくも何ともないですからね！？ って言いますかさりげなく僕の質問を無視しないでください！

「安心しろ、ちよつとした冗談だよ」

琴音さんは詰め寄っていた僕の頬を軽くひっぱり、楽しげに笑ってからそう言くと、『さつさと来い』とだけ残し、僕の額を小突いて会議室に戻っていきました。

狐につままれたような心持ちで、それでも皆さんを会議室の中に誘導しようと後ろを向くと、皆さんがまさに、『絶句』といった様子で僕の顔を見ていました。

何の前触れもなく、そんな視線を大量に浴びて思わず顔が引きつります。

…な、何でしょうか？

「お前スゲエよ」

「あの氷の女が笑ったぞ……」

「……魔王があんなことするのか」

口々にそんなことを呟いている先輩方の後ろでは、一学年と二年の方々が顔を赤らめて、ぼーっとしています。

どうしたんでしょうか？

琴音さんがあのような表情をすることがそんなに珍しいのでしょうか？

確かにいつも不敵に笑っているようなイメージがありますが……、と考えたところで当初の予定を思い出しました。

…じゃあ皆さん、とりあえず会議室の中に入ってくださいーい。

琴音さんに怒られる前に、風紀委員の皆さん方を会議室の中に誘導することにしました。

「むうう……………」

屋上についてから、あらかじめ用意しておいたパソコンを立ち上げて調整をしていると、隣で同じように通信機具の調整をしていた少女　神津クイナちゃんが唸り声をあげていた。

クイナちゃん、どうしたんだろ……ってまあ言うまでもないよね。

他の子達にはテーブルとか望遠鏡の設置をお願いしているから、しばらくの間は二人きり。

んふふふ、せっかくだからオネエチャンがクイナちゃんの心の深^{はな}遠^{その}を覗いちゃおうかしら。

「ヒロくんのこと悩んでるのかなあ？」

「……………！」

遠回しなことは嫌いだからさらっと直球に。けど効果は絶大だったらしく、クイナちゃんはビクツと肩を震わせた。

「な、何言ってるっすか……………」

「好きだけど今さらどんな顔すればいいかわかんないの、って感じかな？」

「……………！」

余裕ぶって取り繕おうとしたクイナちゃんの顔がピシリと音を立てて固まった。

いやはや、色恋沙汰には免疫が無いのか、いちいちわかりやすいなあ。

「けどヒロくんはなかなか倍率高いからなあ。後手後手に回ってる
と誰かさんに持ってかれちゃうかもよー？」

「……………う」

「私自身も気に入ってるし、あのお姉えすらも心を許してるぐらいだからねえ」

腕を組んで、目を閉じてもつともらしく頷いてみる。その私の一つ一つの動きに、クイナちゃんはわかりやすく呻き声をあげている。

もつともらしく、とは言ったものの、ヒロくんがモテるというのは本当の話だ。

本人は気付いていないかも知れど、アレだけ顔も性格も良くて、気配りも出来る人間がモテないわけがない。どこか浮世離れしているところや、逆にへんに所帯染みているところも好感度アップである。

なのに、特定の相手との関係が一切浮上してこないのだから不思議なもので。そのため一時期、いつも一緒にいる我が弟と良からぬ関係に発展しているのでは、という話題が学校中に流れたのだが、裏を取った結果、それもデマであることがわかったわけで（裏を取るために行われた手段は各人の想像にお任せ。ヒントはお姉えと拷問器具）。

てか、抱きついたりしたらきつちりと恥じらってみせるところから、男女関係に全然興味がないというわけではなさそうんだけどねえ。

「今まで、誰かを好きになったことがないから、どうすればいいのかわからないっす……………」

私がヒロくんについての考察を頭の中でまとめていると、クイナちゃんが苦虫を噛み潰したような顔をして、そんなことを呟いた。

なるほどなるほど。

まあそうだよー。最初のうちってどうやって相手に接すればいい

いかわからないもんだよね。

しかも相手があの手み所のないヒロくんじゃちょっと大変かもねえ。

「……さっきも、こう、視線で、の、悩殺してみようとしたっすけどやっぱりダメで」

え、アレってそういう視線だったの？ 悩殺っていうよりは本当に殺してしまいそうだった気が……。

頭垂れて溜め息を吐く、頭一つ二つも小さい彼女を見て、本当に初々しいなあ、と感じてしまった。

私にも、こんな時があったのだろうか？ いや、たぶんあったんだろうなあ。

そんな懐かしい気分に浸りながら、どうアドバイスすればクイナちゃんが真っ直ぐヒロくんと向き合えるか考えてみる。

わざわざアドバイスをあげてライバルを増やす必要もないんだけど、変な方向にノンストップで突っ走っていく可愛らしい後輩を放っておくのはやっぱり可哀想だしね。

斯くして私は彼女に出来る限りのアドバイスをした。

何の変哲もないアドバイスだったんだけど、それでも、何も言わずに悶々とさせるよりはいいかなあ、とか思ったりしたわけで。

結果的に、この時のアドバイスが彼女の暴走に拍車をかけることになったりするのだけど、それはまた後々の話。

そのせいで、私がヒロくんにこんこんとお説教されたりもするんだけど、それもやっぱり後々の話。

第十二話 大運動会編 壱・開会式（後書き）

「さあ、とうとう体育祭編が始まっちゃいました」
ベンベンッ！

「相変わらずヒロは流されに流されまくっているわけだけど、果たして任務を遂行できるのか!？」

ベンベンッ！

「そして恋に恋い焦がれる少女の運命は!!?」

ベベベンッ!!

「次回『大運動会編 弐・彼の気持ち』！ お楽しみに!!」

…義姉さん、さっきから何やってるんですか？

「うるさい！ 出番ないんだから次回予告くらいやらせるこのヤロー！」

第十三話 大運動会編 弐・彼の気持ち（前書き）

- 1・オマケ編はもう少しお待ちください（七割は完成しているので。
。
- 2・携帯執筆 左キーを押す 消える、の工程を二回ほど繰り返しているのでクオリティが三割減位しています。生暖かい目で見えていただけると嬉しいです。

第十三話 大運動会編 貳・彼の気持ち

自信がなかった。

周りにはいつも宝石みたいに輝く友達がいて、その中に僕はいた。わからなかった。

僕なんかがみんなの隣にいていいのか。怖かった。

みんなが、彼女が僕から離れていってしまうのが。

けど、わかってたんだ。

そんな考え、ただの甘えなんだって。

「と、いうわけだ。君達が自分の競技に出ている間の増援として、彼等を配置する。まあ、君達は予定通りに動いてくれれば構わん」

前に出て軍服の方々の説明をした琴音さんが白板の前から移動すると、代わりにリーダー格らしき一際大きな体をした方が前に出てきて挨拶を始めました。

…この方々が前に言っていた『私兵』の方々ですか。

「ふむ、二十人程度しか連れてこなかったがそれなりに『調教』くんれんを積んでいるからな。役には立つはずだ」

…気のせいですかね？ 『訓練』じゃなくて『調教』と聞こえたのですが。

…気のせいだろう。義弟君も疲れているのだな。

窓際に立っていた僕のところまで下がった琴音さんは、くつくつと楽しげに笑っています。

眼鏡をきらりと光らせて浮かべる笑顔が限りなく黒いわけで。きつと触れてはいけないことなのだと一瞬で理解しました。

「今回、帝陵以外にも注意しなければいけない存在も多い。文化祭のためにもここで幾つかは潰しておきたいな」

小声で他の方々に聞こえないように話す琴音さんの横顔は、珍しいと言っては何なのですが、薄く憂いを帯びていました。

そんな琴音さんの横顔を眺めていると、ふと琴音さんと目が合いました。

「……ふふ、義弟君は何で笑っているんだ？」

…笑ってましたか？

琴音さんに言われて両手で自分の顔を確認します。

いつもどこか人間味の欠ける琴音さんの人間らしい部分が見れたので、ついつい笑みを浮かべてしまったのかもしれない。

「酷いな、義弟君は。義姉あねの悩んだ顔がそんなに好きなのか。困ったな、禁断の關係に発展だ」

…いえいえいえ、何急にそんなこと言ってるんですか？ まだお昼ですよ？

「夜ならばいいのか？ ふふん、意外とエッチなんだな。このむつつりスケベめ」

…いえ、だからそうじゃなくてですね。

「おっと、顔が赤くなっているぞ？　そうか、義弟君は罵られると劣情を感じるのか。それとも他の人間に見られるのがそんなにいいのか？　ん、どうなんだ？　言ってみるんだ、『私は見られて興奮する変態です』、と」

…もうイヤアあああああ！

声を抑えながら哭^なく僕を、この上なく愉快そうに眺めている琴音さんから先程見えた憂いは微塵も感じられません。

あれ？　僕、ストレス発散の道具としていいように使われてませんか？

「ほら、義弟君。鳴くのはいいが、直に話が振られるぞ」

…へ？　どういうことですか？

僕が伏せていた顔を上げ、琴音さんの方を向くと前に向かって視線を飛ばしていました。

それにならって前を向くと、琴音さんが連れてきた部隊の隊長さんの話がちょうど終わるところだったらしく、こちらにアイコンタクトを送ってきていました。

その視線にはそこはかとなく殺意が籠っているような気がしましたが、気のせいなのでしょうか。

「それでは、今回の任務で総監督を勤める一年の橘君の話だ。皆、心して聞くように」

…え、はい。

急に話を振られ少しばかり動揺しながらも、隊長さんの代わりに前に出ます。

ここでしつかりとした志を見せることが出来れば、後々、意思の疎通がスムーズになるはずですよ（士気が上がる、とも言えますね）。

とはいえ、僕はお世辞にも口がまわる方ではありません。それならば、せめて精一杯の誠意を込めて皆さんにお話しをしよう、そう考えたところで、

「ちょっと待てよ」

そんな言葉が掛かりました。

声のした方　　琴音さんの連れてきた部隊が固まっているところに視線を向けると、僕と同じ年、もしくは少し年上に見える、髪をツンツンに立てている男の子が前に出てきました。

制止された理由がわからずに、はて、と首を傾げるとその男性は苛立たしげに顔を歪めました。

「すつとぼけた顔しやがつて、何でデメエみたいな優男がリーダーなんだ？　納得いかねーんだよ」

その男の子は僕の近くまで歩いてくると胸ぐらを掴まんばかりに詰めより、不満をまくし立てました。

困惑を隠さずに顔に出しながら、琴音さんの方を向くと、琴音さんはアゴに指を沿わせ、ふむと考え込んでいました。

「忠誠心が強すぎるというのも問題だな」

ポツリと漏らした琴音さんの言葉で、何となくですが要領を得ました。

つまり敬愛してやまない琴音さんが、自分たちではなく、どここの馬の骨とも知らない人間に仕事を任せたことに納得がいかない、と

いうことでしよう。

隊長さんや他の部隊の方々が、困惑を顔に出しながらもそれを止めないということは、つまり同じ意見であるということですかね。

さて、どうしましょうか？

いたずらに刺激すれば一触即発の状態になりかねませんし、かといってここで簡単に引いてしまつては全体の士気が下がることは火を見るよりも明らかです。

あと十分少々で第一種目開始の合図である予鈴がなります。つまりは時間があまりないのです。

いつそのこと文句がある人全員をのしてしまおうか、などと物騒なことを考え始めていると、琴音さんが不意に口を開きました。

「……ふむ、ならばどうだ。お前が義弟君に片膝でもつかせることが出来たならば全権をお前に委ねようではないか」

相変わらずの気まぐれっぷりで琴音さんがそんなことを言い出したため、会議室全体が一瞬ざわめきます。

「本当ですかッ！？ 琴音様！！」

「ああ、勿論だ。私が嘘を吐くとも思つか？」

常のようにくつくつと笑いを噛み殺してそう言う琴音さんを見て、思わずため息を吐きました。

「お、おい！ 何やってんだよ」

これから始まるショーに私が心を踊らせていると、近くにいた三年の男子が不安げな様子でこちらに話しかけてきた。

名前は……………忘れたな。

「何やってる、とは何だ？」

「『何だ？』じゃねーよ！ 何で変に焚き付けてんだよ！ お前が橘の味方にならねーでどーすんだよ！」

その男子 仮に男子Aとしよう が猛烈に捲し立ててくるので、思わず顔をしかめてしまう。ツバが飛んで眼鏡が曇るのだ。

それにしても、ほとんど義弟君の素性を知らないとは。義弟君は相変わらず日陰に隠れて生活をしてるらしい。

「大丈夫だ。問題ないだろう」

私はそれだけ言うと、話しは終わりだという意味を込めて前を向いて眼鏡をハンカチで綺麗に拭く。

その私の姿を見て、男子Aは舌打ち一つして前を向いた。その身体には何かあった時に飛び出して止めるためか、力が漲みなぎっているのがわかる。

他にも運動部と思われる男子が数人、四肢に力を溜めていた。心積もりは男子Aと同じなのだろう。

……………何と云うか、少し感動した。

我が校にはこれだけ後輩を思いやれる人間がいるのだ。彼らの所属する運動部には次回、多めに予算を配分しようと思う。

名前はわからないのだが。

「ハッハッハッ！ 俄然やる気が出てきたぜ」

両の拳を打ち付け、大分張り切っている我が部隊の新人、古賀こがの様子を見てから私を見て、義弟君は深い溜め息を吐いていた。大変失礼だと思う。

まあ正直、その気持ちも分からないでもないのだが、下手な言葉を吐き出すよりも簡単に自分の力を見せつけることが出来るのだから、口下手な義弟君にはこの展開に発展させた私には感謝してほしいものだ。

例えば私が、義弟君には絶対服従だ、と命じれば我が部隊の人間は義弟君がどんな人間であれそれに従うだろう。そう、調きょ……訓練してきたからだ。

だが、それでは意味がない。

人を率いる、とはそう言うことではないからだ。

大袈裟に言えば人を従えるというのは、その人間の命を預かるということだ。ならば、相手には自身の力を見せつけなければいけないし、真に自分に忠誠を誓わせなければならない。

良い例悪い例は数あるが、それが上に立つ者の責務なのだ。

義弟君には確かに人の上に立つ資質はあるが、性格も相まってかどうしても強気に出ようとしない。それでも男子Aの様に気のいい人間はついてきてくれるが、古賀の様な私の強い性格の者はついてこない。

纏まりのない集団はたやすく瓦解し、忠誠のない部下は常に背を狙う。

『優しさ』と『甘さ』は、似ているようで全く違うのだ。

仮にも、我が妹の婚約者、そして私の義弟となる男だ。そのよう

なひ弱な精神では困るのだ。

少々手荒ではあるが、今からでも鍛えていかなばなるまい。

断わっておくが決して楽しそうだからという理由ではない。

「ハッハッ！ お前には恨みはないが、この田島たじま一の下克上のため
に散ってもらうぜ」

獣のように笑って義弟君に向き直った田島 古賀ではなかった
は姿勢を低くして戦闘体勢を整えた。

一応、私の部隊の人間には、幾つかの格闘技を学ばせている。何
をするにしても、身体能力は必要であるからだ。

そして、あの体勢は後の先、カウンターを狙う体勢だ。

「愚か者め……」

「は！？ お前、いったい何を………っ！？」

思わず漏らした感想に、男子Aがすかさず反応する。が、その合
間に、決着はついていた。

刹那の一撃。

義弟君の右腕が霞む。

軽いタッチ、それだけだ。

田島の顎に撫でるように当てた一撃は、それだけで勝敗は決する
一打となった。

カウンター、というものは格闘技術の極致である。

相手に合わせてから自身の動きを決める。故に、それを狙うには優れた動体視力と冷静な判断、そして何よりも経験が必要なのだ。

田島は、鳴り物入りで我が部隊に入ってきた新人で、身体能力及びその他の能力は折り紙つきだ。ストリートファイトでも先のようなカウンター戦術を多用していたのだろう。

だが、例えそうだったとしても圧倒的に経験が足りない。

ただの喧嘩とは違う、一点の技術のみに心血を注いで繰り返しを行う反復練習の経験値。そういったものがない田島のカウンターは、どこにでもいる凡夫が相手ならば多少は通用するかもしれないが、義弟君が相手ではとてもではないが通用するものではない。

事実、田島は自分から義弟君に触ることすら出来ずに地に伏している。しかも、意識を刈り取られただけでほとんど無傷で、だ。

実践は、時に十も百も経験を得ることが出来るが、その土台となる基礎がなければ幾ら勝利を積みあげようが全くの無意味なのだ。

しかし、私の部隊の者と義弟君の能力の差が、未だこれほどあるとは……。調教……ではなく訓練の計画を見直さなければなるまい。

そんなことを考えながら、倒れた田島の介抱をしている義弟君の元に歩いていった。

「さて、これで義弟君が指揮を執ることに異議がある者はいないな？」

昨日、久しぶりに竜也さんと組み手をしたせいか、思ったよりも身体が動いてしまい、ちょっとしたいい角度で入ってしまったハジメ君の様子を見ていると、いつの間にか隣まで来ていた琴音さんはそう言って他の部隊の方々を見回しました。

「……はっ！　ありません」

「よし、ではコイツを連れていけ。水でもかければ目も覚ますだろう」

部隊の方々はきれいに詠唱して敬礼をすると、失礼します、と僕に言くと数人がかりでハジメ君を運んで行きました。

手のひらを返したようなその態度に呆氣にとられていると、琴音さんが僕の耳元で囁きました。

「……もう義弟君に不信の念を持つ者はいない。次の指示を出すんだ」

「は、はい。わかりました。」

琴音さんの言葉にどもりながらも、手短に皆さんに説明を始めました。

「で、今に至るわけか」

「はい、まあそういうわけで。正直、朝からヘビー過ぎて胃もたれそうです。」

「姉貴たちの関係者はどうもこいつもコユイからなあ」

悪い奴らじゃないんだけどな、と引かれたブルーシートの上に横になりながらタロ君が付け足しました。

第一競技からいきなり出番な僕は、とりあえずクラスごとに分けられたグラウンドの一角に戻り、競技開始の時間までタロ君と愚痴の言い合いっこをしていたわけです。

まあ、言い合いっこと言っても愚痴の対象は同じ人なのですが。

… あつ、だけどタロ君も関係者ですよ。やっぱりそうになるとタロ君もコユインですか？

「H A H A H A、面白いこと言うな。だがお前もすでに関係者入りなんだZ E?」

… A H A H A、けどタロ君には負けますよ。何たって関係者どころか血縁者ですからN E。

「よし、いい度胸だなヒロ。お前をコチヨコチヨ一分間の刑に処してやる。覚悟しろよ」

… イヤー、才助ケー。

「…………… ね、ねえ、どうしたの二人とも？何かものスゴく哀愁を感じるよ？」

虚ろな瞳で鬼ごっこを始めた僕とタロ君を見て隣に座っていた真君が引きつった顔でこちらに声を投げかけてきました。

… そうですか？ それはきつと気のせいですよ、真君。

「ああ、絶対に気のせいダ。俺たち、笑ってるだロ？」

「そ、そうなのかな？…………… 笑顔が逆に怖いよ」

壊れた人形のようにカタカタと笑うと、心なしか視界がにじみはじめたような気がします。

これが噂に聞いた『心の汗』なのでしょうか？

…それよりも、真君は準備出来ていますか？　すぐに僕たちの競技も始まりますよ。

心の汗を止めるために上を向きながら話題を変えます。

体育祭の第一種目は、多人多脚です。

簡単に言ってしまうと大人数による二人三脚でして、三人四脚が二組、四人五脚が二組、五人六脚が一組で行う二百メートル走です。体育祭の種目の中ではかなり大きな種目で、午前の部の最初にして、最大の目玉となっています。

その中の五人六脚に僕とタロ君、茜さんに波音さん、そして真君で出場することになっているのです。

「……う、うん。一応覚悟は出来てるかな」

…覚悟とはまた悲壮な決意ですね。

「もっと気楽にやれよ。転んだって別に誰も文句なんか言わないぞ？」

「けど、やっぱり僕が足を引っ張っちゃうんじゃないかな、って…」

真君にしては珍しく、暗い顔をしていることには僕もタロ君も気づいていましたが、そのことには触れませんでした。

真君は普段から笑顔を絶やさない、いつも他の人のために一生懸命になれるとても優しく、とてもまっすぐな人です。

真君のそんな姿を見てみると、こちらも自然に笑顔になってしまいう　　いつかも例にあげましたが、まるで天使のような存在なのです。

ですが苦手意識があるらしい運動関係では、いつものような笑顔はなりをひそめ、憂鬱そうに肩を落とすのです。

僕が見る限り、それほど運動能力が劣っているわけではないのですが、心に植え付けられた苦手意識は思いのほか強いらしく、人前で走ったり飛んだり運動をするときには、緊張からガチガチに固まってしまうのです。

もしかしたら、過去に何か辛い出来事があったのかもしれませんが、ですが、それを知る術を僕は持ち合わせていません。

真君に無理に聞き出すことも出来ないことはありませんが、それをしたところで意味はありません。

乗り越えなければならぬのは、他ならぬ真君自身だからです。僕たちに出来ることはほんの少し、迷う真君の背を押してあげるくらいです。

「……真君」

凜とした声が、体育祭の喧噪の中、妙にはっきりと聞こえました。

「……茜、ちゃん」

変声期を迎えていないと思えるほどの幼い声もまた、他のソレにまぎれることなく響きました。

今や、クラスの誰よりも真君のことを理解しているであろう人、茜さんが真君の隣に座りました。

…先、行ってますね。

「……はい。私たちの順番までには、必ず行きます」

僕とタロ君は立ち上がると、そのまま競技者の集合場所に向かっ

て歩き出しました。

「…珍しい」

タロ君と無言のまま目的地に歩いていく途中、いつの間にか隣にいた波音さんが僕の方を見上げてそう言いました。

…何がですか？

「…お節介を焼かないから」

…波音さんの中では僕はそういうイメージなんですか？

「…当然。それに優しくて格好いい」

さりげなくスゴく恥ずかしいことをさらりと言ってくれる波音さんの頭を照れ隠しの代わりに撫でます。

「まあ、実際俺たちに出来ることなんてないからな。ヒロにはいい判断だ……………痛っ！ 新宮っ、砂はやべエ！」

「…何もしなかったくせに……………偉そうに」

「けどヒロは他人のことに何でも首突っ込むから……………って、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！」

まだ競技が始まってもないのに砂まみれになっていくタロ君と一心不乱に、かつ的確にグラウンドの砂をぶつける波音さんの様子に苦笑いを浮かべます。

とはいえ、僕たちにだって出来ることはあるのです。

慰めるのではなく。励ますのではなく。
一人の親友として、彼を信じるのです。

真君ならば、そんな気持ちに伝えてくれる。

そう自分に言い聞かせるように、心の中で繰り返し、

「…殲滅」

「新宮……さすがにそれは死ぬぞ……………」

どこからか持ってきた、水分がたつぷりと含んだ砂（泥、と一般的に呼びます）の投擲体制に入った波音さんを見て、さすがに止めることにしました。

第十三話 大運動会編 貳・彼の気持ち（後書き）

僕たちの前の方々が、乾いた音を合図に走り出した直後、慌てた様子で真君と茜さんが走ってきました。

「ゴメン、遅れちゃって」

…構いませんよ。それより、早く足を結びましょう。

「うん！」

クラスカラーである青のハチマキを渡すと、真君はしゃがんで右隣の茜さんと足を結び始めました。

その真君の様子を見てから、茜さんの方を見ると、真っ直ぐにこちらを見据えながらコクリと頷きました。

その頼もしい様子に自然と笑みを浮かべつつ、僕も真君と足を結び始めました。

…全力で走って、ぶつちぎりますよ。

隣にいる真君にだけ聞こえるような大きさに呟くと、真君は一瞬驚いた様子でこちらを見たあと、いつもよりもずっと頼もしい笑顔を浮かべて返事をしました。

次回『大運動会編 参・女の戦い』

「……………あれ？ 私の出番は？」

…今回はお休みですよ、義姉さん。

「な、なんだってー！？」

お楽しみに。

第?話 何処かの誰が見る夢は(前書き)

1 . はい、遅くなりましたが一万ヒットのおまけ話です。えらく長いので(通常の二话の二倍から三倍ほど)夜に見ない方が健康的です。

2 . 本編ではどうしても張れなかった伏線をぐりぐりと詰め込んだ結果、結構なシリアスっぷりです、ごめんなさい。また、時系列はバラバラなのでご注意を。

3 . どうでもいいことですが、隠しキーワード、『似非ファンタジ』が解放です。

4 . 前置きが長くなりましたが、余話『何処かの誰が見る夢は』、始まります。

第??話 何処かの誰が見る夢は

ケースA 橘家の場合

お鍋のなかに豆腐と水で戻したワカメを入れ、味噌を入れて味を調整していきます。

軽く火で炙った油揚げを最後に投入し、少しかき回してからお鍋の火を止めます。

後ろから炊飯器の電子音が聞こえてきたのを確認しながら、網焼きしておいたししゃもをお皿に乗せました。

「まだなにか手伝うことあるー？」

「えーと、じゃあご飯をよそってくださいですか？」

「あいあい」

テーブルを拭いてもらっていた義姉さんにお茶碗とヘラを渡すと、パジャマ姿の義姉さんは足取り軽く炊飯器の前まで歩いていきました。

義姉さんと僕しかいないこの家では、基本的に家事は分担して行っています。

ですが、一週間は七日間です。普通に割ると一日余ってしまうのです。

そのため、日曜日は時間がある限りは二人で家事を分担してさっさと済ませてしまおう、という方針になったのです。

そして、そんな説明をするくらいですから、今はやっぱり日曜だ

ったりするわけです。

木漏れ日がカーテンを通してリビングを照らしています。

今日も快晴。夏の暑さが戻ってくるそうです。

イヤですねえ。寒いのも好きではないですが、暑いのも好きじゃないです。

「ほら、ぼーっとしてないで用意用意。私はお腹が減ってるんだから！」

…はいはい、あまり慌てないで下さい。朝ごはんは逃げませんよ。

そんなことを考えていると義姉さんに背中を小突かれました。苦笑を浮かべながらとりとめのない思考を打ちきり、朝ごはんの用意を再開しました。

「これから出掛けない？」

朝ごはんを食べ終え、後片付けを済ませてひと休みをしていたところで、義姉さんがそんなことを言い出しました。

…出掛けるって、どこにですか？

「前にいた孤児院」

…はい？ な、何でまた急に？

義姉さんがそういうところは、長い付き合いですし慣れているつもりでしたが、さすがに急すぎるというものです。

思わず呆けた声を出しながらも、一応何故そんなことを急に言い出したのかを聞いてみます。

「夢に出てきたからかなあ」

…いや、もう何て言いますか……………、まあ暇なんでもいいですが。

「やたあゝ！　じゃあ着替えてくるねー」

ため息を吐く僕をよそに嬉々とした様子で用意を始めた義姉さんを見て、まあこんな日曜日もいいのかなあ、などと諦め半分で考えていました。

「うわっ、久しぶり！　相変わらず何もないや」

…そうですね。でも、空気はとても綺麗ですよ。

電車を乗り継ぐこと一時間と少し。

僕たちは周りに何も無い、かなり殺風景な駅で降りました。

一応、関東圏内ではあるのですが、こういった秘境じみた場所はどこにでもあるようです。

…次のバスは三十分後ですね。待ちましょうか？

「んー、歩いてこ。三十分もかからないでしょ」

…まあ、いい天気ですしそれもいいですかね。

「そ、散歩がわりさね。それじゃあレッツゴー！」

バスのタイムテーブルを確認していた僕は、手を上げて元気よく歩き始めた義姉さんについつい苦笑しながらも、その後ろ姿を見失わないように早足で追いかけてました。

「やっつっぱり、スゴい懐かしいや！」

乾いて地面が露出した田んぼ。

ぼつんぽつんとある無人のバス停。

鬱蒼と大樹が繁った深い森。

木漏れ日の形が無限に変化する神社。

久しぶりに来たにも関わらず、何一つ変わっていないその光景に義姉さんは感嘆の声をあげ、その場でくるりと回りました。それに追従するように、義姉さんの薄手のブラウスとスカートがはためきます。

普段なら、その子供のような行動を、いけませんとたしなめるところなのですが、斯くいう僕も、幼少の頃の記憶とあまりに合致するその光景に、驚愕の声をあげていました。

…凄いですねえ。どこかしこも見覚えがあります。

「八年近く前なのに全然変わらないもんね。あ、覚えてる？あのバス停でヒロが迷子になったの」

…忘れてたくても忘れられませんよ。あー、そういえばさつき通りすぎた森で義姉さんも迷子になりましたよね。あの時は大変でした。

「……うっ。そ、それはだねえ」

義姉さんが珍しく頬をひくつかせてあれやこれやと言いつつ訳をしているなか、これなら孤児院も前のように開いているに違いない、とそんなことをぼんやりと考えていました。

孤児院には義父さんと義母さんに引き取られてからも度々連絡をとっていたのですが、義姉さんと二人きりになってからはゴタゴタ

していたので連絡をとっていませんでした。
なので、今日孤児院に訪問することになり、内心ドキドキだった
りしたのです。

そんな気持ちだったからでしょうか。
閉鎖された孤児院を見て、心臓が止まったのではないかと思える
ほど、衝撃を受けました。

ありえないことなんて、ありえない。

そんなことは知っていました。身を持って体験しましたから。
それでも、少し、ほんの少し目を離れた合間に、これだけ大切な
繋がりが、簡単に消滅してしまうなんて、考えもしていなかったん
です。

隣にいた義姉さんも、つい先程までの明るい表情かおではなく、何か
我慢するような表情をしていました。

何か声をかけなければ、と口を開いた直後、

「なか、入ってみよ」

不意に、義姉さんはそんなことを口にしました。

回転が鈍くなった頭では、義姉さんの言いたいことを理解するま
でに少々時間がかかりました。そんな僕が口を開くよりも早く、義
姉さんは孤児院の入り口に張ってあった鎖の下を潜っていつてしま
いました。

一瞬、その後ろ姿に静止の声をかけようとして……、止めました。
正直なところ、僕も入ってみたかったです。なら、義姉さんの
行動を止める言葉は、僕にはありません。

…足元、危ないですから気を付けてくださいね。
「ん。だいじょーぶ」

義姉さんの後を追って、僕も鎖を潜りました。

…これは、また、壮大ですね。

思わず、息を呑んだのは、昔は子供たちの共有スペースとされていた大広間にたどり着いた時でした。

崩落していた天井から、太陽の光が差し込んで、残されていたピアノを照らしていました。

さながら、その光景はステンドグラス越しに光を浴びる聖堂のようで、驚くほど高潔な雰囲気醸し出していました。

「……夢に………だ」

そんな雰囲気飲まれていたため、義姉さんが何かを呟いたのを聞き逃してしまいました。

何て言っただんですか？ そんなことを聞こうとした時、義姉さんはトテトテと部屋の端に歩いていつてしまいました。

「これ、覚えてる？」

置きっぱなしになっていた小型のソファをどかした義姉さんが、その後ろの壁を指差してこちらを見ました。

義姉さんが指差す壁が見られるところまで歩いていくと、そこには赤い塗料でラクガキが施されていました。

…懐かしいですね。

「この時のヒロはいつも私にひつついてまわってたよね」

…あはは、お恥ずかしい限りで。

昔を思い出すようにしみじみと語る義姉さんに僕は苦笑を浮かべて応じます。

そのラクガキは、確か油性ペンで書かれたものだったはずですが、時の経過を感じさせるように褪^あせてしまっていました。

少しだけ、残念で。

少しだけ、痛くて。

言い様のない感情が胸に去来しました。

「それでも、消えてないよ」

義姉さんが、ふっと笑みを浮かべて立ち上がりました。

「どんなに、薄くなっても。どんなに、色褪^あせちゃっても。消えてない、残ってるんだよ」

優しく、子供を諭すときのようにゆっくりと。

「私たちは、ここに居たんだよ」

僕に、そして自分に言い聞かせるようにしっかりと。

「そう。私たちは、ここに居た」

噛み締めるようにはっきりと、そう言いました。

「けど……それでも、どうしても辛かったら。私に言ってね」

そこで少しだけ間を置き、どこか夢げに見える笑顔を浮かべて、僕の頭を撫でました。

「私も、あなたをまもるから」

何にかえてもね。

そう付け足して、こつんと額同士を合わせました。

伝わってきたのは、暖かな体温と柔らかな匂いと。合わさった箇所からは心臓は遠いはずなのに。

とく、とく、とく。

とく、とく、とく。

確かに聞こえる僕と義姉さんの鼓動は、渴いてひび割れた心に染み渡って広がっていきます。

” 笑おう 一人じゃないから

僕たちは翼がないから翔べないけれど
繋いだ両手があるから

キミを感じるココロがあるから
二人ならきつと何処へだっていけるんだ
結んだ手が 結んだココロがあるから
きつと世界の果ても超えていけるから

だから歌おう 怖くないから
だから歩こう 一人じゃないから”

”唄”が、静寂に支配された孤児院に響きました。

少しの間呆けて聞いていましたが、未だに僕の頭に掌を乗つけている義姉さんの方に視線を向けると、はにかみながら笑っていました。

「……あはは、久しぶりに歌っちゃった。アカペラはちょっと恥ずかしいなあ」

義姉さんははにかんだままグシグシと一際強めに僕の頭を撫でてから、手を僕の頭から下ろしました。
少し残念に感じたのは内緒です。

「昔はここでよく歌ったりしたよね」

義姉さんは部屋の中央に置いてあるピアノに歩み寄り、そのイスに腰かけました。

昔、よくよく泣いていた僕のために、義姉さんが歌を歌ってくれたことが度々ありました。そのやさしい歌声を聞くと、自然と涙が止まったのは今でも覚えています。

…そうでしたね。義姉さんは昔から歌が上手でしたよね。音痴の僕には羨ましい限りです。

「あはは、そういえばヒロはなんでか音痴なんだよねえ。楽器全般はビックリするくらい上手いの」

深くイスに腰かけているので足が浮いている義姉さんは、それをパタパタと前後させています。

…そういえば義姉さんは楽器音痴でしたよね。改善されましたか？
「ぜんぜん。未だにけん盤のどれが『ド』でどれが『レ』だかもわからないよ。ヒロの方はー？」

…僕も全然です。歌うと声が裏返って大変なことになります。

僕がそう言っていると、お互いの顔を見合わせて、声を出して笑いしました。

気が付けば、先程までの陰鬱な気持ちが、嘘のように晴れていました。

今も昔も、僕は義姉さんに頼りきりなのかもしれません。

…そう言えば、このピアノは随分と綺麗ですね。

一頻り笑いあったあと、はたとそんなことに気付いて義姉さんが座るピアノを見ました。

天井が崩落するほど時が経っているのにも関わらず、目に見えるホコリはなく、ピアノ自体も損傷している様子がありません。

不意に義姉さんが鍵盤の一つに触れると、ピアノからは澄んだ音色が零れ落ちました。

…ありえない。

先程、自分でその観念を否定しておきながらも、思わずそう呟いてしまいました。

ピアノは、と言いますか楽器全般はまめに手を加えて調整しておかないと、すぐにダメになってしまいます。そしてこのピアノは見

ての通り、限りなく野ざらしに近い状態で、かなりの年月放置されていたはずです。普通ならば、弦が弛んでろくな音がしない、もしくは音自体しないはずです。

だのに、このピアノの音には一切歪みがないのです。

「いい音だねえ、心に染みるよ。アー、アー、アー………あつ！
この音はここだね」

この不可解な出来事について頭を捻っていると、ただ純粹に楽しんでピアノをいじる義姉さんが視界に入りました。

…まあ、どうでもいいですかね、そんなことは。

そんな義姉さんの姿を見て、何だかもうどうでもよくなってきました。

竜也さんにも言われたことですが、僕は物事を難しく考え過ぎなのかもしれません。

わからないことは、わからない。それでいいのかもしれません。

…先程の歌、もう一度歌えますか？

「え？いちお覚えてるけど？」

…じゃあ久し振りに伴奏しますよ。せつかくこんな綺麗なピアノがあるんですから。

「うわっ、久しぶり！」

義姉さんは満面の笑みを浮かべ、跳ねるようにイスから立ち上がりました。

そのイスに腰掛け、指を慣らす意味もこめていくつか鍵盤に触れてみますが、やはりピアノにはどこにも違和感はありませんでした。

とん、という軽い音とともに背中に軽い衝撃を感じて振り返ってみると、義姉さんが背を向けて僕に寄りかかっていました。しばらくもぞもぞと背を動かしていましたが、ベストポジションを見つけ出したのかその動きを止めました。

「うつし、いくぞー」

とく、とく、とく。

さつきよりもはつきりと聞こえてくる鼓動を感じながら、ゆつくりと伴奏を始めました。

ケースB 新宮家の場合

「アンタ……、何でだろうね。料理だけはどうしても出来なかったわよね」

両親が仕事に出ている珍しい日曜日。私が家事一式の練習をする絶好日。

そんな日に、呆れたような、諦めたような声が開け放たれたドアから聞こえた。

手に持っていたフライパンを下ろし、声のした方を見ると懐かしい顔がそこにあった。

「…香音、いつ帰ったの？」

「ついさっき。一応、電話もしたしインターホンも鳴らしまくったけど？」

「…気付かなかった」

家の電話に目を向けると、確かに着信があったことを知らせるように『留守電ボタン』が点滅していた。

料理に集中していた上に、換気扇が全力で仕事をしていたので、まったく言っていないほど何も聞こえなかった。

「今日から一週間くらいは泊まるから」

急に帰ってきた我が姉、にいみやかのん新宮香音はそう宣言すると、居間のソファにだらしなく寝ころんだ。香音がはいっているスカートはそれほど短くはないが、行儀が悪いことには変わらない。

「…もつと行儀よく」

「……………へ？ あ、わかった」

私が眉根を寄せてそう注意すると、香音はちよつと驚いたような顔をしてから素直に居住まいを正した。

彼がいたらきつと同じことを言うのだろうな、と考えると少し気分が良くなる。

「……………何で笑ってんの？」

「…何でもない、気にしない」

……………どうやら顔に出ていたらしい。

少し前にも同じようなやりとりがあったような気がする。どうにも彼のこととなると私の顔の筋肉は仕事を放棄するらしい。

「まあいいけど。……それにしても、そのフライパンの中身は何？」
「……………」

香音の指摘に、弛緩していた顔が盛大に歪め、それを誤魔化すためにそつぽを向いた。

……自分の手でそれを精製しておきながら、それでいてどここのフライパンの中身は異次元の隙間からこぼれおちてきた『何か』なのではないか、と本気で思ってしまうほどそれは黒かった。

冗談のように黒いそれ ダークマター 暗黒物質 を、何も考えないように仲間の眠る場所に埋葬しようとしたところで、香音が帰ってきたのだ。

「で、何を作ろうとしてたわけ？」

「……………」

「もう一回だけ聞くわよ？ 何を作ろうとしてたの？」

「…バターライス？」

「私に聞くんじゃない」

近づいてきた香音にチョップされる。ついでに着けていたエプロンも奪われる。

香音の横暴な振る舞いに非難の視線を向けると、思い切り呆れたような視線を返された。

「お昼は食べてないんでしょ？」

「…まだ、けど？」

「そ。じゃあ何か作るから待ってなさい」

「…私が」

「待ってなさい」

香音はびしっとソファを指差すと、慣れた手つきで準備をしはじめた。

抗議しようとして口を開いたところで『邪魔っ！』とタイミングよく一喝されてしまい、所在なくなってしまった私は、しょうがなく言われたとおりソファで待つことになった。

「…おいしい」

……そして、おかしい。納得いかない。

使ってる材料は同じはずなのに、何故私の料理は漆黒の衣を纏っているのか。疑問でならない。

「それはこっちのセリフよ」

昼食はすでに済ませてきたらしい香音は、私が食べてる姿を見ながら隣のソファに腰掛けていた。

しばらくじっとこちらを見ていた香音だが不意に、ところで、と会話を切りだしてきた。

「何で急に料理なんてやり始めたの？ 例の彼のため？」

先程、片手間で淹れていたコーヒーを飲みながら、心底不思議そうにそんなことを聞いてきた。

彼の話しは、香音が前に帰省してきたときに軽くしていたのだが、その後何故か不機嫌そうにしていたので、香音の方からその話を振

つてくるのは少し意外だった。
それでも、私は即答した。

「…そう」

「そっか……」

答えた私の顔を見てからやはり不機嫌そうな表情をする香音に、
首を傾げていると香音の表情はさらに不機嫌そうになる。

「アンタ、家事の才能ないわよね」

「…言われなくてもわかってる」

今度は私が顔を歪める。自覚はしてても他の人間に言われるとそれなりに悔しかったりする。

「けど、それでもこうやって努力してる。……何で？ その子はアンタが家事が出来ないとアンタのことを嫌いになるの？」

「…それはない」

それだけは断言できる。

たぶん、彼は苦笑いを浮かべながら私の頭を撫でて、頑張ったんですね、と受け入れてくれるだろう。

けど

「…それじゃあ、ダメ」

そう、それではダメなのだ。

彼は何でも出来る。

勉強だって、運動だって、家事だって、私と比べるべくもなく、

本当に何でも出来る。

だから、いつもいつでも、自分を差し置いてでも私を助けてくれる。

彼に意識してもらえるのも、気を使ってもらえるのも、正直、とても嬉しい。

けど、そのままじゃダメなのだ。

彼のためにも

私のためにも。

いつまでも、彼にとって『手を焼かせる存在』でいたくない。それだけで終わらせたくない。

彼の後ろ姿を見て歩くのも悪くない。だけど、どうせなら隣で手をとって歩きたい。

「だから、こんなところで躓いている時間はない」

誇れる自分であるために。

今度は私が彼を守るために。

「……………アンタ、変わったわね」

私の、誰にでもなくした宣言を、黙って聞いていた香音はぽつりとそう呟いた。

何が、という疑問を視線に乗せて香音を見ると、大人びた笑みを向けられると同時に頭を撫でられた。

「少し前のアンタは、こんな正直に自分の心を表せなかったわよ」
彼にされるよりも少し乱暴に、それでも優しく頭を撫でられ、目を細めてしまう。

……変わった。

確かにそうかもしれない。

誰の心の内でも容易くわかってしまう私にとって、心は恐怖の対象であり憎悪の対象でもあった。

剥き出しの感情と貼り付いた笑顔に、恐怖して、それを隠そうと憎悪していたからだ。

強くあろう、一人であるために。

実の親にすら一線を引いた反応をされていた私は、自身の心にそう刻みつけた。

結局、そんなことを続けられるほど私は強くなって、ぼろぼろになったところを彼に助けられた。

「……本当はアタシがその役目を担わなきゃいけなかったんだけどね」

自嘲ぎみに笑って香音は呟くと、撫でていた手を止めた。

香音は、私よりも四つ年上だ。

能力に戸惑う私を、姉である香音はずっと支えてくれていた。

親すら目を逸らした私の能力も、心も、理解した上で抱きしめてくれた。

初めて理解者を得た私は、どうしようもなく泣きじゃくって、どうしようもなく甘えた。

「何だかアタシの出番がとられちゃつみたいで悔しいわ」

けれど、当時の私はそれを悟られるのが嫌で、一時が過ぎて心の波風が治まったら香音の気持ちなど考えず、意地っ張りに突き放した。自分のことしか考えてなかったそのときの私は、今からすればどうしようもなくみつともなくて、当時のことを思い出す度にその横っ面に全力パンチをお見舞いしてやりたい気分になる。

まあ結果がどうなったかは今更語るまでもなく、香音が大学に通うために一人暮らしを始めた途端に、心の均衡が崩れてさんざん他の人に迷惑をかけてしまった。

今でも、こうやって香音に心配をかけている。

「…大丈夫」

だから、安心させるように胸を張って、

「…一人じゃないって気付いたから」

頭一つ分高いところにある香音の頭にも手を乗せて、

「…そう気付けたのは香音のおかげでもある」

恥ずかしいけれど、少しだけ素直になって、

「ありがとう」

今まで、くだらない意地が邪魔して言えなかった、感謝の言葉を口にした。

香音は、一瞬、呆けた顔をしたあと、盛大に顔を歪めた。

「馬鹿……っ！」

そう言つて、私に抱きついてきた。

その勢いを殺すことなど出来るはずもなく後ろにあったソファにもつれて倒れ込んだ。

「ばか、バカ、馬鹿………！！」

鼻をすする音と、呪詛のように私を罵る声だけが延々と部屋に響いていた。

私はただ、香音の頭をいつかしてもらつたように撫で続けていた。

「……………何だかいつもと逆じゃない」

「…たまにはいい」

「納得いかないわよ……」

あれから十数分後、抱きついたまま悔しそうに呟く香音の頭を、私は未だに撫で続けていた。

いつもやられている側なのだが、人にやるのも悪くない感触だ。今度、彼にもやってみようと思う。

「……………アンタを変えた男の子ってどんな奴なの？」

まるで私の考えていたことを読みとっていたかのように、不意に香音がそんなことを言い出した。

「イイ男？」

「…いい男」

当然即答した。

私は彼ほど強い人を知らない。

同時に彼ほど弱い人も知らない。

強くて、弱くて。それでも前を向いている彼が、私は大好きだ。

私が即答した様子を見て、香音が口を開いた。

「私たちは姉妹よね？」

口を開かずに頷いた。

「好きなオカズも好きなテレビ番組も同じよね？」

頷いた。

「アンタはその子にベタ惚れなのよね？」

頷いた。三回ほど余計に。

「じゃあ私もその子に会い」

「…それはダメ」

当然のように即答した。ついでに彼がするように香音の頬をつまんで黙らせることにした。つまんだ部分が微妙に涙や鼻水で湿っている気がしたが、今日はまあ許すことにした。

ケースC 伊田家の場合

…ぴちよん。

今日は珍しくバスケット部の練習がなかったはずだ。

バスケットはまあ好きなんだが、高校の練習は中学の時のそれとは、質も量も違う。今でこそだいたい慣れたが、それでも練習中ぶっ倒れるやつもいたりするくらいには大変だ。

…ぴちよん。

……つーわけで時には何もない休みの日が恋しくなったりするわけなんだが

「……どこだ、ここ？」

俺は確か自分の部屋の布団で寝てたはずだ。

そこから今に至るまで一度も覚醒していないのだから、俺の寝相が壊滅的に悪くなければ見知った天井か壁が見えるはずなんだが…。

…ぴちよん。

俺が目覚めて一番に見たのは荒削りな石が剥き出しになっている天井だった。

俺の部屋っていつの間にかこんなアウトドアなリフォームされたん

だ……、ってそんなボケをかましてる場合じゃない。

…ぴちゅん。

あー、ちなみにこの『ぴちゅん』ってのはさっきから俺の額にしつこく水玉が落ちてくるのな。

くすぐったいそれを拭うために手を動かそうとしたところで、更なる違和感に気付いた。

手が……、拘束されてる。ついでに足も。

ここにきて、寝ぼけていた頭が急激にクリアになる。脳細胞の一つ一つがしっかりと働いているのが感じられる。

そして、そんな脳細胞たちの首脳会議の結果は多分に正鵠せいこくを射ていたと思う。こんな非常識なことを何の前触れもなく行つ人間、俺は一人しか知らない。

「上姉うしえねえええ！ この拘束解いてくれええええ！」

とりあえず、この状況を作り出したであろう人間の名を、全力で叫んでみた。

「ふむ。よく私がやったとわかったな。なかなか良い洞察力だ」

「そりやそうだろうーよ。……ってか遅エエエエ！！ マジこの部屋時間感覚ねえからってどんだけ待たされたと思ってたんだよ！？ 軽く二時間はこのまんまだぞ！？」

「……ふん、この程度で感覚を狂わせるとはな。私がお前を放っておいたのは四時間だ」

「まさかの倍プッシュ！？」

叫び続けること四時間（体感二時間）、ようやく現れた黒幕の発言にかなり衝撃を受ける。

だが、試合でも枯れたことがない声が、今はガラガラなのだからそれも頷けることなのかもしれない。

とりあえずそんな状態になるまで叫んだためか、少し落ち着いてきたので（ただ単に騒ぐだけの体力がなくなったただけかもしれないが）、目の前の上姉こと伊田琴音に状況の説明を求めることにした。

「……何で朝っぱらからこんなことすんだよ？ 下姉したねえとかオヤジは俺が拉致拘束されてることは知ってんのか？」

「何、少し質問がしたかっただけだ。上でするには少々具合が悪い話でな、下に同行願ったわけだ。奏は感づいているのではないか？ 父様の場合は逆に知らないわけではないだろう」

質問した内容に、順番通り答えていく上姉の冷静さにそこはかない苛立ちを覚えるが、もはやこんなことはいつものこと、と脳内処理を進め、現状を把握するために得られた情報を整理してみる。

一、上姉は俺に何らかの質問、てか詰問をするために朝っぱらからこんなところに連れこんだらしい。

二、この中世を彷彿とさせる拷問部屋は、地下にあると思われる。

三、下姉こと伊田奏と七色の遺伝子を持つなどと言われる変態にして現伊田家当主、伊田慎太郎いたしんたろうはこの割と抜き差しならねえ状況を知っていてスルーしている。

四、仰向けのまま手も足もキレイに拘束されており、外せる気がしない。

五、上姉は楽しそう。

もつ、どこからツツコンでいいやら皆目見当もつかないんだが、とりあえずこれだけは言わせてくれ。

詰（死）んだろ、これ。

……いやいやいや、マジ大げさな物言いかじゃないからな！
見るよあの上姉の笑顔、あんな顔ドS星雲からやってきた女王様
（二重の意味で）だってしねえよ！？

「まったく、好き勝手言ってくれるな、太郎」

「……………っ！」

こ、声に出てたらしい。

マズい、何とかして宥めなければ、と考えたところで上姉がパチンと指を鳴らした。途端、床屋のイスのように俺が拘束されていた台が起き上がり、角度が九十度になって足が床についたところでその動きが止まった。

「いったい何を……………」

「前々から考えていたことだがお前のその年上を敬わない態度、矯正しなければならぬな」

上姉が再び指を鳴らすと、突然、黒子くろこの衣装をまとった人間が数人、天井から降ってきて音もなく着地した。

何もない天井からどうやって降ってきたのかは非常に気になるところではあるのだが、それ以上にその黒子たちが手に持っているものに意識がいった。

「筆に……………羽？」

そう、どちらかというとクナイや手裏剣でも持っている方が似合
いそうな黒子たちは（いや、まあ実際持ってたらヤバいんだが）、
習字用の大小さまざまな筆を持っていたり、真っ白な大振りの鳥の
羽を持っていたりするのだ。

「剥け」

『はっ！』

意図が読めずに呆けている俺を無視し、上姉が黒子たちに指示を
飛ばすと、女の声がキレイにハモって返事をする。

そのうちの一人がハサミを持って近づいてくると問答無用に俺の
シャツを切り出した。

「ちよつと待て！ いきなりなんだってんだ！ てかアンタ女なの
かよ！？」

「ぎゃあぎゃああと取り留めのないことを喚くな」

「うふふ……暴れると綺麗な肌に傷がついてしまいますよ？」

「だからアンタは何なんだよ！？ つーか鼻息荒げんなやああああ
ああああ！！！」

興奮しているのか、ちよつと上擦った声を出す黒子に、色々と危
機感を感じて暴れるも、手足を縛られた状態ではろくな抵抗も出来
ずにシャツを切られてしまった。

もはや布切れと化した寝間着を黒子が手際よく取り除いていくな
か、俺は上姉を睨みつけて声を荒げる。

そこ、無駄な抵抗とか言うな。

「服なんざ切つてどうするつもりだよ、上姉ッ」

そんな俺の様子を齒牙にもかかけず、上姉は俺が先程まで否応なし

に見つめていた天井に視線を送っていた。

「太郎、頭は何ともないのか？」

「……は？ いや大丈夫だけといったい何だよ、急に」

相も変わらず言動が突拍子のない上姉に、思わず毒気を抜かれる。
……しかし、上姉が俺の健康状態に毛一本ほど、神経を割くだろうか？

……！

まさか遅ればせながら、とうとう家族の大切さに気付いたのだろうか？

だとするならば体の心配はいい。今すぐこの拘束を外して目の前で荒い呼吸を繰り返す黒子たちを退かしてくれ。

「お前に当てていた水滴、あれも拷問の一種でな。何でも、定期的に脳に振動を与えると浅い催眠状態になるらしい。お前の脳、なかみ身体と一緒に存外に頑丈らしい」

「あああああっ！！ わかってたよ、どうせそんなこったろって思ってたよ！！！」

…… もう叫ぶしかないと思った。

実の弟にさらりと拷問を仕掛ける姉を持ってしまった自分の境遇に、泣きながら叫ぶしかないと思った。

が、そんな微かな希望すら叶えさせてもらえないらしい。

「ひっ！！！」

突然身体に走った言い知れぬ感覚に、叫ぶことを中止し、代わりに変な声を上げてしまう。

おそろおそろ、その感覚が走った方向
黒子の一人が羽を持った手を震わせていた。 足に目をやると、

「……………琴音様、そろそろ」
「ああ、そうだったな」

手だけでなく声まで震わせている黒子の言葉に、上姉が首肯した。
ここまでくれば、何をされようとしているのかさすがにわかる。

「う、上姉……………。止めてく」
「やれ、くすぐり倒せ。ただし、最後の一線は越えるなよ」
『はっ！』
「止める、来るなッ！……………ひ、ひ……………ひいやああああああ
あッ！……！」

目の前にはB級映画よろしく、ゾンビのようにフラついた足取りで近づいてくる黒づくめの集団。

……………もう絶叫するしかなかった。

最後に見えたのは、愉快そうに笑って紅茶を飲む上姉の姿だった。

「そういえば、お前に聞きたいことがあるのだがな。太郎、お前まさか義弟君とよからぬ関係に発展してはいないだろうな？」

「アハハ、才姉サマ。サスガニソレハアリ得マセンヨ？」

「だろうな。何でも腐った女子とやらがそんな噂をしていたらしいのでな。ちなみにお前は攻めで義弟君は受けたそうだな」

「ゴ冗談ヲ。僕八至ッテノーマルデスヨ？」

そんなことを聞いただけに……？

そんな言葉を飲み込んで、平坦な笑い声を上げる。

小一時間近くなぶられて、心も体もすでに白旗を掲げているのだ。

（ああ、俺、女性恐怖症になりそうだなわ）

（何と言いますか……、頑張りましょう、タロ君）

脳内に浮かんできた我が友の励ましの言葉に、不覚にも涙があふれそうになった。

ケースD ???

月が綺麗な夜、冬の到来を感じさせる澄んだ空気を裂いて目的の建物を目指す。

「ここ、か……」

程なくして見えたボロボロの建物の門に埋め込まれているプレートを、黒革の手袋をつけた手でなぞり、ついていた砂ぼこりを落と

してその建物の名前を確認する。

周りに誰もいないことを確認してから中に入ると、小型のライトをつけて一直線に『ある部屋』に向かう。

もとより、さほど広くもない建物だ。すぐにその部屋にたどり着いた。

その部屋では、ライトがいらないうでであった。大きく抜け落ちている天井から月明かりが射し込んでいたからだ。

歩みを止めることなくそのまま部屋の中央部 月明かりに照らされるピアノの元に向かう。

軽くピアノに触れて手袋に埃がついたのを確認し、開け放たれていた鍵盤にも手を触れた。

「……そうか。残された時間は少ないんだな」

すでにその使命を終えていたピアノにもう一度触れ、自分に言い聞かせるようにそう呟いた。

第十四話 大運動会編 参・女の戦い

- ・どの部活でも参加可能。
- ・各部活から五人を選出し、その内の一人を大将として更に選出。
- ・各部員は風船付きのヘルメットをつけ、その風船が割れると死亡判定。ゲームから除外される。
- ・勝敗は大将の風船（色付き）の破壊のみ。
- ・フィールドはグラウンド全域。ただし、客席まで飛び込んだチームは即時失格とする。
- ・武器等は支給されたもの以外は使用禁止（素手での攻撃、自然物の利用は可能）。支給されるのは、モデルガン（ペイント弾、五発装填済。使う場合は両チームにゴーグル支給）、刀（スポーツチャンバラ用）、盾（縦横一メートル半）、予備の風船（大将は選択不可。どこにつけるかは自由）、各部の特徴となるような物（要申告）の五種。そこから各部自由に五つを選ぶ。
- …… e t c .
- （ブリッツ・ルールブック『来たれ、ぐらでいえーたー！』より抜粋）

第三種目の呼び出しを遠くに聞きながら屋上への扉を開けます。
校内にこもっていた少し冷えた空気が逃げだすかわりに、夏もかくやという熱風が滑り込んできました。

…あうあう。

誰に言うでもなくそう呟いてから、覚悟を決めていやに張りきっている太陽の下に歩みを進めていきました。

「あ、ヒロくん。意外と早かったねえ」

扉の開閉音で気付いたのか、簡易テントが張ってある屋上中央部にいた奏さんがこちらに手を振りながら小走りに向かってきました。他にも数人の方々がこちらに気付いたようで、手を振っていました。それに会釈を返しながら、予定調和の如く飛び込んだきた奏さんの両肩を掴んだまま回転します。

一回転して飛び込んだきた勢いを殺すと、そのまま地面に立たせます。

「ぶっ。なんか手慣れてきてるみたいな対応で悔しい」

…会う度に飛びつかれているんですからさすがに慣れますよ。それより、これ、差し入れです。

両肩にかけていたクーラーボックスを開けて中の飲み物と軽食を見せるとぶーたれていた奏さんの顔が輝きました。

こういつてはアレなんです、琴音さんと違って大変御しやすいです。

「じゃあAグループとBグループの人は十五分休憩してー。食べ物は自由に、飲み物は絶対持つて行ってね！」

『はい』

奏さんが振り向きながら手早く指示を出すと、AグループとBグループの方々が手を挙げて近づいてきました。

そういつた指示をほぼノンタイムで出せるところに伊田家の血を感じながら、クーラーボックスに入っている飲み物や食べ物を手渡ししていきます。

三年の方、二年の方、同級生の方と手渡していくうちに、ここにいなければならぬ人がいないことに気付きました。

…えー、と。クイナさんはどこに行っただんですか？

本来、ここにいて奏さんとともに指揮をとっているはずのクイナさんがどこにもいないのです。

クイナさんは小さいので、誰かの影に隠れてしまっている可能性も考慮して注意深く周りを見渡してみましたが、やはりその姿を見つけることは出来ませんでした。

「んー？ 気になる？」

琴音さんがよくする、愉しげな表情を浮かべ、奏さんが首を傾げました。

…はい、気になります。クイナさん、昨日から何やら怒っているようですし……。

「……いやあ、さすがに鈍いなー」

僕がうなだれながら先程のクイナさんの状況を説明すると、奏さんは頬をかいて苦笑を浮かべました。

何でしょうか？ スゴく呆れられているように感じるのですが……。

「……クイナちゃんは帝陵の様子を見に行ったよ」

更にうなだれる僕の頭に腕を乗っけながら、耳元で奏さんが呟きました。

その内容に思わず眉根を寄せます。

：帝稜、ですか。危なくないでしょうか？

「もちろん危ないよ。けど止めても聞かなくなつて……」

深追いはしないようにとは言つといたんだけどねえ、と呟くと奏さんにしては珍しく大きなため息を吐きました。

今年の体育祭は、例年の体育祭よりも大分警備に手を入れていきます。

去年、一昨年と警備についたのは数人の父兄の方々や、手の空いた教師の方々だけらしいですからかなりの強化といえるでしょう（人知れず琴音さんが私兵の方々を出していたそうですが）。

ここまで露骨に警備の人数を増やしたのですから、帝稜の方々も情報が漏れているのにはさすがに気づいているでしょう。そうなるガードが厳しくなるのは当然ですし、情報収集に伴う危険が増すのも当然です。

「橘さんには言わないでほしいってさ」

渋面を作りながら、携帯に手を伸ばしかけたところで奏さんにその手を握られました。

「信じてほしいって」

一言。奏さんにそう言われて思わず動きを止めます。

そんな僕の反応を見ながら、諭すような口調で奏さんが続けます。

「ヒロくんは何でもかんでも背負っちゃうからね。まあ今回の件はお姉えが悪いけど、本当はもつといるんな人に頼っても良かったと思うよ」

…ですが、

「だーかーらー、そーゆうところがダメなんだよ。……誰かを信じて待つことも、時には必要なんだよ？」

そうビシツと言われ、反論も出来ずに口ごもります。

「たまにはさ、誰かに頼ってみなよ。『君』の背中も手のひらも、そんなに大きなものじゃないんだから」

『君』。初めて奏さんにそう呼ばれて少しばかり動揺します。その反面、心の別の部分は少しだけ冷静になっていきます。

…クイナさんは、大丈夫でしょうか？

「あはは、まあだ言ってる！ 大丈夫だよ。クイナちゃんはある見えてもたくましいんだから。それに……」

奏さんはそこで言葉を切ると、僕の背中を軽く叩きました。

「もし何かあっても王子様が助けにいればいいんだからね」

そう言うのと、頭にかかっていた重量感がなくなりました。

下げていた頭を上げ、奏さんの方を向くと、奏さんはすでに僕に背を向けて簡易テントの方へと歩いて行くところでした。

その姿を確認し、僕も小走りですそれに追いかけます。数歩走って奏さんに追いついたところで、他の方に聞こえないように呟きました。

…ありがとうございます。

「うん、どういたしまして！　じゃ、行こ！」

振り返った奏さんは満面の笑みを浮かべて返事をしたあと、僕のジャージの裾をつまんで再び歩を進めました。

「南西、明らかに学生ではない人間を確認しました！」

僕が屋上に来てから十分ほど経った頃でしょうか、屋上の一角が、にわかに騒がしくなります。

どうやら、監視についていた方が侵入者を発見したようです。

「オーケー！　目え離さないでね」

「はい！　……あつ！　どうやら森の中に進入するようです」

「……森かあ。じゃあ集音マイク向けて。悲鳴が聞こえたら教えて『回収』に向かってもらうから」

「ひ、悲鳴ですか？　わかりました」

その方が僅かに顔を引きつらせながらも言われたとおり集音マイクを向けた直後、少し離れたこちらにまで悲鳴が聞こえました。

この学校の校舎の南西側には山と隣接した森があり、その部分には簡易のシャッターしかありません。自然から学ぶことも多い、というモットーのもとにこういった特異な形で学校が創られたらしいです。

大樹が所狭しと生えているこの森は昼といえども相当に薄暗く、かつ何も考えずに歩を進めれば十中八九迷うほど広大です。

人の目につきづらいこの土地は、潜伏にはうってつけの場所であることは言うまでもありません。

守るにしても、攻めるにしても、この森が急所であることは間違いないでしょう。

かといって、かなりの広さであるこの森全域を見て回することは当然出来ません。

そこで考えたのは、森の中、特に学校付近の森に大量の『罌』を仕掛けることでした。もちろんただ仕掛けるのではなく、どこに、どれだけ、どのような罌が仕掛けられているかを完璧に把握しなければいけません。

そして、今回その大役をお任せしたのが、

「ふふん、これで今日三人目だね」

隣で得意気に笑っている奏さんでした。

当初、僕がある程度罌を仕掛ける場所を地図に起こしていたのですが（三日ほどかけてフィールドワークしました）、奏さんから言わせれば、甘い、とのことで今日の朝には大幅に罌の位置と量が変更されて設置されており、かつそれが全て地図の上に正確に印されていました。

僕としては、作ってきた地図に手直しを入れてもらおうと考えていただけだったのですが、まさかその日のうちに設置まで終わるるとは欠片も考えていませんでした。

奏さん曰く、得意分野だから、だそうです。

「非殺傷の罌は作りづらかったけど頑張ったかいがあったね……
いつそのことちょっと怪我させちゃった方が楽なんだけど」

さらっと恐ろしいことを奏さんが呟いた気がしますが、きっと気のせいです。

「えー、と。あそこの近くに……」
「隼^{はやぶさ}」だね。隼の人たち、聞こえてる？」

奏さんは地図を眺めてから、無線機を掴みました。

今回の作戦は、部隊数がやたらと多いため、小隊毎に名前がついています。電撃参戦となった琴音さんの部隊にはアルファベットをもともと組んでいた風紀委員の部隊（＋補充に回った琴音さんの部隊の方々）には鳥の名前がつけられています。今し方呼ばれた『隼』という部隊は、確か二年生の方々が中心となった小隊だったはず。

ちなみに遊撃隊として個人行動する僕にも名前がついていたりするのですが、ちよつと恥ずかしいので内緒です。

「……ああ、聞こえるぞ」

無線機から聞こえてきたのは小さなノイズと落ち着いた声でした。確か、この声は……

「あー、隼隊は静ちゃんだったね。じゃあ安心だ。ポイント・セブンの辺りにいる獲物の回収に向かって。どうせ盗撮にきた変態さんだろっけどねー」

「……了解した。あと、俺の名前は静留だ。そこで略すな、女みたいだろ」

「静留だって十分に女の子みたいな名前だよ。それに外見だって綺麗だし」

「……………」

奏さんの主張に、無線機の向こう側にいる人物が黙り込みます。

確か、隼隊のリーダーは獅子道静留さんだっただけです。

静留さんは剣道部の新部長であり、個人の部で全国大会に進出したこともある凄腕です。

外見は奏さんの語るように、女性が嫉妬するほど女性らしいのですが、静留さん自身はそれを気にしていないようです。

ちなみに奏さんとは同じクラスらしく、度々先程のように絡まれているらしいです。励ましの言葉の一つでも掛けたいところなのですが、静留さんとは僕も面識があり、かつちよつと話づらい事情があるので、心の中でエールを送るに留めておきます。

『もしやとは思うが、隣に橘がいるか？』

ですから、静留さんがそんなことを言い出した時には、思わず声が漏れそうになりました。

な、何故急にそんなことを……？ 声に出ていた、なんてことはないはずなんですが。

「どしたの、いきなり？」

そんな僕の心境を察してくれたのか、奏さんが疑問を投げかけました。

『……………勘だ』

少しの間のあと、返ってきたのは非常に単純明快な言葉でした。

『何となく、頑張ってください、と慰められた気がした』

ニュータイプばりの反則的な直感を見せつける静留さんに、盛大

に頬を引きつらせます。

『橘め……、いつまでも逃げ回れると思うなよ。絶対に我が部に入部させてやる』

続く言葉に、今度は頭痛までしてきました。

静留さんとは一学期の頃の合同体育の授業の時に出会ったのですが、その時に目をつけられ、以降、顔を合わせる度に剣道部の入部を迫られています。体育の授業の時などは、基本的にのりくらりと軽くこなすようにしているのですが、それでも静留さんには見破られてしまったようです。

決め文句は『俺ならお前に（剣道をやることの）幸せを感じさせてやれる！』というものです。

（ ）の中身を言わない、いつも冷静な静留さんが情熱的にこのセリフを言う、放課後の教室、という色々な状況が重なり、その方面の方々に勘違いをされる事態となったのは記憶に新しいです。

「……んー、いないよ。今はお姉えのとこじゃないかな」

『会長か……。しょうがないな、今日は諦めよう』

おそらくしかめっ面をしているであろう僕の顔を見た奏さんは、さらりと嘘をついて僕を匿^{かくま}ってくれました。

驚いて奏さんの方を見ると聖母のように慈愛溢れる笑顔を浮かべていました。常の奏さんならば何かしらイタズラを仕掛けてきてもおかしくないのですが、今回はそのような誘惑に負けなかったようです。

義姉さんと違って大人です。さすがですね。

「あつ、そういえば」

などと、思ってたのですが。

「頑張り次第ではヒロくんを一カ月好きにしてもいいって。お姉えが言ってたよー」

『な、何だと……？ 了解した。隼隊、至急現場に向かう！』

絶句、です。

穏やかに済みそうであつた話題が奏さんの一言で予想だになかつた展開に発展しました。

声を出そうにも、出した瞬間に静留さんに気取られてしまうので抗議の一つもロクに出来ません。

「お姉えのせいお姉えのせい」。私は悪くないよ」

誰にともなく、白々しく呟く奏さんの声と、

『待つてろよ橘あああ！ お前は必ず俺が頂くからなあ！』

通信機ごしに聞こえてくる静留さんの雄叫びだけが、妙に大きく頭に響きました。

「……あー、あの先輩も相当変わり者だからなあ」

「何で言うか……、キャラ変わっちゃってるもんね……」

太陽が頂点に上る頃、手が空いた僕は癒やしを求めてタロ君と真君の元にやってきていました。

普通、警備の責任者をしている僕の手が空くことはないはずなの

ですが、奏さんが

『休憩にいつてこーい！ 異議は認めん！』

と言つて僕のことを屋上から追い出したのです。手持ち無沙汰になつてしまつた僕は、琴音さんがいる本部（校庭の一角です）に向かおうとしたところ、腰にぶら下げていた本部直通のトランシーバーから琴音さんの声が聞こえてきました。

『こちらにも来なくていいぞ。そのまま休憩、一時には戻つてきてくれ』

僕の行動を見透かしたように琴音さんに釘を刺され、呻き声をあげてしまいます。

お二人が気を使つてくれているのはよくわかるのですが、さすがに他の方々に申し訳ないような気がします。

とは言え、お二人の言葉に僕が反論など出来るわけありませんし、実際問題それなりに疲れていたので、お言葉に甘えさせて頂いたのです。

「そついや、あと何の競技が残つてたっけか？」

午前の部の最後の競技が終わり、お昼を食べるために方々に散らばつていく人たちを見ながら、不意にタロ君がそんなことを口にしました。

午前の部をクラス対抗戦とすると、午後の部は部活対抗戦といった様相で行われます。

運動部にとって来期の部費を査定する意味合いもあるので、午前の部以上に盛り上がることもあるようです。

もちろん、クラス対抗の競技も最後の最後にあるのですがそこま
で体力が保つのかは微妙なところですよ。

…確か部活対抗リレー、部活対抗障害物競争、あとブリッツなんか
がありましたね。

「あーそうだ、ブリッツか。俺、出ないといけないんだよなあ」

「えと、ブリッツってなに？ 初めて聞いたんだけど」

首を傾げてこちらに問いかける真君の反応は、一学年で、かつ部
活に所属していない人間としてはある意味当然の反応です。たぶん、
日本中のどこを探してもこれほどフリーダムな競技を実施する体育
祭はないでしょうからね。

ざつと真君に競技内容を話すと、しばらくぽかんとしたあと、お
もむろに口を開きました。

「……そ、それってさ、危なくないかな、スゴく」

「危ないだろうなあ、スゴく」

事もなげに応じるタロ君に、真君は声も出ないといった様子で驚
いています。

まあ、気持ちには痛いほどわかります。僕も関係者ということで、
事前に情報を得ていなかったならば、同じような表情をしていたか
もしれません。

…けど人気なんですよ、この競技。

「え、こんなに危なそうなの？」

「やっぱり普通の学園生活じゃガチンコで勝敗を決めるって機会が
ないからなあ。みんな何だかんだで楽しみにしてんのさ」

…それに皆さんの凝りかたも楽しいんですよ。去年なんか弓道部の

方々、赤い服を着てみんなで弓を持って来たらしいですからね。

「本当は双剣がよかった、とか言ってたらしいな。さすがに許可が降りなかったらしいが」

「……へえ、それはちよつと楽しそうかも」

「皆様！ お待たせしてしまいましたわね！」

真君が少し表情を柔らかくしたところで、不意に声が掛かりました。声につられてそちらを向くと、巻き髪とクラスカラーのハチマキを風になびかせている美佳さんと、げんなりといった様子でそのあとに続く茜さんと波音さんが目に入りました。

「さあ！ 決闘の時間ですわ、茜さん！」

「は、はあ……」

さながら、台風のような存在感を放つ彼女に、つい苦笑を浮かべてしまいました。

情報は命である。

私の座右の銘だ。

大げさな物言いではなく、情報の真偽は時に人の命をも左右する。私が幼い頃、父は多額の借金を背負っていた。

理由はあまりに単純。普通に考えれば、あり得ないことだとすぐにわかるようなふざけた情報に踊らされて、見込みのない物に投資

をした。

奇跡は、当然のように起きなかった。

綺麗な家も、大きな家具も、私の服までも。

全部全部持つて行かれて、残されたのは当時の私では数えることが出来ないほど膨大なゼロが並ぶ借金だけだった。

……結局のところ、そんな私達を助けてくれたお人好しがいて、その人のおかげで今こうして生活が出来ているのだから、奇跡は別の形で起こったのかもしれないのだけ。

まあ、そのような過去を持っているだけに、正確な情報がいかに重要なものであるかは他の人間よりもずっと理解しているつもりだ。

そんな私が、現在、息を殺して潜伏しているのは学校にほど近い廃工場だ。

人目が少なく学校に近く、かつ適度な広さを持つこの建物は学校に攻め込む前の決起場としては絶好の条件を揃えている。

そんな見るからに危険なスペースをそのままにしておいたのにはもちろん理由がある。

まずは、単純にこちらの頭数が揃わなかったことが挙げられる。頭数として換算出来ないと思われるいた女子を屋上からの監視役にして全体の動きをスムーズにしたり、生徒会長がどこからか軍服の人を連れてきたりしたもの、外に攻めていけるほどの人数が揃っているとはとても言えない。というか、あくまで大切なのは学校を守ることであり、生徒を守ることなのだから目的を履き違えてはいけない。

また、この廃工場がかなり寂れているとはいえ、人の出入りがまったくないわけではない。ここで大人数が激突すれば、一般人を巻き込む可能性が出てくる。学校を守るためとはいえ、そのために他の誰かを傷つけたのでは話にならない。しかも、最近では小学生

の遊び場にもなっているようで、うかつに罾も仕掛けられなかった。

……小学生というワードで嫌なことを思い出した。

頭に浮かんできたのは、よくよく微笑する男子の顔だった。前に、小学生みたい、とからかわれたからだ。

最近、その男子の顔を度々思い出してしまい、その都度顔を赤らめてしまう。

恥ずかしい話だが、たぶん惚^{のろけ}気ているのだと思う。

『オオー!!』

大音量の関の声。

瞬時に思考を打ち切り、頭も切り換えて、その声がした方へ気配を殺しながら歩いて行く。

「テムエ等アア！ 汚ねえ手使われて負けたんだよな！？ なら全面戦争だ！！ 遠慮はいらねーぞ！！」

『オオー!!!!』

建物の中、学ランを着た人物が鼓舞するように声を張り上げていた。

それに応えるのはまたも大音量。

しかし……、

「多いつすね……」

事前の調べでは二十人、或いは三十人ほどが集まると思われていたが、今この場には軽く六十人は集まっている。

……これは、致命的な失敗だ。相手戦力を測り間違えることは、説明の必要もないくらいにマズイ。

舌を打ってUターンしようとしたとき、ドサツと物音がした。

「……………あ」

小学生の低学年だろうか。集団から見える位置で、幼い女の子がこの場の雰囲気^あに中てられたのか腰を抜かして座り込んでいた。

「ああん？ 何だ、このガキは？」

サングラスを掛けた男子がその女の子に気付き、近寄っていく。

帝稜の人間が如何にガラが悪いとはいえ、これほど小さな子供に何かするとは思えない。

きっと廃工場の出口まで追いついてそれで終わりだ。

だから、ここでその子を助けに行つてむざむざ見つかる必要はない。第一、子供一人を連れて逃げることなど到底無理だ。

論理立てて、今の状況を整理して。自分が行く必要がないことを何度も確認して。

そちらに構うことなく廃工場の出口に向かう

「あ！ 何だ、デメエ！？」

ことは出来なかった。

「お、おねえちゃんだね？」

「いいから！ 早くつかまって！！」

我ながら甘すぎる……！

思わず浮かぶ自嘲の言葉を頭を振って掻き消しながら、うるたえる子供の手をつかんで一気に出口まで走りだした。

第十四話 大運動会編 参・女の戦い（後書き）

「運動会編もついに動き出しました！」

ベンベベンツ！

「敵地で発見されてしまったクイナちゃんは果たして無事なのか！？」

ベベベンツ！

「そして、謎の競技『ブリッツ』はどのような展開を見せるのか！！？」

ベンベンベンツ！！

「次回『大運動会編 四・フルバーニアン』！ お楽しみに！！」

…義姉さん、どうやらブリッツという競技にはもう触れないらしいですよ？

「え？ じゃあ何であんなに細かく設定したの！？」

第十五話 大運動会編 四・フルバーニアン

『人ってさ、意外と何でも出来ちゃうんだよね』

陽溜まりの中、男は常のようにゆつくりと口を開いた。

『だからね、つい何でも背負い込んでうんだ。例え結果が目に見えていても、最後までやりきろうとするんだよ』

男は大人しく話を聞く二人の子供の頭を撫でながら、穏やかな笑みを浮かべる。

『僕は二人にはお互いを助け合ってほしいんだ。一人じゃ出来ないことも、きっと二人なら乗り越えられるからね』

わかったかい？ そう聞くと、子供たちは男の顔を真っ直ぐ見返しコクリと頷いた。

男は満足げに笑うと、子供たちの手を引いて帰路についた。

『義弟君、聞こえるか？』

美佳さんと茜さんの因縁の対決を苦笑しながら見ていると、腰に下げていたトランシーバーから琴音さんの声が聞こえてきました。

…はい、聞こえています。どうかしたのでしょうか？

指定された時間である一時までは、まだ幾分か余裕があったはず
です。基本的にも応用的にも、琴音さんは自身が放った言葉に責任
を持つ方です。そんな信念を置いてでも時間前に連絡をしたという
ことは、即ち緊急の事態であるということです。

『ああ、緊急の用件だ。悪いがすぐに生徒会室に来れるか？』
…了解しました。すぐそちらに。

琴音さんの声音は平時とほとんど変わりません。
ですが、それこそが逆にその用件が抜き差しならない問題である
と告げていました。

「何かヤバそうなことがあったみたいだな」
…はい、そうみたいです。

隣で同じように美佳さんの奮闘ぶりを眺めていたタロ君が、他の
人たちには聞こえないように呟きました。
ちなみに真君も先程まで隣にいたのですが、美佳さんに審判とし
て担ぎだされてしまい、今は教室の中央であたふたしています。

「見当はついてるのか？」
…はい、おそらくですが。

手首足首の柔軟をしながら、出来るだけ感情を表に出さないよう
に心がけながら返答します。

「そっか。……それにしてもお前はすぐに顔に出るな」

…え？ 本当ですか？

「ああ、不安でしょうがないって顔してるぞ」

顔に手をやって表情を確認してる僕を見て、タロ君が笑みを浮かべています。それにつられて僕も苦笑いを浮かべます。

…ままならないものですね。隠しているつもりだったのですが。

「ま、お前はウソがつけるほど器用な人間じゃねえからな」

…むう、何かバカにされた気分ですねえ。

「お、気がついたか？ つまりはバカ正直だ、って言いたいわけさ、俺は」

二人でもう一度笑い、身体の余計な力が抜ける頃に、タロ君が少し真剣な面持ちで口を開きました。

「怪我とか、すんなよ。お前が怪我するとお前以上に辛い思いをする奴だっているんだからな」

…はい、わかっています。

即答した僕に満足したのか、タロ君は、よしっ、と笑って呟くと僕の肩を叩きました。

…じゃあ、行ってきますね。

「おう、こっちは任せとけ。特に新宮のこととかな」

「冗談を言いながら何事もなく応じてくれるタロ君に感謝しながら、校舎に向けて走り出しました。

「クイナ嬢はどうやら敵に見つかったらしい」
…やはり、そうでしたか。

第一声。少々乱れてしまった服装を整える間もなく、琴音さんが口を開きました。

一応、予想した通りの事態でしたから、余計な動揺はせずに済みました。

「……少し、意外だな」

…何がですか？

「義弟君ならもう少し動揺するかと思っていたのだが」

琴音さんが予想外といった表情をしながら首を傾げているのを見て、思わず苦笑を漏らします。

…きつと、タロ君のおかげですよ。

「アレのおかげ……？」

…タロ君がいつも通りに話しをして、笑ってくれたので、僕も冷静になることが出来たんです。タロ君には感謝してもしきれません。

「……そうか。アレはどういうわけか人に取り入ることに長けているからな」

未だ琴音さんに『アレ』呼ばわりされるタロ君に深く同情しながら、話しの続きを促します。

琴音さんもそれに頷くと、何事か走り書きされたメモを持ち上げて状況の説明を始めました。

「クイナ嬢から入った最後の連絡だ。敵の総数は六十、例の廃工で決起集会をしていたようだ。その様子を窺っている最中に見つかったらしい。廃工からの脱出は出来そうにないが、何とか身を隠して

いるとのことだ」

…六十人ですか。ずいぶんと集まりましたね。

「ああ、予想していた数の二倍から三倍だ。どうやらあちらは総力戦にするつもりらしい」

呆れたようにため息を吐く琴音さんに、出来るだけ心情を悟られないように口を開こうとした直後、手を出して止められました。

「じゃあ僕が相手の数を減らしておまけにクイナさんも助けてきます、などと言う気か？」

…や、何で僕の言おうとしたことがわかったんですか？

「義弟君は考えていることがすぐ顔に出る。誰にでもわかるだろう」

眼鏡の奥から冷めた視線を僕に送りながら、くいつと僕の頬を掴む琴音さん。

あれれ？　こんなやりとり、さっきもありませんでした？

「とはいえ、こちらも切れるカードは少ない。残念だがその方法しかないだろうな」

…え？　いいんですか、勝手に突っ込んでしまつて？

僕が素っ頓狂な声を上げて聞き返すと、頬を掴む手に力が入りました。痛いです。

「……ここで許可しようがしまいが義弟君は勝手に行くだろう？」

…バ、バれてましたか？

「当たり前だ。冷静になるのはいいが、なつたらなつたで平気で無茶をするな、義弟君は」

…一応、責任ある立場なので独断専行はよくないかなあ、とも思つたんですが。

「心にも無いことを言うな」

琴音さんは不機嫌そうに言ってから、一際強く頬を引っ張ってからようやく手を離してくれました。やっぱり痛いです。

「まあ、行くからにはクイナ嬢の奪還は絶対だ。わかってるな？」
「はい、もちろんです。」

「とにかく、少しでも時間を稼げ。こちら目処が立てばすぐこちらに援護に行く」

頷く僕を見て、琴音さんも小さく頷きます。

話はつきました。あとはいかに速くクイナさんの元にたどり着くか、いかに長い時間クイナさんが追っ手から逃げる事が出来るかです。

目的地となる廃工はなかなか広いです。すばしいクイナさんならば僕が到着するまで逃げまわることも可能でしょう。

何にせよ、少しでも速くあちらに飛び込んで僕に注意を向けないといけませんね。

少し息を吐いてから生徒会室を出て、走りだそうとしたところで通信機から声が聞こえてきました。

『ヒロくん、聞こえる？』

「はい、聞こえますよ。奏さんですよ？」

『正解。さすがだね！』

通信機越しに笑い声が聞こえてきましたが、その声には心なしかいつものような元気が足りない気がします。

…どうかしまりましたか？ 何か疲れているようですが。

『……あはは、相変わらず変なところで鋭いなあ』

身体を冷やさないようにゆっくりと歩きながら会話を続けます。

奏さんは『やっぱりなあ』とか『そうだよねえ』などと自身を納得させるように二、三呟き少しだけ沈黙したあとに思い立ったように

『ゴメン！』

と口に出しました。

何故謝られているのかわからずに返答に窮します。

『やっぱり私がしつかり止めなきゃいけなかったんだよね。危ないのがわかってたんだから、なおさらだよ』

続く言葉で、ようやく奏さんが元氣のない理由がわかりました。

クイナさんが危機に陥ったのは自分の責任だと思ってるわけですね。

おちゃらけているように見えて、実は人一倍責任感が強い奏さんですから、らしいといえらしいのですが。

だからこそ、

『お願い、ヒロくん。絶対にクイナちゃんを助けてあげて！』

この言葉にどれだけの想いが込められていたのか……、想像に難くないです。

…はい、必ず。

きつと、その想いに応えるのに余計な言葉はいらないのだと思います。

出来る限り安心できるようにはつきりとした声で返事をします。通信機越しの気配が、少しだけ柔らかくなったのを確認すると、今度こそ止まることなく走り出しました。

歩けばおよそ十五分ほど、走れば五分ほどで着く目的地まで、ショートカット（佐々木さん宅と池田さん宅にはあとで謝罪に行かなければなりません）と全力疾走を駆使して二分と少しでたどり着くと、走ってきた勢いのまま工場内にいた帝陵の制服を着ている三人組のところまで向かいます。

本当はこういう荒っぽいことしたくないのですが、いかんせんこちらには情報が足りなければ、時間もありません。

「あつ！ おまつ」

三人組の内の一人が僕に気付き何事か叫ぼうとしましたが、最後まで言えずに吹っ飛びます。

スピードの乗った僕の膝が、いい感じに入ったからです。

「っ！ テメエは！」

「まさかっ！？」

仲間の一人が吹き飛ばされたのを見て、残った二人もようやく状況を理解したようです。

が、残念。何もかも遅いのです。

構えていた一人の足元を、勢いを殺すためにしゃがんだ姿勢から回転しながら一気に払い、相手の姿勢が崩れたところで、跳ね上げるようにして勢いをつけた掌底で顎を狙います。

狙い通り、顎を打ち据えたその人が膝から崩れていくのを確認して、最後の一人の方を向くと

「……ぶはっ！」

爪先が顔にめり込んでいました。

一瞬呆けたあと、驚いてその飛び蹴りを放った人物の方を見やり、そのあまりに意外な人物に思わず呻き声うめをあげます。

「お待たせしました。クイナちゃんを助けに行きましょう」

強すぎる日差しの中でも、その凜とした雰囲気
を崩さない彼女
立川茜さんがこちらに手を差し出していました。

その一種超然とした雰囲気
に飲まれ、数瞬の間言葉を発することが出来ずに口をぽかんと開いていました。

「……え、えーと。大丈夫ですか、橘さん？」

そう茜さんに心配そうに聞かれ、ようやく正気に戻ります。

…な、何でこんなところにいるんですかつ！
それに何故クイナさんのことを！？

あまりに想定外の展開に泡を食って茜さんに質問をぶつけると、差し出していた手で僕の手を掴んで立ち上がらせながらゆっくりと

答えました。

「ここにいる理由はクイナちゃんを助けることで、クイナちゃんが危ない状況にあることを知ったのは波音ちゃんから聞いたからです」

立ち上がらせてもらってもなお、見上げるほど背がある茜さんに視線を送りながら必死に今の状況を纏めようと思ひます。

「波音ちゃん、本当は自分で助けに行きたいと言っていました。でも、自分が行ったらきつと邪魔になっちゃうからって私にお願いしたんです。『彼を助けてほしい』って」

…波音さん……が？

「はい。波音ちゃんが私に何かを頼むなんて初めてでした。それにあんな真剣な顔を見せたのも……」

…で、ですがっ。

諭すように続ける茜さんに、食い下がろうと口を開きましたが二の句を継げずに黙り込みます。

「それに私だって友達を助けたいんです。クイナちゃんも、もちろん橘さんも」

そんな僕を氣遣つてか、苦笑いを浮かべながらそう続けました。その心遣いが、嬉しくて、嬉しくて、少しだけ悲しくて。

目を閉じて心の整理をつけると、ゆっくりと目蓋まぶたを開けます。

…皆さんは、このことを？

「北条さんはしょうがないですから今日のところはドローにしておいてあげますわ、と。伊田さんは………妨害されるらしいので話

せませんでした」

…真君は？

「……自分が納得できるように頑張つて、と」

…そう、ですか。

少しだけ息を吐き、覚悟を決めて茜さんの目を見ながら口を開きました。

…僕からもお願いします。一緒に、クイナさんを助けてください。

僕の言葉がよほど意外だったのか、茜さんは一瞬固まりましたがすぐに嬉しそうに笑みを浮かべ、

「……はい、もちろんです！」

弾んだ声で返事をしてくれました。

自然と浮かぶ笑みを心地良く思いながら、頭に浮かんでいた作戦の説明を始めました。

「この女のジャージ……、あの高校の生徒か」
「チッ！ やっぱりこっちの情報筒抜けだったのかよ！」

……自分で自分が許せなくなったのは、これで何度目だろうか。

勝手な行動をとって、意味もなく敵に身をさらして、こうやって捕まっている。

針金で後ろ手に縛られた両腕が、予想通りビクともしないことを確認しながら、私は自己嫌悪に陥っていた。

「しかし、ガキ一人逃がすために捕まるたあ、大バカだな！」

眼前の、頭の悪そうな茶髪の男がしゃがみこんで気持ちの悪い笑い声をあげた。

今、私は奴らが集まってバカ騒ぎしていた建物の中に転がされていた。

奴らに見つかったあの後、必死に逃げ回って隠れ回ったが、結局あの子を逃がすことしか出来ずに私は捕まってしまった。

建物の中が段々と騒がしくなっていく。私を追うために散っていた人間が戻ってきたのだ。

すでに二十人程は集まっているだろうか。それなのに私に何もしないのは、リーダーの到着を待っているのかもしれない。

「エエ、オイ！ 黙ってねーで何か言えよ」

私が現状を把握するために黙っていたのが気に食わなかったのか、茶髪の男が私の服を掴んで無理矢理引き起こす。

出来るだけ感情を殺した表情でその男の顔を見返すと、男の顔に一瞬怒りがよぎったが、次の瞬間にはニタリといやらしい笑みを浮かべていた。

「デメエ……びびってんのかよ？」

そう言われてようやく自分でも気付いた。

私は震えていた。

情けないことに、自分一人で立つことすら出来ないほど、腕も足も恐怖に拘束されていた。

勝手だ……。勝手すぎる。

自分から危険な場所に身をさらしておきながら、恐怖に身を震わせて……

あの人に、助けを求めている。

その感情を自覚してしまったら、もう止められなかった。

怖くて、情けなくて、どうしようもなくて。自然と涙が溢れてきた。

そんな私を見て、男たちは愉快そうに笑いだした。

「やつばただのガキだな！ 泣いてやがんの」

「安心しろよ！ 御堂さんの目え盗んで、お前のことたっぷり可愛がってやるからよ」

……悔し涙で、前が見えない。

それでも……。

それでも……………。

曲げたくないものが、私にもあるから。

目だけは、決して逸らさない。

たとえ怖くても、逃げたくても。

唇を噛みしめて、拭えない涙をそのままに私は前を向く。

それが私の信念。いつかした、あの人との約束。

「アアッ！？ テメエ、なんだその目……………」

「や、やべえ！！ あの高校の奴が攻めてきやがった！！」

私の意志を挫こうと、男が凄もうとするが、ドアにぶつかる勢いで中に入ってきた男子があげた叫び声にかき消される。

憎々しげに私を見下ろしてから、私の目の前の男たちが未だ混乱している様子の男へ質問をぶつける。

「おい、それであっちは何人で来てるんだ？ 十人か？ 二十人か？」

「それが……………」

「んだよっ！ はつきりしろよ！」

「………… たったの一人なんだ。一人で何人もぶっ飛ばしながらこっちまで来てるんだよ！」

その男の言葉に、建物の中が一気にざわつく。

私の心にも、波紋が生まれる。

………… まさか。まさか、彼が助けに来ることなど。

「………… で、そいつは何者なんだよ」

「………… やけに丁寧な口調で『鷹』です、とか言ってるやがった」

「ずいぶん舐めた名前じゃねえか……っ！　おい、全員外に出ろ！　そのすかした野郎をフクロにするぞ……！」

その男の言葉を合図に、そろそろと武装した集団が外に出ていく。

……さっきの会話で、確信した。

誰がここに来て、私を助けに来たのか。

「馬鹿っす……。やっぱり、橘さんは馬鹿っすよ………」

思わず溢したのは、いつものような憎まれ口だった。

こんな時まで素直になれない自分に呆れながらも、心のどこかが温かくなるのを感じた。

第十五話 大運動会編 四・フルバーニアン（後書き）

「さあ、とうとう運動会編も佳境に入りました！」

ドン！

「『アレ？ 体育祭の話なのに全然運動してなくね？』とか言いっこなし！」

ドン！

「ヒロの消費カロリーは体育祭全競技に出た人とかよりもたぶん上になるからそれでいいのですー！」

ドドンー！！

「次回『大運動会編 伍・ゴーレムVSバーサーカー』！ おっ楽しみー！！」

「えっ？ ゴーレムってまさか私のことですか？」

…まあ、その、あれです。頑張りましょう、茜さん。

第十六話 大運動会編 伍・ゴーレムVSバーサーカー（前書き）

書き上げ 即投稿の流れなのでもしかしたら後日校正が入るやもしれません。

余談なのですが、短編のモトをいくつか作成中です。

地球滅亡物とホラー物、皆さんはどっちが好きですか？

あ、どっちも好きじゃないですか、そうですか。

第十六話 大運動会編 伍・ゴーレムVSバーサーカー

その者は無双を目指していた。

子供の頃には誰しもが憧れそして捨ていく夢を、いつまでも持ち続けていた。

どうすれば頂点に立てるのか。

その者は一日中考え続けてあることを閃いた。

『あつ！ 他の奴を片っ端からぶっ飛ばして最後まで立っていらればオレが最強じゃね！？』

まるで名案でも思いついたかのようににはしゃぎ回って実行に移した。

もう皆まで言うまい。

その者は馬鹿なのであった。

「一人でこの人数に襲いかかってくるたあ、とんだ……ふげっ！」

僕を囲むように展開しようとしていた人たちの中から、一歩前に出てきてこちらに話しかけてきていた人の顔を踏みつけて

…すみませんが、そんな露骨な時間稼ぎにはつきあえませんか？

跳びました。全身のバネを使って飛距離と高さを生み出すと、そのまま完成されそうだった包囲網から脱出します。

『……は？』

ぼかんとした表情でこちら見ている方々に笑いかけると、今度はこちらから固まっている方々の元に向かいます。

…覚悟は出来ていますか？

一步。踏み出しながら、そう聞きます。
何割かの方が、身体をビクつかせます。

…僕の大切な友人に手を出したんですから。

一步。更に踏み出しながら、両手に持った長めの『縄』を蠢かします。

何割かの方が顔を引きつらせます。

…それと、他の方を相手にしている間に復活されても困りますから、ちよつと痛くしますよ。

一步。更に更に踏み出しながら、笑みを深くします。
何割かの方がじりりと後退します。

いい兆候ですね……。

対峙している方々の様子を見ながら、内心ほくそ笑んでいました。

多対一において、最も危険視しなければならないことは、多方面を囲まれることです。

どれだけ優れた反射神経を持っていたとしても、多方向からの攻撃に反応することは難しいのです。

ですから、このように出来るだけプレッシャーを与えて怖じ気付かせることが出来たならしめたものです。

そのために、最初に相手をした方々にはちよつと派手に散ってもらったわけなのです。まあ多分に八つ当たりの必要な要素を含んでいたのは否定できないわけですが。

「ふ、ふざけんなぁッ！」

そんな思考に身を沈めていると、先程顔面を踏みつけて沈黙していただいた方が、顔を真っ赤にして跳ね起きると叫び声をあげました。

その姿を横目で確認しつつ、軽くため息を吐きます。

…気絶したと思いましたが、意外と頑丈なんですね。

目を細めながらそう言ってみると、その方の額に青筋が出ます。

挑発しやすいなあ、と内心ニヤニヤしながらトドメの言葉を吐き出します。

…気絶していれば、これ以上痛い目を見なくてすんだのに、残念でしたね。

「……っ!!」

努めていやらしい笑顔を浮かべるようにしながらそう語りかけると、もう言葉もないといった様子で身体を戦かせ、こちらに駆けだ

いやはや、最近は琴音さんや奏さんなど、僕よりも一枚も二枚も上手の人とばかりいたので、これくらいまっすぐでわかりやすい人には好感すら抱いてしまいます。

鉄パイプを振り上げ無造作に走り寄ってくるその人に極限まで脱力していた腕から『縄』を連続して打ち出しました。

ですが、『角度』と『タイミング』、この条件が揃った時、ただの縄は凶悪な武器になりえるのです。

質量はそこそこあるので、僕のような未熟者がやっても鞭のように十分な武器になるのです。

一応、それなりに手加減はしていたので、その人は鉄パイプをとり落としてノックアウトしただけ済みました。骨折はしていない……はずですよ。

224

数歩下がりました。

僕と那些人たちの間には十人ほどがダウンしています。たぶん、この騒動中には目を覚まさないでしょう。

四十人ほどの集団が固まっている先、クイナさんが捕まっている建物（ここに来る前に一人捕まえて尋問しました）が見えます。

とりあえず、僕の役目はこの人たちの目を出来るだけ僕に向けさせることです。このまましばらくこの方々の相手をしていければいいでしょう。

そんな、甘えにも似た考えは次の瞬間には霧散していました。

轟音。

あまりに予想外に。あまりに唐突に。

目的の建物から煙が立ち上ると同時に、爆音が辺りに響きました。次いで、猛獣のように荒々しく、剥き出しの敵意が全身を襲いました。

身体中の毛穴が開きそうなほど強烈なそれに、反射的に身を震わせます。

「今の音……………、御堂さんか！」

「ちっ、他にもいたのか！？」

「御堂さんの応援に何人が行け！」

正面にいる方々が若干の落ち着きを取り戻しながら二手にわかれようとしたところで僕が待ったをかけます。

…僕が、それを許すとても？

『……………うっ』

効果は抜群でした。

目に見えて集団の動きが鈍りました。

それでも、後退り^{あとじき}をして建物の方へ向かおうとした人に、一気に近寄ると膝を水月に入れて、沈黙させます。

倒れるその人をそのままに、人混みを一気に駆け抜け抜けると、今度は僕が建物を背にしました。

…すいませんが、事態が変わりました。

そう言って両手に持っていた縄を手放し、空いた右手を前に出しながら半身の姿勢をとります。

そんな僕の様子を見て、目の前の集団が俄^{にわ}かにざわつきはじめます。

「……………！ 何だか知らねーが武器を手放しやがったぞ」

「……………舐^なめんじゃねえ！！」

顔を赤くしながら、五人がこちらに走り寄ってきます。

トゲトゲとした形のメリケンをつけた人が二人、角材や鉄パイプなど長めの得物を持っている人が三人。

…いえいえ、舐めてなどいませんよ。

「じゃあ何で武器を捨て……………」

先陣を切っていたメリケンをつけた人を、最後まで喋^{しゃ}らせずに正面から叩き潰します。

ぎょつとしたように動きを止めた四人にも、問答無用で躍りかかりました。

徒手空拳で戦う僕が、今回の戦いで武器を使用していたのには二

つほど理由がありました。

一つ目は出来るだけ派手に戦って集団の目をこちらに引き付けるためです。あのようなもので戦うことは普通の人にとってあまり馴染みがないことです。から、目を引く効果は十分にあると踏んでいます。

二つ目は手加減をするためです。この人数相手にもしガチンコで当たったならば、つい本気を出してしまう可能性があります。そうすると全治数週間とかでは済まない怪我を負わせてしまう可能性があります。ありましたから、出来るだけからめ手からめ手で戦っていました。僕の役目はあくまで『時間稼ぎ』ですからね。

ですが、状況が変わりました。

あの爆音から、何らかのイレギュラーが起こったことは明白であり、それにその場にいた『彼女たち』が巻き込まれている可能性は高いのです。

今すぐにその現場に向かいたい衝動に駆られますが、目の前の集団を放っておけば高確率で建物内での乱戦に発展するでしょう。そうなればクイナさんの奪還と護衛は非常に困難になります。

今の僕に出来ることは、一刻も早くこの場を收拾し、後顧の憂いを絶った状況で応援に向かうことです。

ですから、僕はこんなところで遊んでられないのです。

「……足でパイプをツ！」

振り下ろされる鉄パイプを足の裏で受け止め、そのまま前蹴りでその人の意識を奪いさり、左手側でばかんとしていた人の足を一気に刈って転倒させます。

続く攻撃が来ないのを確認し、少しだけ後ろに振り向きます。

頑張ってくださいね、茜さん……。

出来るだけ気配を殺して、風を切るのではなく、風と同化するようにして進む。

迅速に、敏速に。それでも決して他人に気取られないスピードで私は廃工内を走っていた。

「……あと少し」

雄たけびや断末魔が広がっている広場を大きく迂回しながら進んだためにかなり時間がかかったけど、それでもあと少しというところまでやってきた。

目的の場所 クイナちゃんがいるらしい建物の裏口はすぐそこだ。

橘さんが口にした作戦は驚くべきものだった。

自分が囷になって敵の目を引き付けるから、その間に私がクイナちゃんを助けて脱出する、というものだ。

さすがに危ない、そう言って止めようとした時には、既に橘さんはどこからか連行してきた不良の尋問を始めていた。

某段ボール愛好家並の手際の良さに呆気にとられていると、橘さんは首に当て身を入れて連れてきた不良を気絶させてしまった。

橘さんは聞き出した内容を私に手短かに話すと、お願いしますと一

言残して走って行ってしまった。

止めた方が……。

一瞬、そう思って口を開こうとしたが、踏みとどまった。

話によれば、クイナちゃんは既に捕まってしまうているらしい。ならば固まって行動するのは、いざというとき不利になる。

それがわかっていいるからこそ、橘さんは迷わずに行動に移ったのだ。さすが、と言わざるを得ない。あの一瞬で、状況の把握を済ませたのだ。

出そうになった言葉を齒を食いしばって飲み込むと、クイナちゃんを救出するために私は踵を返した。

裏口の扉に手をかける。

ここに鍵がかかっていたれば、多少のリスクを背負ってでも表側のドアから侵入しなければならぬ。

目を細めながら手に力をかけると、少し重い手ごたえとともにゆっくり扉が開いた。

「僥倖、ですかね？」

警戒しながら建物内に侵入するが、不良たちはどこにもいなかった。恐らく何人かは残ると思っていたが、橘さん、本気で不良全員を引きつけたらしい。

辺りをざっと見回すと、予想以上に簡単に彼女が見つかった。

「……あ、あ、あ」

……っ！

尋常でない様子で唸る彼女を見つけ、思わず息を飲んで駆け寄る。

「……………クイナちゃんっ!?!」

もしかして何をされたのか!?

もし彼女に何かあったら、私は……

「足つつたつす……………」

「……………」

…………… 壮大に転んだ。人はこれほど綺麗に転べるのかと思うほど、勢いのままに転んだ。

埃を盛大に巻き上げて倒れた私に気付いたのか、驚いたように大きな声をあげた。

「あ、茜さんっすかっ!?!? なんてこんなところに!?!」

「…………… 助けにきたんだけどね」

何となくいたたまれない気持ちになったのを、埃まみれになったジャージを軽く叩いて誤魔化したあと、クイナちゃんの足を縛っている針金を外し始める。

「それは結構固く巻いて……………」

「大丈夫、問題にならないよ」

クイナちゃんの言う通り、針金はかなり固く巻いてあった上に、所々きつく結ばれていたが、それを無理矢理に解き、手に巻かれた針金も同じようにして外す。

「さあ、足をつっちゃったみたいだけど立てる？」

「へ？ あ、はい。大丈夫っすけど、どうやって針金とったんですか？」

「こつ、『捻じ切り』ました」

「……ね、捻じ切る」

左手でジェスチャーをして針金を解く過程を説明すると、何故だかわからないがクイナちゃんは思いつきり顔を引きつらせた。真君もたまに同じような表情をするのだけど、どうしてなのだろう？

……まあ、そんなことは置いておこう。とにかくにも、クイナちゃんを安全圏まで連れて行かなければならない。

今も外からは破砕音や怒声は響いている。すぐにでも助けにいかないと……。

「……外で戦ってるのは、やっぱり橘さんっすか」

「うん。だから速く助けに行かないと」

クイナちゃんの質問に首肯して手を引こうとしてから、ようやく気付いた。

「……よう、話しは終わりか？」

この、獣のような殺気に。

「くははは、あんまり話しが長いんでな、出そびれちゃった」

「……後ろからは襲わなかったんですね」

振り返り、上を向く。

剥き出しになった屋根の鉄骨の上には、改造学ランを来た不良がいた。

「あつたりまえだ。お前らみたいな卑怯な真似、オレがするわけないだろ」

両手の拳をぶつけて軽く笑うと、その不良はかなりの高さがある天井の鉄骨から飛び降りると、軽々と着地してみせた。

存在感、身のこなし、そしてこの殺気。そのどれも外にいた不良のものとは異質だった。

「……卑怯な真似とは、いったい何ですか？」

「ああ？ この期に及んで何言つてやがる」

クイナちゃんを後ろに庇いながら、その不良の言葉で引つかかった部分を訊いてみる。

だがその質問は取りつく島もなく一蹴された。

「まあ、そんなことはどうだっていい。重要なのはお前が強いかどうかだけ、だ！」

「……っ！ クイナちゃん！」

「きゃっ！」

少しの間怪訝な顔をしたと思ったら、次の瞬間にはその不良は突進をしてきていた。

普通の攻撃ならば、余裕をもって逃げだせたと思う。だが、この不良の攻撃は普通のそれとは大きく異なっていた。予備動作が無い上に、尋常ではないほどにスピードが速いのだ。

ほとんど反射的に後ろに庇っていたクイナちゃんを抱いて横っ跳びにそのシヨルダータックルを避ける。

間一髪。

ギリギリのところでは攻撃を避けて、その不良の走っていった方を見やると、すでに反転してこちらに拳を打ち込もうとしていた。

避けきれない。そう判断した瞬間に左手に抱えていたクイナちゃんを横に放り、右腕を顔を守るようにして構える。構えた瞬間、信じられないような衝撃が右腕を起点に全身を走り抜け、次いで身体が引つ張られるように後方に吹き飛ばされた。

意識が飛びそうなほどの痛みを無視し、飛ばされた勢いのまま身体を反転させると宙に浮いたまま壁に着地　　全身のバネを使って壁を蹴り壊しながら跳ねる。

「うおっ!？」

こちらの行動がよほど予想外だったのか、一瞬の隙が出来ていた不良に、態勢を変えて変則的な多段蹴りを放つ。右手に走る痛みのせいで私の方も一瞬だけ動きが鈍り、渾身の蹴撃はガードされる。

だが、それでも威力は十分にあり、今度は不良を反対側の壁に叩きつけた。

「茜さん！　だ、大丈夫なんすか!？」

「ん、とりあえずは大丈夫かな」

受け身を取って出来るだけ衝撃を散らすと、起き上がって全身の状況を確認する。

ところどころ、軽い痛みを感じるが動けないほどではない。

……のだが、右腕だけは別だった。骨には異常はないようだけど、痺れたように動かせない。回復までにはいくらか時間が掛かりそうだ。

一撃でこの状態。正直予想外だった。

ちょっとマズイかも……。

「……………く、くは、クハハハハッ！！」

大音量の笑い声が建物内を支配する。

音源は言うまでもなく壁に寄りかかるあの不良だ。

「……さすがに、この程度じゃ終わりませんか」

「あ、茜さん……」

「先に逃げて、って言いたいところだけど、外も危ないよね……」

「そんなことより！ 茜さんの方が危ないじゃないっすか！」

「……あはは、確かに」

内心の焦りを悟られないようクイナちゃんを茶化しながら、前を向く。

壁に叩きつけられた直後は膝をついていた不良は、すでに立ち上がってその顔を喜色に歪ませていた。

「オレとここまでやりあえる奴がいたなんてなあ。しかも女！ 大したもんだぜ」

「……それはどうも」

「……これだけ出来るのになぁんで卑怯な手をなんか使つかねえ」

顎に手を当て、ぶつぶつと何事か呟いていた不良が、まあいいやと投げやりに言っただけこちらを向く。

一時的に治まっていた、ざらざらとした強烈な殺気が再び発せられる。

「おう、お前。名前、なんていうんだ？」

「そう言うのはまず自分から名乗るものだと思います」

「お？ あー、そうだな。オレは御堂昌^{みどうあきら}、帝陵で番を張らせてもらってる」

……い、今時、番長とかつてあるんだ。

思わず頬を引きつらせてしまいが、今はそんな余計なことを意識している場合ではない。

「……私は立川茜といいます。『遠坂流』の師範代を務めさせていだいてます」

「遠坂流……？ ああ！ あの街の外れにあるバケモンの巣窟か！」

化け物って……。いや、まあ否定出来ないような人は確かにいるのだけど。

「しかし、こいつは楽しみだ！ ようやくマジで戦える！」

「出来れば戦いたくはないんですけどね……。クイナちゃん、下がってて」

「けど、」

「大丈夫！ 私は負けないから」

出来るだけ笑顔を作ってクイナちゃんを下がらせると、一つ息を吐く。

手加減なしで戦うなんて何時ぶりだろう。

手加減しては命が危ない戦いは何時ぶりだろう。

出来るだけ肺をカラにした後、ゆっくりと空気を吸う。

……覚悟、完了。

「行きます」

私は躊躇うことなくリミッターをカットした。

第十六話 大運動会編 伍・ゴーレムVSバーサーカー（後書き）

「ああー、本格的に出番がない」

ゴロゴロー

「ひまひまひまあゝ！！ 出番をよこせー」

ゴロゴロゴロ

「もうアレだよ、タイトル詐欺だよ？ 私全然出てないじゃん！」

ゴロゴロー

次回『大運動会編 六・ゴーレムVSバーサーカー R2』

…義姉さん、義姉さん。

「なあにー？ 私は今ごろごろするので忙しいの」

…もう次回予告はじまってますよ。

「え、嘘っ！？」

………お楽しみに。

第十七話 大運動会編 六・ゴーレムVSバーサーカー R2（前書き）

訂正祭り

思ったよりも誤字だとか、文章の流れがおかしい部分が多かったです。

大きく話しが変わるというわけではないのですが、更新のはじめの方で読んでくださった方、申し訳ありませんでした。

やはり推敲せずに即出しはいけませんね……。

第十七話 大運動会編 六・ゴーレムVSバーサーカー R2

さあ、動くぞ。

今まで遅々とした動きしか見せなかった『君』の物語が、大きく、とても大きく動く。

君は今までこの事実を認めなかった。

けれど、今日。決して疑いようのない形で、君はこの事実を告げられる。

さて、君はこの真実を得て、どのような選択をするのかな？

半身の姿勢で御堂と名乗った不良の攻撃を捌いていく。

一撃が重く、それでいて速い攻撃だが、回避に全力を注げば避けきれないほどではない。

問題はどう攻撃を当てていくか、だと思う。

幸い利き腕である左腕は問題なく動くが、右手はまだ使えそうにない。

本来、手数で押していくスタイルの私にとって、これは致命的だった。

「クハハ！ さっきまでとは動きが段違いじゃねえか」

間断なく放たれる拳と蹴りの弾幕が、一瞬だけ弛む。

その瞬きの間の隙に私は

後ろに飛び退った。

「それにフェイントにもかからねえ。いいカンしてるわ」

瞬間、唯一私が飛び込んで相手に一撃を与えられた空間を、強烈な蹴りが薙いでいた。

私が決死の覚悟で飛び込んでいたなら、お互いに一発ずつを当てあい、私が倒れていたと思う。相手は典型的なパワーヒッター。肉を切らして骨を断つの理屈は通用しないのは、スピードを乗せた多段蹴りを当ててなお立ちあがってこられたことから明白だった。

「ん、まあそっちのが楽しめるからいいんだけどな」

そう言ってまた突進を敢行してくる。

ぎりぎりでかわせるように身体を動かしてから気付く。

相手の動き、これほど遅かっただろうか？

初見の時よりも目が慣れはじめているから遅く感じるのか、とも考えたが何か違う。

そつ、筋肉の動きがどこかぎこちなく……

「……………っ！」

「気付いたようだが遅せえ！」

僅かにかわせるように身動きみじろをしたのに、直線的な動きである体当たりをかわすことが出来なかった。

咄嗟に後ろに飛んで威力を殺すが　　足りない。

壁に叩きつけられこそしなかったが、息が詰まり、後方に飛ばされて床を転がる。

完全な油断、相手の攻撃をかわせる事を自覚した故に生まれた心の隙だった。

相手が行ったのは、単純に攻撃に緩急をつけただけ。油断していた私は、最初の頃よりかなり抑えられていた攻撃スピードに気付くことが出来ず、急激に速くなった動きに対応できなかった。

左手で地面を強く叩き、その反動で態勢を立て直して起き上がる。

……前、二歩先。

直感だけで前に出された手は、幾十万も繰り返された型を忠実に再現する。

予想通り前方から撃ち込まれた右ストレートを、左手で絡め取るようにして受け流すと、勢いのまま後方に投げとばす。

「……ん、なあ!？」

驚愕の呻きが後方に流れていく。

一瞬、このままクイナちゃんを連れて逃げれば振り切れるのでは、という考えが頭を過ぎるが、即座に却下する。

クイナちゃんを担いで逃走に全力を尽くせば、この場からは逃げられるかもしれないが、そうなれば今相對している不良がどこに向かうかは火を見るよりも明らかだ。

橘さんがあの不良に負けるとは思わないが、他の不良の相手をしてながらどうにかなると思えない。作戦とは違うが、ここで引いてこれ以上橘さんの負担を増やすわけにはいかない。

「どおりやああああ!!」

安全圏まで投げ飛ばしたはずの不良から、雄たけびと何かが破壊される音が聞こえてきた。

弾かれるようにそちらに視線を移動させると、土煙と埃が舞い上がり視界が利かなくなっていた。

おそらく、長い間使用されていなかったせいで埃まみれになった床を粉碎して煙幕として利用したのだろう。

咄嗟のことで少し動揺するが、その動揺を心から追い出すように息を大きく吐き出し　　目をつむった。

母方のじい様から教わった武術、『遠坂流』の極意は”明鏡止水”だ。

私にその遠坂流を教えてくれていたじい様は、昔から私には甘かったが、この武術に関してだけは甘やかしたりはしなかった。生兵法は怪我の基、ということらしい。

如何なる時でも焦りを見せることなく柔軟に相手を捌いてみせるのが、遠坂流の『理想形』だ。

故に、どのような事態に陥っても一つの呼吸で心を落ち着けられるようにするのが、この武術を学ぶ上で最も最初に教わることだ。

そして、次に教わるのは五感の強化。

触覚。

嗅覚。

視覚。

聴覚。

味覚。

全てを鍛え上げ、どれかが機能しない状況でも、代わりの感覚でそれをカバーする。

一見、戦闘に必要ななさそうな味覚まで鍛え上げるのは、吐いた血の味で身体のだこを痛めたのか知るためらしい。

この場合、死んだのは視覚。代替となるのは触覚と聴覚だ。
流れる土煙を限界まで心を落ち着かせて肌で感じる。無限にその
姿を変える煙にも、決まった流れと形がある。

小さい足音を限界まで心を落ち着かせて耳で聞きとる。人が移動
をするには、どのような手段を用いても音がする。

「あ、茜さんっ！！」

クイナちゃんの悲鳴にも似た叫び声。同時に、地面を叩く硬い音
が耳に入り、煙が形を変えたことを肌で感じる。

「死ねやああああ！！！」

構えは既にとっている。

相手の力を、私の全力を乗せて返す。零距离からの加速を瞬時に
成しえる構え。

私のリーチの長さを生かして放たれた掌底は、相手の拳が私に対
してその凶悪な威力を発揮する前に、相手の胸に当たる。

「……があっ！」

今までとは段違いの手応えと短い苦鳴の呻きを残して不良が後方
に吹き飛ぶ。

やり過ぎた……？

そのような考えが頭を過ぎるほどのクリーンヒットだった。

しかし、それでも

「……ま、ただああ！！！」

倒れない。

衝撃でボタンが飛び、学ランの下に巻いていたサラシ越しに胸を押さえながらも、口に笑みを湛えて立っていた。

「最……高だっ！ イツぶりだろうなあ、自分の血い飲んだのは！」

口の端からは血を流しているのに、胸を押さえる手には骨が浮かぶほど力が込められているのに、それでも心底嬉しそうに笑って見せた。

昔、じい様に聞いたことがあるが、この世には肉体を精神が凌駕する人間がいるらしい。

そうだった人間には半端な攻撃は効かない。脳内の一部が完全に麻痺し、痛覚が働いていないからだ。

武術をかじったことがある人ならばわかるかもしれないが、そういった感覚はよく体験することだ。だが、それにも普通は限度がある。

今、あの不良のように、明らかに立つことすら困難なほどのダメージを受けて尚、立ちあがってくるような人間はそうはいない。

そうなった人間への半端な攻撃は自らの首を締めることになる。それを知っているから、私は全身全霊で迎撃する覚悟を決める。

こんなところで倒れるわけにはいかないのだ。

私を待っていてくれる、大切な人がいるから。

「いくぞオラア！！！」
「ハアアアアア！！！」

全力で放たれた拳に、私もまた全力を込めた拳で応戦する。
同射線上に放たれたそれは、轟音を響かせて激突し、離れた後に
また激突する。

連打。

守るために拳を突き出し、攻めるために拳を突き出す。
打ち合って打ち合って打ち合って。

生まれた奇妙な均衡は、次の瞬間に崩れ去った。
射線が違ったのだ。

これで守ることも出来ず、防がれることもない。
あとはどれだけ速く相手にこの拳を当てられるか。

「っだああああ！！！！」
「っらああああ！！！！」

一瞬の交差。

どちらの攻撃が当たったのかを視認する前に、私の身体は勢いよ
く飛んでいた。

横に。

「……………え、クイナちゃん？」

そう。私が吹き飛んだのは、不良に攻撃されたからでも、自分で
攻撃した反動でもなく、クイナちゃんが私に体当たりをしたからだ

った。

「ダメっす！ ダメっすよ、こんなの！ 私なんかのために、茜さんが体を張る必要なんてないんす！」

突然の展開に尻もちをついてぽかんとしている私の上で、クイナちゃんは声を大にして一気に捲し立てはじめた。

「それに茜さんには小川君っていう大切な人がいるんす！ こんな、こんな場所で怪我なんかしちゃ……！」

そこまで言ったところで涙を流しながらクイナちゃんはしゃがみこんでしまった。

本人も驚いたように自分の足を見ていたが、震えで足に力が入らないようだった。

「……………なんで、どうして！ 自分でどうにかしたいのに、どうして私にはこうやって震えることしか出来ないの……………」

クイナちゃんは悔しそうに震える両足を叩き、何度も立ち上がるうとしている。

「いつも誰かに頼って生きるのは嫌なのに！ 私だって誰かを助きたい、力になりたいのに！！ なのに、なんで今、立てないのよ……！！」

何度も足を叩いていた両手を強く握りしめ、自身に憤りながらも恐怖に震えるクイナちゃんを見て、思わず抱きしめてしまった。

……昔、私にも、助けられなかった大切な人がいた。
今ならわかる。きっと、私がどんなに頑張つて、何でも出来るような人間になったとしても、その人は助けられなかっただろう。それでもたまに思い出して泣いてしまうことがある。

だから、クイナちゃんのその気持ちは、痛いほどわかった。

「……く、苦しいっす」

「あ、ごめん！」

力加減をせずに思い切り抱きしめていたクイナちゃんから苦鳴が漏れ出し、私はようやくその腕を離した。

「ひ、酷いつすよ、いきなり……」

「あははは……」

息苦しかったからか頬を赤らめながら上目使いでこちらを睨むクイナちゃんに、笑いかけて誤魔化そうとするが上手くいかなかった。

……おかしいな、真君の時は大抵これで許してくれるのだけど。

「うん、やっぱりクイナちゃんはその口癖がらしいよね」

「……………え？ あ、って、そんなことじゃ誤魔化されないっすよ！」

何となくバツが悪い気分を、冗談を言つて有耶無耶うやむやにすると、埃を払いながら立ちあがった。

「……………お願いっすから、もう怪我はしないでほしいっす」
「うん、わかった」

後ろから聞こえてくる声に、振り向かずに返事だけする。
少しだけ心に余裕が出来た。改めて誰かを守る覚悟も決まった。
今はそれだけで十分だから、私は一步前に出る。

視線の先、私達が殴りあっていた場所から少し離れたところで、
今日日あまり見る事のなくなっていたいわゆる『ヤンキー座り』をし
ている不良がいた。

ぼーっと視線をさまよわせていた様子だったが、前に出てきた私
を見て立ち上がった。

「おう、もういいのか」

「わざわざ、待っててくれるとは思いませんでしたが……」

「動けねえヤツを殴って勝ったって意味ないだろ」

「意外と真面目なんですネ、『不良さん』」

「あん？ オレには昌って名前がある。なんだその不良さんっての
は」

「さあ？ なんだかこっちの方がしつくりくるので」

肩をすくめてそう言っていると、少しだけ笑う。それにつられるように
不良さんもクハハと笑う。

一頻り笑い、それを納めると、申し合わせたようにお互いに一歩、
また一歩と踏み出す。

元よりあまり距離が開いてなかったこともあり、ものの数歩でお
互いを射程圏内に収める。

「……では、いきます！」

「おお、行くぜっ！」

仕切り直しの一戦。

再び、拳を交えようとしたところで

「そこまでだ、馬鹿者ども」

よく通る女性の声が

そしてその女性をおぶる見覚えのある男性の姿が

私達の間飛び込んできた。

「た、橘さん!？」

「げ、伊田ッ!？」

思わず叫びながら拳を止めようとするが（何故か不良さんも私と同じようなりアクションをとって拳を止めようとしていたが）、全力で放たれた攻撃はそう簡単に止められるものではない。

振り切られた拳は私達の間をいた橘さん達に襲い掛かり

……いとも容易く受け止められていた。

…んん、危機一髪といったところでしょうかね。
「どちらかというと既に事後な気もするがな」

僕の弦きに琴音さんがやれやれといった様子で訂正を加えると、やおら辺りを見回しました。それにつられて僕も辺りを見回します。いまやその用途を果たしていない壊れた壁。クモの巣状にクレーターを作っている床。そしてぼろぼろになっている茜さんと、典型的な不良スタイルをしている方。

あー、やっぱり遅かったですかね……？

「……しかし、意外だな」

…何がですか？

不意にそんなことを言い出した琴音さんに、後ろを向きながら尋ねると、琴音さんは僕の二の腕をつまみながら首を傾げました。

「義弟君の背中中は、意外と固いのだな。二の腕はこのように柔らかいのに」

…それって今改めて言うほどのことじゃないですか？

「しかしまあ乗り心地は悪くない。揺れも少ないしな」

琴音さんは感慨深そうに呟く琴音さんにツツコミを入れてみるものの、予定調和の如く無視されました。

頭を振って、いつものことと強引に納得すると、受け止めていた茜さんの手を離してそちらを向きます。

…申し訳ありません、茜さん。少し時間がかかってしまいました。
「……い、いえ！ 構わないんですが！」

一瞬きよとした表情をした茜さんが、盛大に首を振る姿を見て少しだけ笑みが浮かびます。

体力的には限界に近そうですが、大きな怪我はなさそうです。右

手の動きが若干鈍そうですが、それについてはあとで聞きましょう。後々まで残るような傷があつては、真君に会わせる顔がありませんからね。

「……い、伊田。お前、なんでこんなところにいるんだよ」

戦々恐々。そんな心情を濃厚に感じさせる声音で声を掛けてきたのは、あの不良さんでした。

「それはこちらのセリフだ。簡単に担がれおつて」

「……そりゃ、どうということだ？」

今度は心底不思議そうに琴音さんに尋ねる不良さん。喜怒哀楽がわかりやすく表に出るタイプのように、何となく好感の沸きますね。

今更ですが、琴音さんがこの場にいるのは、僕が八割ほど不良の方々を地に沈めたときに、数人の近衛兵の方々と一緒に廃工場に現れたからです。

突然の乱入者に僕が面喰っていると、その近衛兵の方々は手際よく残った不良を掃討していきました。黒装束を纏ったこの方々は、琴音さんが後から呼んだ別動隊らしく、普段は琴音さんを周辺を守ることに徹している少数精鋭の部隊だそうです。

一学生である琴音さんが、どれだけの戦力を有しているのか、少し想像してみても……、やめました。きっとこの世には深く考えてはいけないこともあるのだと思います。

そんな思考の残滓を捨て去り、渋面を作りながら琴音さんに苦言を呈します。

総大将たる琴音さんがこんな戦場の真ただ中に来てはいけない、とまあそんな感じの内容だったのですが、

『人のことが言えるのか？』

という一言とともに軽く一蹴されました。文字通りぐうの音も出ませんでした。

数分後、この場を任せた、と近衛の方々に告げると、琴音さんは何の予告もなくよじよじと僕に背に登る出しました。

…何で僕の背中に登るんですか？

『愚問だな、義弟君。そこに背があるからだろう』

…僕の背は山ですか。それに山みたいに背も高くないですよ。

『ふむ、アレだな。これは未来の義姉とのスキンシップだ』

…僕はもうお腹いっぱいです。危ないですし降りてほしいのですが。

『私はまだ五分程度、圧倒的に足りないな。それに危ないなら義弟君が守ってくればいい』

…いや、ですからね、

何となく意味がないとわかっていた問答を何回か繰り返した後、予想通りといたしますか予定通りといたしますか、琴音さんを降ろすのを諦め、しょうがなくその場をあとにしました。

その道中に、どうやら琴音さんの知り合いがこの抗争に担ぎ出されている可能性があるという話を聞きましたが、どうやら茜さんと戦闘していた人が琴音さんの知り合いだったようです。

ちなみに、お二人の拳を同時に受け止めるなどという荒業的な介入が出来たのは、お二人ともかなり消耗していて全力での攻撃ではなかったのと、二つの拳が限りなく近い威力であったため身体を通して相殺出来たからです。

そうでなければ超スペックを誇る茜さんと、それと真つ向からぶつかっていたスーパースペックな方の全力パンチを受け止めることなど出来るわけもないですしね。

「オレはお前の学校の奴がウチの学校の奴をハメて抵抗できない状況にしたあと、ボコボコにされたって聞いたぞ？」

「前提から間違っているぞ、馬鹿者。お前もいい年の女なのだからその猪突猛進な性格とがらんだこの脳味噌、どうにかしたらどうだ？」

「うるせーよ！ それにオレが女だとかは今関係えねーだろ！」

「普段からの生活も含めて言っているのだ。お前は本当に昔から……」

とうとうとお説教をはじめた琴音さんに、何となく小さくなったように見える不良さん。

このパワーバランスはたぶんだいたい前から形成されていたのだと思えるほど、しっくりときていました。

って、アレ？

「お、女……？」

あまりに自然に振られた話題に、思わずそのまま聞き流してしまっいそうになりましたが、茜さんが数秒遅れでそのワードを復唱しました。

そうです、僕にもそう聞こえました。

しかしです。こればかりはさすがに聞き間違いであるとは思えませんでした。

あの肉食獣のような激烈な殺気。茜さんと張り合えるだけの力や体格。ついでに僕などよりもずっと男らしい言葉使い。

以上のことから、不良さんは当然の如く男性であると思っていたのですが……。

「ああ、そうだ。御堂晶^{みどうあき}は女だぞ。人前では昌^{あや}など男のような名前を名乗ったり、無い胸をさらに押しつぶすようにサラシを巻いたりしているが、歴とした女だ」

琴音さんは何事もないようにその事実を肯定しました。

少し高い声や、セミロングほどの長さの綺麗な髪など、言われてみれば確かに納得なのですが、やはり驚きです。

茜さんもまさか相手が女性だったとは思わなかったのか、口をぽかんと開けたまま固まっていました。

「だからうるせーって！ てか無い胸とかいうんじゃねえ！」

「ふん、お前が貧乳であることはすでに如何ともし難い事実であろう。それに男のように振る舞っておきながら、その実、胸の大きさを気にしているとはおかしな話だ」

「そ、それは、だな……」

とてもとてもご機嫌な様子で不良さん 晶^{あき}さんを言

葉攻めにする琴音さんを、出来るだけ視線の外に置き、少しだけため息を吐いてから、今一番に確認したい人を探すために辺りを見回します。

…クイナさん、無事でしたか！

「……っ！ た、橘さん！」

程なくして見つけた探し人、神津クイナさんに近づきながら声を掛けると、一瞬びくりと体を震わせました。

うつ……、まだ機嫌を直してもらえないのでしょうか。

「……………その傷、もしかして外の戦いでついたっすか？」

…え？ ああ、これですか。そうですね、ただのかすり傷ですからすぐに治ると思いますけど。

クイナさんはおずおずと言った様子で僕の頬を指差しました。
時間の関係上、効率よく敵戦力の殲滅をしなければいけませんのでしたからね。

常に紙一重二重で相手の攻撃をいなさなければならぬ戦いの中で、むしろこれくらい傷で済んで良かったです。

どちらかというところ々破れてしまったジャージの方が問題です。
幸い、大きな穴はないですから、当て布をして何とか、というところでしょうか。

「……………何で、私なんかのためにそんなに頑張れるんすか？」

小さな声で、クイナさんが不意にそんなことを口にしました。

「……………私なんかを助けるために、橘さんも、茜さんも、何でそんなボロボロになれるんすか？」

少しだけ大きくなった声には、どこか自身を攻めるような雰囲気を感じられました。

自分のために誰かが傷つくところは、やはりとても辛いことです。
僕自身、その罪の意識で潰れそうになってしまったこともあります。

けれど、その事実は同時に、ある一つのことを表しているのです。

…それだけ、クイナさんのことが大切なんです。

どのような怪我をしたとしても、どのような境遇に陥るうとも、その人のためなら躊躇なくその一步を踏み出せる。

自分のために誰かが身を挺して守ってくれるということは、それだけその人に大切に思われているということなのです。

「……私が、大切？」

…そうです、とても大切なんです。だから守るんです。

大切だから、失いたくない。

もしかしたら、それはとても自分勝手に、とても傲慢な考えなのかもしれませんが。

けれど、それでも、僕はこの考えを曲げるつもりはありません。

僕は我がままですからね。

ぽすん、と小気味の良い音を立てて、クイナさんの頭が僕の胸の辺りにぶつかりました。

「少しだけ……泣いてもいいですか………？」

…はい。

僕が短い返事を返すと、クイナさんは小さく、本当に小さく嗚咽を上げ始めました。

「ふむ、『先客』がいたか。ならば譲らねばな。聾、こっちに来い。お前にはまだ話がある」

「いつてえ！ 耳を引つ張んなって前から……、って髪もやめろお！」

セミのように引つ付いていた琴音さんが僕の背から降りると、晶さんを連れて建物の外に行つてしまいました。

先程まで固まっていた茜さんも、僕に視線を送った後、一つ頷いてからその後には続きました。

「……う、あ。うあああああッッ！！」

扉の閉まる音が響いたあと、クイナさんの堪えきれなくなった声を上げました。

僕は出来るだけゆっくりと、今にも壊れてしまいそうな小さな背をさすりました。

第十七話 大運動会編 六・ゴーレムVSバーサーカー R2（後書き）

色々な思いが溢れていた。

整理出来ずに散らばった感情の欠片が、しくしくと私の心を痛めつけた。

彼は、私にとっても大切な人だ。

そんな大切な人の前で泣きたくなかったけど……駄目だった。

今だけは、この時だけは。

これが終わったら、きっといつも通りに笑えるから。

だから、

……少しだけ、泣いてもいいよね？

次回『大運動会編 七・後始末』

お楽しみに。

第十八話 大運動会編 七・後始末（前書き）

一、……や、もう何て言いましょうか。しばらく放置みたいな形になってしまい、申し訳ありませんでした。とりあえず作者は生きています。

二、今回より、文章ルールが少しだけ変わります。とはいっても視点変更の際に何らかの印を残すだけなので大した変化はないのですが……。

三、『なろう』の新システムにてんてこ舞いです（でした）。ちゃんと文章が反映されているか、激しく不安です。

四、それでは、長かった大運動会編、最後のお話です。どーぞー。

第十八話 大運動会編 七・後始末

各々の想いは無限に交差して交錯する。

願いが常に叶うとは限らず、叶わないとも限らず。

揺らぎ、彷徨うこの世の中で、常に同一の回答を出せる者などいない。

それが世界の条理であり、真理である。

しかし、その常識を根底から覆す存在が発見された。

それが

……以下、損傷が激しく、解読不可能（著者不明の論文、冒頭より抜粋）

…これは、いったいどういことですか？

僕は、目の前の光景が信じられずにつわ言のように呟き、

…そんな、そんなことがあっていいんですか！？

誰に言うでもなく、それでいて誰かに訴えかけるように
声を張り上げ、

…こんなことが、許されるなんて！

耐えきれずに膝をつきました。

「おお、義弟君にしては非常に新鮮なりアクションだな。義弟君はいつもどこか醒めているからな、このようなアクションは非常に癒される」

隣で腕を組み、したり顔で頷く琴音さんを見て、わなわなと身体を震わせて口を開きました。

…な、何故そんなに余裕が？

「行事ごとにもはや定例と化しているからな。まあそれにしても今回は多いな、さすがに」

そこで琴音さんは顔をあげて生徒会室を見渡します。それにうられて僕も膝をついたままそちらに視線を送ります。

そこには『しろいあくま』がいました。生徒会室いっぱい。

机や床など生徒会室中に所狭しと整列してみせるその様は、さながら統率のとれた軍隊です。

そしてそれらは、兵隊らしく圧倒的な数の暴力でこちらを攻め立てるのです。

「世の条理だな。好き勝手に動けば、その分ツケが重くなる」

琴音さんは生徒会室に軽い足取りで入っていくと、見上げるほどに積み重ねられているしろいあくまこと『書類』（アンケートや陳情書、

学校に提出する報告書など）の数枚引き抜くと、そのうちの一枚を読み始めました。

「……なにに、『会長殿、件の話はどうなりましたか。俺としては明日からでも橘と練習をしたいのですが』か。私としては、コレがどういった話なのか理解できないのだが……わかるか、義弟君？」
「絶対にわかってて聞いてますよね、琴音さん？」
「いやいや全く、さっぱりだ」

こちらを向きながらわざとらしく眉を寄せる琴音さんに、頬を引くつかせながら聞き返すと、これまたわざとらしく肩をすくめて持っていた書類を元の山に戻しました。

「とはいえ、提出書類の類は来週のはじめまでに終わらせればよいだろうから、あまり急ぐ必要もない。明日、明後日くらいは休んでも構わないだろうな」

「そ、そうだったんですか。それは良かったです。」

心底ほっとした僕は、ようやく落ち着きを取り戻し、一時期の妙なテンションを何とか収めることに成功しました。

今日は火曜日ですから、約一週間ほどの猶予があることになりました。それだけあれば何とかこの軍勢を退けることが出来るでしょう。ちなみに、明日は全生徒で体育祭の後片付けをするだけの半日授業なので、少しばかり余裕ができそうです。

「それはそうと、クイナ嬢はどうした？ 姿が見えんが」
「クイナさんなら屋上で通信機器の撤去をしています。せめて最後くらいはちゃんと仕事がしたい、と。」

「ふむ、クイナ嬢も存外に意地っ張りだな。初ものだ」
「……初って何がですか？」

「あまり気にするな。義弟君はそれ以前の問題だから」

呆れといいますか、諦めといいますか、そういった感情が存分にこもっていきそうな顔で琴音さんにそう言われました。

言っている意味も分かりませんし、何よりも馬鹿にされている感じがもの凄くしたので、何事か言い返そうとしたところで、あることに気付きました。

…そういえば、琴音さんは閉会式に出なくていいんですか？

そうなのです。開会式ではアレだけ大暴れした琴音さんですから、閉会式でも何らかのアクションをとるかと思っただけですが……。

「しなければならぬ話は開会式の時に済ませておいた。それにこの時間はそれぞれが余韻を楽しむ時間だ。私が水をさすべきところではない」

…そうです、か。

窓からグラウンドを見渡す琴音さんの後ろ姿は、心なしか寂しそうに見え、それ以上何かを言うのは憚られました。

「私が卒業したら、奏を頼むぞ、義弟君」

幾秒か経ち、琴音さんの口から出たのは、少しだけ意外な内容でした。

…何でまた、そのようなことを？

「……何故だろうな。柄にもなく、少しセンチメンタルになっているのかもしれない」

自嘲するように、苦い笑みを浮かべる琴音さんがこちらを向きま
した。

どこか独白のようにも思える琴音さんの言葉。

常の琴音さんを知っている人ならば、驚かざるをえないほど、そ
の呟きは憂いを帯びていました。

「まあ要約すると、私が卒業した際に奏のストッパー役を頼む、と
いうことだ」

…そう、なんですか？

「ああ、そうなんだ」

冗談っぽくそう言ったきり、こちらに背を向けて黙り込んでしま
った琴音さんに、僕は声をかけることができませんでした。

ちよつとした後片付けと集会が終わり、帰宅の許可が下りたので
教室で帰り支度を済ませていると、ちょうど部活のミーティングが
終わつたらしいタロ君に会いました。

出会い頭、『とりあえず、すまんかった！』といきなり頭を下げ
たタロ君に、意味がわからず首を傾げていると、タロ君はバツの悪
そうな顔をして口を開きました。

何でも、他の奴らは任せとけ！ と格好良く宣言した割に簡単に
波音さんに出し抜かれたことに責任を感じていたらしいです。

もともと、心が読める波音さんを完全に抑えることは不可能に近
いですし、茜さんが来てくれなければもっと厄介なことになってい
た可能性があるわけで、結果的に非常に助かりました。

そんな旨の話をタロ君にすると、見るからに納得できていない、
といったような顔でぶつぶつと何事か呟いていましたが、僕の顔を

見ると大きなため息をつきました。

んん？ 僕、変なことを言いましたかね？

タロ君は頭の上に疑問符を浮かべる僕を見てもう一度大きくため息をつく、そのまま教室の外に向かつて歩き出しました。そんなタロ君の背を追って、僕も慌てて教室をあとにしました。

すでに夕日が差し込みはじめた校舎の中を歩きながら、体育祭の様子などを聞いていると、校門に差し掛かった辺りで不意にタロ君の動きが止まりました。

…あれ、どうしたんです？ 顔色が悪いようですが。

ぴたりと動きを止めたタロ君の顔は、なんと形容すればいいのでしょうか、とても……微妙な顔をしていました。例えるなら、見てはいけないものを見てしまったときの顔でしょうか。

「……ああ、悪い。俺、部室棟に忘れもんしちゃったからとりにつてくる。先に帰ってくれ」

…え、だったらここで待つてますよ？

「いや、いい。というか待たないでくれ」

タロ君はそう言ってそのまま反転すると、急ぎ足で今来た道を戻っていききました。

んん？ 確かそっちからいくと部室棟って遠回りになりませんかでしたっけ？

首を傾げてタロ君の後ろ姿を見ていましたが、待つなど言われたのに待ち続けるのはさすがに悪い気がしたので僕も踵きびすを返して歩き始めようとしたところで

「…待つてた」

「……ま、待つてたっす」

いつの間にか、目の前には大層機嫌の悪そうな波音さんと俯いて
もじもじとしているクイナさんが立っていました。

「…怪我」

「…え、えっ？」

「…怪我をしてる」

妙な迫力^{オーラ}を醸し出している波音さんに気圧されながらも辛うじて
返事をする、波音さんは絆創膏が貼られている僕の顔を指差して
目を細めました。

「…え、あれですか。これはただの切り傷ですから大した問題では

「…頬に切り傷ができるのが問題ないわけない」

「…は、はい。」

「…他に怪我は？」

僕の返事を待たずに腕や脚、果ては首元までチェックをされ、よ
うやく納得したのか、波音さんは一呼吸ついて僕から離れました。
ひんやりとした冷たい手が首や顔に触れるたびに出そうになった
声をかみ殺していたので、かなり涙目になっている僕をどこか満足
そうにしながら波音さんが見ています。先程までのオーラが消えた
のは何よりなのですが、僕が首が弱いのが知られてしまったため、
これからこんな形でいじめられることが多くなりそうで怖いです。

「……あ、あの橘さん！」

今後のことを割と真剣に悩んでいると、それまで黙っていたクイナさんが意を決したように口を開きました。

…はい、何ですか？

「えと、あの、その……今日はっすね……………」

口を開いたはいが言葉の続きが出ないといった様子のクイナさんの様子に、首を傾げながら次の言葉を待ちますが、なかなかいい言葉が見つからないようです。

快活に物事を話す常のクイナさんらしくらぬその様子を見て、少し不安になっていると、その隣にいる波音さんがじれったげに横槍を入れました。

「…何も言えないのならこの時点で脱落」

「わ、わかってるっすよ!」

クイナさんが慌てた様子でそれに応じると、今度こそとこちらに向き直りました。

何とありますが、そんなに睨まれると怖いんですが……。

「今日は助けてくれてありがとうっす! ……凄く……恰好良かったっす……………」

…え、は、はい。それはどうも……。

「そ、それじゃあ私は用事があるんで帰るっす!」

尻つぼみになりながらも、とりあえずは聞こえてきた意外な内容に呆けた返事を返す僕に、クイナさんは早口で捲し立てるとそのまま学校の外に走っていつてしまいました。

一体、何だっただんでしょうか……………？

「…逃げた。まあギリギリライバル認定」

呆然とその背を見送る僕に、ぽつりと呟いた波音さんの一言を理解することができませんでした。

とりあえず立ち直った僕は、ごねる波音さんを電車に乗せ、帰路につきました。

さっきの一言について波音さんに聞いてみましたが、乙女の秘密だ、と軽くあしらわれてしまいました。不可解です。

まあ……、とにもかくにも非常に濃い一日が終わりを告げました。これで今日の晩御飯の当番が僕であつたら泣き言の一つ二つ漏らしていたかもしれません、今日は義姉さんの当番です。今日は腕によりをかけると言っていたのでとても楽しみです。

まだ夜の七時にもなっていないのに夜の帳とばりが降りはじめていることに、秋の深まりを感じながら河川敷を歩いていくと、向こう側から人影がこちらに向かってくるのが見えました。

「んん、もしかしてヒロー？」

暗いうえに距離もあつたので近所の誰かが散歩でもしているのだと思っていたのですが、非常に聞き覚えのある声が聞こえ、その人影が誰かはつきりしました。

…義姉さん！

「あ、やっぱりヒロだった」

その人影　義姉さんに声をかけると、義姉さんは履いているサンダルをぺたぺたさせながらこちらに走ってきました。

義姉さんが履いているサンダルは一応フリーサイズなわけなのですが、僕が買ってきた男性用のためかなりブカブカのようです。歩くのには問題はないものの、走るのはさすがに辛いようで、始めて自転車に乗った子供のようなよたよたとした状態でこちらに走ってきて

「うわっ！」

やっぱり転びました。

何となくこういう結末が予想できたので、あらかじめ駆け寄って倒れてきた義姉さんを受け止めます。

「……あはは、やっぱり慣れない靴で出るもんじゃないね」

…当たり前です。自分用のサンダルがあるんですからちゃんとそっちを履いてください。

「それは言いつこなしだよワトスン君！」

顔を上げ、いたずらっぽく笑う義姉さんに注意すると、いつものように笑って聞き流されてしまいました。

ため息をついて義姉さんを立たせて手を放しましたが、義姉さんが僕に抱きついた格好のまま離れようとしませんでした。

もう一つため息をつき、義姉さんに声をかけようとしたところで、先に義姉さんが口を開きました。

「……ヒロの匂いがする」

胸に顔を埋めながらそんなことを言われ、思わず顔が赤くなった

のが自分でもわかります。

今が暗いことに、内心もの凄く感謝しつつ、せめて声だけでも冷静を保とうと意識しながら義姉さんに声をかけます。

…今日はさすがに汗臭いと思うのですが。

「それも含めてヒロの匂い。今も、昔も変わらないヒロの匂いだよ」

一際、ギュツと抱きしめられてからようやく解放された僕は、どうしようもなく混乱している頭をどうにかして鎮めようと奮闘して

「あれ？ どうしたの、その顔？」

撃沈しました。

何かいい言い訳はないものかと半ば恐慌状態の頭で色々考えていたわけなのですが、

「またケガしたの？」

続く義姉さんの一言で、僕の勘違いだったことがわかりました。

…ええ、ちょっとした切り傷です。

「やっぱり、誰かを守るために？」

僕から数歩離れたところで、こちらに背を向けたまま義姉さんが問いかけてきました。

…まあ、そうですね。

「そっか……。そっだよな、うん」

義姉さんは何かに納得したように小さく頷くと、くるりとこちらに向き直りました。

「ヒロはやっぱり、みんなを守る『ヒーロー』なんだね」

そう言って笑う義姉さんの姿は、どこか小さい頃の義姉さんに重なります。

何といたしますか、そんなことを臆面もなく言われるとさすがに恥ずかしいです。

…そんな大層なものに僕はなれませんよ。

「あはは、そうやって言うのもヒロらしいね」

うんうんとしきりに頷く義姉さんは手を伸ばして僕の手を握ると、くるりと踵きびすを返しました。

「じゃ、帰ろ。もうご飯はできてるよー」

…まあ、そうしましょうか。ところで、今日のおかずは何ですか？
「ふふーん。何が出るかは帰ってからの楽しみ〜。ヒントは鶏肉だ！」

得意気に鼻歌を歌いながら歩く義姉さんの横に、小走りで並びます。

ふと空を見上げると、半分欠けた月が静かに辺りを照らしていました。

第十八話 大運動会編 七・後始末（後書き）

…ああ、義姉さん。確認するのをすっかり忘れていましたが、明日はちゃんと空けてくれますか？

「へ？ 明日？」

…そうですね、明日です。先週、お話しましたよね？

「え……。ああ！ うんうん、話したね！ 覚えてるよ、ちゃんと！」

…ま、まさか義姉さん。

「何、そのすごく残念そうな顔！？ ちゃんと覚えてたからね！ 別に偶然ヒマだったわけじゃないからね！」

…いえ、まあいいんですけどね。

「待つて！ そんな泣きそうな顔されると罪悪感で押し潰れそうになるんだけどっ！？」

次回『義弟奮闘記』

…お楽しみに。

「覇氣がない！ 覇氣がないよヒロー！」

第十九話 義弟奮闘記

「肩凝ったわ。早く揉んで。あなたの馬鹿力で本気で揉むんじゃないわよ」

「……………」

「喉が渴いたわ。コーヒーを持ってきなさい。ちなみにインスタントはダメよ」

「……………」

「お風呂に入りたいわ。四十一度ジャストにお湯を張って頂戴」

「……………なあ、もういい加減」

「何？ 遅刻したら何でも言うこと聞くって言ったのは嘘なわけ？」

「……………いや、そういうわけじゃ」

「漫画が読みたいわ。全四十巻くらいののを、丸々新品で」

「……………」

体育祭は元々他の行事よりも用意するものが少ない、ってこともあつて後片付け自体は結構早く終わった。

……………けれど今、私は生徒会室の机に力なく突っ伏していた。

「ふむ、その様子だと義弟君に大分絞られたようだな」

机に身をゆだねてへたる私を見て、同じく生徒会室にいたお姉えが口を開いた。その口調は、どこまでも愉しげだった。

さっきのお姉えの言葉でわかんと思うのだけど、私はつい先程までヒロくんにお説教をもらっていた。

理由は、私がクイナちゃんを焚きつけたのがバレたからで、久し振りにびつくりするほど長時間の正座をさせられた。

ヒロくんの巧妙なところは、こちらの罪悪感をチクチク刺激しながらお説教をするところで（すごく残念そうな顔と声で話しをする）、あんな泣きそうな顔をされると、こちらとしてもいつものように聞き流すことができずに、真面目に話を聞かざるをえない。で、結果的に今こうしてボロボロになっているわけ。

それにしても、だ。

「なあってバレたかなあ……」

そう、何故私がクイナちゃんを焚きつけたことがバレたのだろうか？

自分でこういうのも何なのだが、私はイタズラに関しては手抜きもしないし手抜きもない。気付いてもらってなんぼのイタズラならばまだしも、今回の件はクイナちゃんの気持ちを考えても当然バレちゃいけない内容だった。

そこら辺を考慮して、皆が聞いていないことを確認してからクイナちゃんと話をしたのに、おかしいことにヒロくんには私がクイナちゃんを焚きつけたことがバレてしまったのだ。

私がそんな話をしていたの知っているのは、当人である私たちくらいなもので……

「えあ！」

思わず、変な声が出た。

けれど、そんなことが気にならないくらいに驚くべき事実には気が付いてしまったのだ。

「まさか……！」

わなわなと体を震わせて首を横に向ける。

その視線の先 お姉えがいる方向を向くと、さっきよりも格段に愉しそうに笑っているお姉えと目が合った。

……そう。私とクイナちゃんの会話を唯一聞いている可能性があるが、尚且つそれをヒロくんにバラしそうな人物。そんな人、私は一人しか知らない。

「お姉え！ バラしたのお姉えでしょ！？」

「ふふふ、気付くまで随分と時間が掛かったな。平和ボケしているのではないか、奏」

声を張り上げて糾弾する私を、軽くあしらうお姉えの顔は、いつも以上に生氣に満ち満ちていた。

「っていうか！ それだけならまだしも、静ちゃんの話まで私のせいにしたでしょ！ アレってお姉えが言い始めたことなのに！」

「はて、そうだったかな？ 全く以て記憶にないな」

ふふふ、ととぼける気がないとは思えない様子で笑うお姉えに、精一杯恨みを詰めた視線をぶつけてみるものの、やはり軽く受け流されてしまう。

ちなみに、本当に私のせいじゃないのに、お説教の際にヒロくんは信じてくれなかった。まあ私が悪戯心に負けてヒロくんの前でそ

の話を始めちゃったのがいけなかったんだけど……。

「まあ、いいではないか。年をとることに人から叱られる機会は少なくなる。そういった経験を得るのも悪いことではないだろう」

「イヤだよ、あんな疲れるお説教！　っていつかそれならお姉えが怒られればいいじゃん！」

「私は勘弁願おう。義弟君の困った顔を見るのは好きだが、怒った顔を見るのは嫌だからな」

「私だってイヤだよ！」

もう何を言っても無駄。

柳に風、暖簾に腕押し的な問答を何度か繰り返し、私は諦めて再び机に倒れ込んだ。

そんな私の様子を、紅茶を飲みながら満足そうに眺めるお姉えの視線を感じる。

……相変わらずだな、と思う。

いつもいつも、無関心を装いながら、その実、私のことを心配してくれている。

『奏を頼むぞ、義弟君』

音声データの整理をしているとき、偶然に聞いてしまったお姉えの一言。結局、誤魔化すようにして終わった会話の一片だけど、お姉えの気持ちを汲むには十分だった。

まあ、何とというか、腹が立たないわけでもなかった。

自分の預かり知らないところで、勝手に心配されて、勝手に守ら

れて……。今回のお説教だって、今後の私の行動を心配して仕組んだことだと思う。

そのことに対して、怒りを覚えないほど私は幼くはない。だけど、自分の弱さを認められないほど、年齢としもとつてもいない。

弱いから守られて、強いから守つて。悔しいけれど、人はその摂理の上で生きている。

だったら、弱い今は、精一杯守られてみることにする。

いつか他の誰かを、お姉えを、守れるくらいに強くなるために。

「……ありがとう」

今は一言、感謝の気持ちを口に出すだけにした。

「ん？ 何か言ったか、奏？」

「ん、なんでもなーい」

……照れくさいから、小さな声でだけどね。

時間はお昼を少し過ぎた頃でしょうか。僕は入学してから一度も足を踏み入れたことのなかった剣道場にいました。

ついでに言いますと、この場にいるのは僕ともう一人だけで、そのもう一人の方は見るからに嬉しそうにしながら剣道着などの用具

を用意しています。

その後ろ姿を見て、しかめっ面をしながら深くため息をつきました。

「どうした橘。せっかくお前を剣道場に引き込んだというのに随分と浮かない顔をしているな」

「そんなことはないですよ。きつと気のせいです。」

「そうか？ まあそれならいいがなあ」

いつもはキリつとした表情を浮かべているこのお方 静留
さんはそう言うと、鼻歌を歌いながら再び用意を始めました。

今まで、のらりくらりと誤魔化す形で静留さんの勧誘の魔の手を避けてきた僕がこの場に居るのは、奏さんがしてしまったあの約束を守るためでした。

当初は知らぬ存ぜぬを通すつもりだったのですが、よくよく考えてみると風紀委員のエース格たる静留さんとの約束を反故にしてへそを曲げられてしまった場合、このあとに続く文化祭では、警備の負担がさらに増大してしまうのは、火を見るよりも明らかでした。そうなれば、体育祭のときのような問題が起こった際に、即座に行動が起こせなくなりそうです。

そこまで思い至った僕のとれる行動は、正直これしかなかったのです。

「用事がありますから、きっかり二時間だけですよ？」

「ああ、わかってるわかってる。何度も言わなくてもちゃんとわかっているさ」

こちらから条件を提示することで、一カ月好きにしてい、という条件をやむやにする。

それが僕がとった作戦でした。

結果的に、この作戦は成功したわけなのですが、剣道部が休みだったにも関わらず顧問の先生を口説き落としてカギを借りたり、率先して用意を進めたりする静留さんの姿を見ると、そこはかとなく湧いてくる罪悪感に胸が痛みます。

とはいえ、僕にも用事があるのですから仕方ありません。

ですから、そのお返しとして

…ああ、静留さん。竹刀とか防具は使わないのでいりませんよ。

「……何だと？」

全力で静留さんのお相手をすることにしました。

「……なるほどな。これは思っていたよりも本格的だ」

罅迫り合いの状態から数歩分飛び退いて距離をとって脱出した静留さんが、目を丸くして呟きました。

「こんな軽装で、こんな『物』を振るうことに、何の意味があるのかかと思っていたが……」

そう言って、静留さんは自分の手元に目を落しました。

僕と静留さんは、一般的に剣道で使われる防具などを一切身につ

けていませんでした。着ているものといえば、割合軽い素材でできている剣道着くらいのものです。

そして手に持っているのは、ただ新聞紙を丸めてセロハンテープで止めた『刀のようなもの』です。子供の頃に同じようなものを作って遊んだことがあります。それよりも枚数を多く使って簡単には折れないようにしています。

そのような、おおよそ練習するには不向きそうな格好で、子供の遊びのようなものを作りはじめた僕を見て、静留さんは最初こそ猛烈に怒りましたが、僕と軽く打ち合ったところで目の色を変えませんでした。

防具とは、斬られた時の保険です。硬度が高ければ高いほど、命が保障されますが、心には『油断』が生まれます。

武器とは、その防具を貫くものです。鋭ければ鋭いほど、相手を容易に止めることができますが、心には『慢心』が生まれます。

持っている得物が殺傷能力のないとはいえ長いリーチを持つ竹刀、纏っているのが本物の死合いにはおおよそ不向きなほどにガチガチに固められた防具。

相手も同条件であることを差し引いても、どうしても『隙』が生まれてしまうのです。

そういった精神的優位の要因をなくした戦いは、通常の練習よりもずつと緊張感を保てるのです。

それに、剣術は触り程度ですが学んだことはあるものの、それは剣道のように明確な型を持たないものです。ですから、本気で静留さんのお相手するには剣道という土俵の上では少々難しいのです。

「……やはり面白い」

ポツリとそう呟いた静留さんは、今までとつていた、いわゆる『剣道』の型を解きました。

「少し染まりすぎていた。もう一皮剥けるには、どこかで逸脱しなければならぬな」

そして次にとつたのは、刀を逆手に持ち、軽くステップを踏む、見たことのない型でした。

…見たことがない構えですね。我流ですか？

「我流というほど大したものじゃない。構想はしていたが、部活のメンバーには使う機会がなかった。……………危ないからな」

静留さんは首を左右へ曲げポキポキと骨を鳴らしたあと、心の底から嬉しそうに笑いました。

「だが、せっかくのチャンスだ。色々と試させてもらうぞ、橘」

一瞬の間の後、静留さんは大きな踏みこみ音とともに、こちらに突進してきました。

今、僕は学校から一駅離れたところにある、誰もいないアパートの一室にいます。

至るところに着替えやゴミが散らばっている、生活感あふれる部屋を踏破してタンスに辿り着くと、そこからバスタオルと着替えを拝借します。

『たまの外出だろ？ なら、恥ずかしくない格好しなくちゃな』

電話をしたときに、何故か僕よりも張り切ってそう言った竜也さんが見繕ってくれたものです。

…や、下着くらいは自分で持ってきてますからね、竜也さん。

たぶん、ジョークで置いていったと思われるヒョウ柄パンツに苦笑しながら、その他の着替えをまとめてバスルームへと向かいました。

勘のいい方ならばすでに気付いているかもしれませんが、このアパートの一室は竜也さんの部屋です。

義姉さんとはある場所で待ち合わせをしているため、できれば家では会いたくない。そう考えた僕は竜也さんに連絡をとり、着替えをさせてくれないかと打診したのです。

二つ返事で了解を貰った僕は、竜也さんのついでに風呂に入っていけ、という言葉に甘えさせてもらい、着替えついでにシャワーを浴びているのです。静留さんとの練習が予想以上にヒートアップしたので、結構汗をかいてしまいましたしね。

それにしても、着替えにお風呂と毎度のことながら竜也さんにはかなりお世話になっています。今度会ったときには何かお礼をしなければなりませんね。

そんなことを考えながら軽くシャワーを浴びて汗を流すと、竜也さんが選んだ服に袖を通します。

…全体的に黒が多いのは竜也さんの趣味なんですかね。

「そつだよ。悪いか？」

…いえ、悪いというわけではないのですが、あまり着なれていない

もので……つて、ええ？

誰もいないはずの空間から返ってきた言葉に、思わず妙な声を上げながらそちらを向くと、そこにはスーツのネクタイを解いて椅子にくつろいだ姿の竜也さんがいました。

… 竜也さん、確かまだ仕事だったのでは？

「ああ、その予定だったんだけどな。同僚があんまりにウザいから全部なすりつけて帰ってきた」

竜也さんはしれっとそう答えると、開きっぱなしで置いてあったスナック菓子をつまみました。

… ダメですよ、竜也さん。お仕事の仲間は大切にしなきゃ。

「わかってるよ。…… ったく、坊のそういうところは本当に親父さんに似てるな」

苦笑いを浮かべて頭をかく竜也さんを見て、僕もまた笑みを浮かべます。

「で、坊。買うものはもう買っているのか？」

不意に竜也さんがそんなことを言いました。

竜也さんらしい端折った言葉ですが、思い当たる節がある僕には竜也さんが何を言いたいのかすぐにわかりました。

… ああ、はい。もう買ってありますよ。

「そうかそうか。じゃあ、それ持ってさっさと嬢のところに行つてやれ」

… え？ ですが待ち合わせの時間までまだ時間がありますよ？

竜也さんの言葉に、テレビの上に置いてある時計に目を向けます。義姉さんとの待ち合わせが五時。今が三時を少し回ったところですよ。

竜也さんの家から待ち合わせの場所まで一時間も掛かりませんか、今、家を出てしまつと一時間以上も早く待ち合わせの場所に着いてしまいます。

それではさすがに早すぎる気がしないでもないのですが……。

「まったく、坊はなっちゃいないな。男つてのは『デート』の場所には一時間以上前に行かなきゃいけないもんだぞ」

…え、そうなんですか？

「ああ、そうだ。何故なら待ち合わせに遅れると女つてのはいつまでもそのことネタに文句を垂れるからだ」

…それも実体験ですか？

「まあ……肯定だな」

竜也さんにしては珍しく、微妙な顔をして歯切れ悪くそう答えました。

何となく、いつかの会話の再現のようになっている気がしないでもありませんが、これ以上突っ込むと竜也さんの顔がさらに歪むことは間違いなさそうなので、とりあえずスルーしておくことにします。

僕がスルーするのを察したのか、竜也さんは何とか引きつった顔を元に戻し、再び口を開きました。

「それに嬢の性格だ。お前との約束なら一時間前に待っててもおかしくないぞ」

…それは、ありえますね。

今日は、偶然にも義姉さんの学校も休日に登校した振り替えとして、半日授業だそうです。

昨日の夜に、義姉さんには目一杯釘を刺しておきましたから、忘れていたことはないはずです。

案外と時間につきりとしている義姉さんのことですから、もしかしたらかなり前から待っているかもしれません。

「ホレ、これで間違いないか？」

竜也さんは、僕のカバンのチャックを開けて中からラッピングされた箱を取り出して僕に見せました。逆の方の手には、僕の財布も持っています。

僕が頷いて返事をする、竜也さんはタンスの中をこそごとさり始めそこからカバンを引っ張り出してきました。

「……その服に合いそうなのはこのカバンくらいか。よし、これに入れて持っけ」

そう言って竜也さんは満足そうに笑うと、僕にそのカバンを渡しました。

「え、あ、ありがとうございます。まさかカバンまで貸していただくことになるとは」

「構わねーよ。ほら、もう行ってこい。荷物と服は家に届けてやるから」

「や、それはさすがに」

「いいから行け。若いうちは遠慮するもんじゃねえよ」

ぐいぐいと背中を押され、早足になりながら口を開きますが、そのことごとくが一蹴されます。

むむ、竜也さんは何を急いでるんですかね。お礼くらい言わせてくれてもいいと思うのですが……。

そうこうしている間に、玄関まで押されてしまい、しぶしぶ靴を履きます。ちなみに、靴も真新しいものがすでに用意されていました。

何と言いますが、ここまで用意されていますと、これ以上何かを言うのは失礼な気がします。なので、僕も急かされるままにドアを開きました。

「じゃあ行つてこい」

…色々、ありがとうございました。このお礼はまた今度に。

「おう、飯でも作ってくれ」

僕は深く一礼して部屋を出ると、そのまま振り返らずに目的地に向かいました。

…義姉さん！

目的地に着いたのは、待ち合わせ時間のきっかり一時間前でした。そこには、竜也さんの読み通りすでに義姉さんが待っていました。僕の呼んだ声を聞こえたのか、噴水脇のベンチに座っていた義姉さんが立ちあがってこちらに向かって歩み寄ってきました。

「ヒーロー、早かったね！」

…義姉さんこそ、随分と早かったですね。

「家にいてもやることなくって。ちょっと早く出てきちゃったよ」

苦笑いを浮かべる義姉さんは、僕の服を見て少し驚いた様子を見せます。

「あれ？ ヒロってそんな服持ってたっけ？」

…いえ、竜也さんに借りつけました。少くらは恰好つけたかったので。

義姉さんは、僕の服が見慣れないものであることに、目ざとく気付きました。やはり、洗濯などを交代交代でやっていますから、そういうったことに敏感なようです。

当然、僕も義姉さんの服が普段から着ているものでないことに気付いています。

…義姉さんの服も、いつもと違いますね。

「うん。滅多にないヒロからの『でいと』のお誘いだからね。気合い入れちゃった」

見せびらかすようにくるりと一回りすると、黒のプリーツスカートもその後を追うようにして回ります。

「ねえねえ。今日ってやっぱりここに入るの？」

回った勢いもそのままに、義姉さんは後ろを指差すと僕にそう聞きました。

義姉さんが指差した先 都内でつい最近できた遊園地を見て、僕は頷きながら返事をします。

…はい。今日はここに行く予定です。

「へえスゴイね！」

キラキラとした表情ではしゃぐ義姉さんの様子を見て、自然と笑みが浮かびます。

ですが、義姉さんは何かに気付いたような顔をして首を傾げました。

「そういえば、まだこの遊園地ってプレオープン中じゃなかったっけ？」

「そこは抜かりありません。専用のチケットはすでに入手済みですよ。」

少し不安そうな顔をする義姉さんに、ふっふっふつと笑いかけながら、お財布からチケットを二枚取り出します。そのチケットにはしっかりとプレオープン入場券と刻んであります。

何を隠そう、これをくれたのは美佳さんなのです。何でもこの前、料理を教えてくれたことへのお礼だそうで、ぜひ受け取ってほしいと渡されたものでした。

僕が教えたことといえば、基礎とちよつとした応用程度のものなのですが、それでも十分に満足していただけたようで、美佳さんは大変嬉しそうに僕の手へ（半ば強引に）渡してきたのです。

なんだか、気を遣わせてしまったようで申し訳ない気持ちなるのですが、こうやって義姉さんのはしゃいでいる姿を見られたのは何よりも喜ばしいことです。

「よし、じゃあ善は急げだ！ さっそく中に入ろう！」

「あ、義姉さん。ちよつと待ってください。」

居ても立ってもいられなくなったのか、僕の手を引っぱってゲートに向かおうとする義姉さんを止めると、少しだけ息を吸いました。

…おめでとぅございます。

「へ？」

何を言いたいのかわからないといった様子できょんとしている義姉さんに思わず苦笑したあと、今度はもつとわかりやすく言うことにしました。

…お誕生日おめでとぅございます、義姉さん。

そうです。今日、九月二十日は義姉さんの誕生日なのです。

ですから、今日は盛大に義姉さんのお祝いをするのです！

「……………えっと、そうだったっけ？」

当の本人は忘れてしまっていたようですが……………。

第十九話 義弟奮闘記（後書き）

胸クソが悪かった。

煙草を吸ってもどうにも落ち着かないこの気分を、空を見上げてどうにか落ちつけようとしたものの、やはりというか何と云うか、一向に収まる気配を見えなかった。

「……？」

ぽとりと煙草が足元に落ちる。どうやら、煙草を噛み切っていたらしい。

口の中に残っていたフィルターを吐き出し、落ちた煙草と一緒に灰皿に放り込む。

「……頼んだぞ」

頭をかきながら誰にともなくそう呟いて、俺はまた空を見上げた。

次回『wonderful days』

お楽しみに。

第二十話 wonderful days（前書き）

お久し振りです、と、申し訳ありません。

結構長い間放置してしまいましたが、復活します。

相変わらずの不定期更新ですが、よろしくお願いします。

それと、二万アクセス超えました（随分と前ですが）。本当にありがとうございます。何か要望がございましたらリクエストしてくださいませ。ある程度の無茶ぶりには答えられるかと思っています。

第二十話 wonderful days

誰一人傷つけないで生きることの難しさは、誰よりも知っているつもりでした。

生きることとは戦いで、生きているだけでどれだけ多くの人を傷つけることになるのか、誰よりも知っているつもりでした。

それでも、それを知っていてもなお。この温かい日常のなかで生きたいと思ってしまうことは、罪なのだろうか。

それでも、それを知っていてもなお。アナタと共にいたいと願うことは、罪なのだろうか。

答えなど、わかりきっていました。

だから私は、の練習をします。

……きっと、うまく言葉に出来ないでしょうから。

「あはは、オバケ怖かったねー」

…義姉さん、そういうことは笑いながら言っても説得力ないですよ？

大方の予想通り、凄まじい勢いで各アトラクションをまわる義姉さんにたじたじになりながらも、僕もまた趣向を凝らした様々なア

トラクションに目を奪われていました。

僕も義姉さんも、遊園地に来たのは、実に十年ぶりのことです。当時僕たちのお世話をしてくれていた孤児院の先生が、競馬でとんでもない大穴を当てたとかで、子供たちを全員を遊園地に連れていってくれたのです。

大きな門があつて、キレイなお城があつて、とてつもなく速い乗り物があつて。

そこは当時の僕にとって想像できないほど煌びやかな世界で、少し怖かった反面、とても興味の惹かれる場所でした。

それから、まあそう都合よくギャンブルが成功するはずもなく、孤児院にいる間は遊園地に行く機会はありませんでした。

義父さんと義母さんに引き取られてからも、一度だけいく機会がありました。当日になって大雨が降ってしまい残念ながら中止になってしまいました。ですから、今日は七年越しの念願が叶った形となるわけで、僕もどうしても心が踊ってしまうのです。

「何ていうかさー、こういうところのポップコーンってちょっと量が多いよね」

…映画館とかも一人で食べるには多すぎますもんね。

プレオープンチケットの特典として、こういった軽食類が無料でいただけることだったので、義姉さんが喜び勇んでキャラメル味のポップコーンを貰いにいったわけなのですが、歩きながら半ばまで食べ進めたところで飽きがきてしまったようです。

「……んー」

渋い顔をしながら目を細める義姉さんに苦笑していると、不意に義姉さんが指でつまんだポップコーンをこちらにさしだしました。

「ほら、アーンして、アーン」

意味がわからないという顔をしている僕に、義姉さんが痺れをきらしたのかつまんだポップコーンを目の前でぶんぶんさせ始めたのを見て、思わずため息をつきます。

…義姉さん、さすがに人前でそんな恥ずかしいことはできませんよ。

プレオープン中ということで、他のお客さんは少ないものの、一応ここは公共の場です。ですから、当然ながらそのような行為は恥ずかしくてできるわけがないのです。

ですが、義姉さんは僕のその言葉に、我が意を得たりといわんばかりにニヤリと笑みを浮かべました。

「ふーん。だったら人前じゃなければヒロは食べてくれるんだ？」

…や、そういうわけではなく、てっ！？

「ふっふっふっ、隙ありだよ」

どうにかこうにか説明を試みようとしたところで、義姉さんに新たにつまんだポップコーン数粒を正確無比に僕の口に放り込まれました。

突然のことに思わずむせながら、涙目のまま義姉さんの方を向くと、そこには大層楽しそうに笑う義姉さんがいました。

文句の一つでも言うつもりだったのですが、その義姉さんの笑顔があまりに眩しくて、出掛かっていた言葉を思わず飲み込んでしまします。

「どう？ おいしかった？」

呆けて言葉を失ってしまった僕に問い掛けながら、義姉さんはポップコーンを一粒とって自分の口の中にも入れました。

…まあ、美味しかったです。

何か納得のいかない気分、自然、慚然とした表情になります。そんな僕の表情に気付いるのかいないのか、義姉さんは僕の頭を撫でて満足そうに笑いました。

「じゃあ行こっか。せつかく来たんだからもつといろんなところ回らないと！」

義姉さんはそう言う、ぐいっと僕の手を引いて再び歩き出しました。

「うつわあゝ！ ここだけスゴい混みようだね」

…本当に凄いですね。ちよつと読み違えてしまいました。

人、人、人。

今、僕たちがいるメインストリートはどこを見渡しても人ばかりという、今までの割合静かだった園内からは想像できない光景となっています。

義姉さんも僕も、そのあまりの人の多さに呆気にとられてしまいました。

今から、この場所で遊園地の目玉イベントであるパレードが始ま

るということだったのでアトラクション巡りを一段落させて来てみたのですが、まさかここまで人が集まっているとは思いませんでした。

…もっと早く来て、場所とりをしておかなければいけなかったですね。

「まあまあ、気にしない気にしない。遠くから見た方が落ちついて楽しめるよ」

義姉さんはそう言うと、周囲をきよろきよろと見回してから、再び僕の手を引いて歩き出しました。

どこに行こうとしているのか、さっぱり見当がつかない僕はされるがままに義姉さんについていきましたが、歩いていく先にあるアトラクションを見てようやく合点がつかしました。

…なるほど。確かにここなら落ち着いて見れるかもしれませんね。

「そうそう。空きはじめてアトラクションに乗りながら、かつパレードがイチボウできるこの場所！ まさに穴場なのだよ！」

…誰に熱弁してるんですか、義姉さん。

腕を組んでしたり顔で頷く義姉さんに苦笑しながら、そのアトラクション 『観覧車』 の窓から盛大に行われているパレードを見やりました。

義姉さんの言うとおり、人混みにもみくちゃにされる必要がなくパレードを見渡すことができるこの場所は、確かに穴場と言って相違ない場所です。音が聞こえないというのは少し残念ですが、それはそれで趣があるようにも感じられるから不思議です。

暗闇を切り裂く色鮮やかなライト。

様々なパフォーマン스로場を湧かせる道化師。

大型車の上で観客に対して大きく手を振るマスコットキャラたち。そしてそれらに答えるようにして観客たちが振るたくさんのコンサートライト。

しばらくの間、遠くに広がるその無音の世界に僕は見惚れていました。

「今日はありがとね、ヒロ」

どれくらい時間が経ったでしょうか。不意に義姉さんが口を開きました。

それに応えようと窓に向けていた視線を正面に座る義姉さんに向けたところで、僕は思わず固まってしまいました。

義姉さんが、泣いているのです。

呆けたように開きっぱなしだった口を何度か開閉させながら、何とか言葉を繋ごうとするのですが、未だショックから立ち直れていない頭では上手く言葉を選べません。

…何故、泣いているんですか？

ですから、こんな気の利かないストレートな物言いしかできませんでした。

「え？ あれれ？」

思わず顔を歪める僕に、義姉さんは首を傾げてから自分の頬を伝う涙にようやく気付いたのか、驚きの声をあげました。

「……あはは、あんまり嬉しくて思わず泣いちゃった」

お互いが言葉を探している一瞬の間の後、義姉さんが苦笑いを浮かべながら口を開きました。

「嬉しすぎて、幸せすぎて。少し落ちついたらグツときちゃった」

義姉さんは頬を伝う涙をゴシゴシと拭くと、改めて『ありがとね』と僕に言つて窓の外の風景に視線を移しました。

ズキン

そんな義姉さんの姿を見ると、不意に鋭い痛みが走り、言い知れぬ焦燥感がカラダを蝕みはじめました。

何故、このような感情が湧いてきたのか。心が粉々になるようなこの痛みは何なのか。嬉し泣きだと言った義姉さんの姿が、どうして今にも消えてしまいそうなほど儚く見えるのか。

言い様のない不安と焦燥感は意識すればするほど加速していき、それに背を押されるようにして思わず義姉さんの手を強く掴みます。そんな僕の突拍子のない行動にも、義姉さんは柔らかく微笑んで見せました。

「大丈夫だよ。ヒロが私に約束してくれたのと同じように、私もヒ

口をまもるから。もう絶対にヒロに辛い思いをさせたりしないから」

義姉さんはそう言って、空いていた方の手で僕の頭を抱き寄せました。

「大切な。言葉だけじゃどれだけ積み重ねても足りないくらい大切なこの毎日。私が守るから」

温かくて柔らかな感触と、少しだけ強まる義姉さんの指の力。

呆とした頭の中、思考が上手く纏められないことを疑問に思いながらも、心地の良い感覚にそのような些細な出来事はどうでもよくなり、目を閉じて身を任せました。

そのような状況だったからでしょうか。

「絶対に、守るから」

義姉さんの決意にも、覚悟にも。僕は気がつくことができなかったのです。

これはいつの頃の光景だったろうか。

「ねえ、ヒロ！ ヒロはどのきせつが好き？」

……ああ、思い出した。

これはヒロが孤児院に来たばかりの頃。二人で寝転がりながら絵本を見ていた時の記憶。

その時、見ていた絵本が四季についての内容だったのだ。

「ヒロは秋が好きなんだー。わたしは秋はあんまり好きになれないよ」

ヒロが指差した先は、紅葉の描かれた秋のページ。私の、顔も知らない両親が私を産んだ《らしい》季節。私はどうしてもこの季節が好きになれなかった。

捨てられるくらいなら産まれなくなかった、なんて考えることも頻繁にあった。一時期は、《アキ》という単語が入った自分の名前にすら過敏に反応していた。

自分よりも幼いヒロの手前、何でもない風を装ってはいたつもりだけど、たぶんその時の私は堪えきれずに渋い顔をしていたと思う。そんな私を不思議そうな顔をして見るヒロに気付いて、急いで冷静を取り繕う。

「ヒロはなんで秋が好きなの？」

咄嗟に出てきた質問で、帰ってくる答えにさして興味もなければ心の準備もしていなかった。

だから、

『ボクのだいすきなアキがうまれてきてくれたきせつだから』

こんなとんでもなく恥ずかしい言葉を、幼い子供らしくためらい

なく発するヒロに、かなりませていた当時の私は、ひどく悶絶させられたのを覚えている（しかも割合頻繁に）。

「ど、どこでそんなことばおぼえてきたのかなあ。まったく、ヒロはおませさんなんだから」

紅くなってしまった顔を隠すようにしてヒロの頭を強く撫でる。
あまりにわかりやすい照れ隠しではあったけれど、それ以外に誤魔化す方法が見つからなかったのだからしょうがない。

この光景を見て改めて思う。

『ずっとずっといつしよだよ、アキ』

「うん。ずっとずっといつしよにしようね、ヒロ」

私はこの頃からずっとヒロと一緒にいて、

『だいすきだよアキ』

「……わたしもだよ、ヒロ」

ずっとヒロのことが好きだったのだと。

「……んん」

どっぷりと日が落ちた道をゆっくりと踏みしめるように歩いていると、義姉さんが背中の上でうめき声をあげました。

説明する必要もない気もしますが一応説明はしておきますと、義姉さんが僕の背の上にいるのは遊び疲れて電車の中で眠りこけてしまったからです。そこから義姉さんをおぶって電車から降りるのが、予想以上に大変だったことも説明する必要はないと思います。

「……あれえ、ここどこ？」

…商店街を抜けたところです。もうすぐいつもの坂道ですよ。

目を擦りながらきよろきよろとする義姉さんの言葉に、歩みを続けながら答えます。

そっかぁ、と小さく息を吐いて再び僕の背中に顔を埋める義姉さんには、どうやら僕の背中から降りるつもりはないようです。まあ、別に構わないんですが。

「なんかねえ、ずいぶんとむかあしの夢を見ちゃったよ」

…昔、ですか？ 孤児院の頃とかでしょうか？

「そうそう、入ったばかりのころ。ヒロの背中で寝てたからかな」

浮いている両足をぶらぶらとさせながら愉しげに話す義姉さんに思わず苦笑します。

「あのころのヒロはかわいかったなあ。『アキだいすき』って…そんなしみじみと言わないください。恥ずかしくてしょうがないの、わかりますよね？」

「にやつはつはっ、わかってて言ってますとも！」

肩の上でグイッとサムズアップする義姉さんに、何となく何を言

つても無駄になりそうなことを察してため息を一つ吐いて諦めます。
ひとしきり義姉さんが笑い、少しだけ間が空いたところで今度は
僕が口を開きます。

…義姉さん、僕の右手に黒い鞆がありますよね。

「んん？ あるね。借り物？」

…はい。まあそれは置いておいて、その中、見てみてください。

「わかったー」

僕の背中の上をもぞもぞと動きまわり、右腕に引っかけてあった
竜也さんに借りた鞆の中から包装された細長い箱を取り出したとこ
ろで義姉さんの動きが止まりました。

…プレゼントです。お誕生日おめでとございます。

義姉さんが何かを言う前に、機先を制するようにして口を開きま
した。先程はやらねばなでしたから、ちよっとしたお返しです。

「え、えーと……」

…せつかくですし開けてみてくださいよ。

「あ、うん。わかった」

思ったよりもいい反応をしてきている義姉さんにニヤリとしな
がら、包装紙がはがされた箱を開けてみるように促します。

「これって……」

義姉さんが箱から出したそれ
て再び動きを止めました。

シルバーのネックレスを見
ありやりや、もしかして気に入らなかったですかね。それでも選

ぶのには結構時間を掛けたのですが……。

「……これ、高かったんじゃない？」

… ああ、そんなこと気にしてたんですか。

おもむろに口を開けた義姉さんは、僕の目の前にネックレスを持ってきました。ネックレスに通っている二つの指輪が揃って揺れています。

なるほど、あまり反応が芳しくなかったのは予想以上に高そうなものが出てきたからですか。

まあ、確かにあまり安いものではなかったのですが、夏休みの間に短期でこなしていた割のいいアルバイトのおかげで妥協せずに一番義姉さんに似合いそうなものが買えました。

… 自分でお金を稼げるようになったはじめての年ですからね。ちょっとだけ奮発しました。

「けど……」

… 僕が贈りたくて贈ったものです。それとも気に入っていただけなかったですか？

納得いかないといった感じの義姉さんに、少しだけ意地悪な質問をぶつけてみると、ぶんぶんと首を横に振る音が聞こえました。

珍しくかなりうるたえている様子の義姉さんを見て、くつくつと声を殺して笑っている、そんな僕に気付いたのか、むうと義姉さんがへそを曲げる『音』が聞こえました。後ろを向かずともその様子があまりに容易に想像できてしまい、とうとうこらえきれず声をあげて笑うと、義姉さんはむむうとさらにへそを曲げました。

「…………… やっぱり、小さいころのヒロの方がかわかったよ」

… はい、かわいくなってごめんなさい。反省しています。

「反省なんかしてないじゃないかーっ！」

自然と浮かんでくる笑みを隠すことなく、うーうーと威嚇するようになる義姉さんを背にいつもより少しだけ遠回りの道を選んで家に帰ることにしました。

第二十話 wonderful days（後書き）

刻々と迫る時に、胸が挟られるように痛む。

「まだずっと先なのに……」

思わず胸を押さえてベッドの上で身を丸めると、硬い感触が指に触れた。

それに触れると、その痛みが、焦燥が、少しだけ軽くなったような気がした。

「……………ヒロ」

呟いたその声は、暗い部屋の中で誰にも届くことなく霧散した。

次回『青空パレット』

お楽しみに

第二十一話 青空パレット

その日、少年と少女は初めて夫婦喧嘩というものを見た。
理由はよくわからないが、聞こえてくる話の内容から痴話喧嘩の類らしかった。

『ちよつと待つて美桜さんみおつ！ それはいけない！ 僕、死んじゃうから！！』

『大丈夫よ、悠ちゃんゆう。人は簡単には死なないわ』

『何を根拠に！？ 普通、美桜さんみたいなバカ力で殴られたら…』

…あつ』

『……誰がバカ力ですって？』

少年と少女は見えている地雷をみすみす踏む夫と踏まれた妻との喧嘩（一方的な暴力）を眺めていたが、やがてそれにも飽きたのか用意されていた朝食に手をつけ始めた。

『ぎゃあ！』

二口ほど食べたところで、潰れたカエルのような声が聞こえた。
どうやらもう捕まったらしい。

『ちよ、待つてー！』

『とおつ……………りゃあああ！！』

その日、少年と少女は初めて人が空を飛ぶ姿を見た。

「では、次に文化祭での出し物を決めます」
「アイデアがある人は手をあげてね。その中から多数決で決めるから」

体育祭の後始末の目処がようやく付いた頃、クラスではもう次のイベントである文化祭の出し物について話し合いが進んでいました。時間的余裕がないのでお昼休みを使って話し合いをしているのですが、それについて誰も文句を言わない辺りが、このクラスのノリの良さを現しています。

前に立って司会進行をしている真君と茜さんが、あげられてくるアイデアを黒板に板書していく中、隣に座っていたタロ君が周りを見渡してニカツと笑いました。

「こういう雰囲気っていいよなー。あ、俺は『性別逆転喫茶』な」

お昼ごはんのサンドイッチをほお張りながら自身も手をあげて発言すると、ははつと笑い声をあげました。

…何でまたそんな危なっかしい選択肢を増やすんですか。もし残っちゃったらどうするんです？

「さすがにそりゃねえだろ。それにこういうのはこれくらいバカなモノがあつた方が盛り上がるってもんだ」

眉をひそめてタロ君に文句を言いますが、タロ君はどこ吹く風といった様子で笑うと、新たに取り出したコロツケパンに取り掛かり

ました。

「…『性別逆転演劇』」

…波音さんも何言ってるんですか。ですからそういったものかもし選ばれたら

「…大丈夫。ヒロインはヒロ君、きっと映える」

…いえいえいえ、何が大丈夫なんですか。今の会話に何一つとして大丈夫な点はないですよ。

「おお、ヒロの女装か。ちょっとおもしろそうだな」

…だからタロ君も変な風に焚きつけないでください。

タロ君に触発されたのか、隣でメロンパンを食^はんでいた波音さんも妙なことを言い出し、僕は思わずため息を吐きました。

飯にそんな出し物で決まったとしても、僕には警備の仕事があるため参加できません。

まあ、内装や小道具の製作くらいは手伝うことも出来ると思いますが、やはり一番忙しいのは当日です。一番に忙しくなるであろう日にお手伝いできないというのは、大変心苦しいものがあります。

とはいえこのクラスの皆さんならば、どんな難題であろうと本番までにはどうにかしてしまおうのではないか、などと思ってしまうほど適応性が高く、何よりも個々のポテンシャルが高いですから、僕一人程度抜けたところであまり問題にはならないのかもしれないかもしれません。そんなことを考えながら、ふと壁掛けの時計を見ると、お昼休みはもう残り半分を切っていました。

…もうこんな時間ですか。少し生徒会室に行ってきますね。

「あー、姉貴たちに呼ばれてるんだっけか。まあこっちは任せろ、上手いこと誘導して性別逆転喫茶を出し物にしたいから」

「…そうはさせない。性別逆転演劇を一位に誘導する」

一方は悪戯つぽく、一方はかなり真剣に。言い争いを続ける二人を見て、もう一度大きくため息を吐きました。

「今回の件、義弟君もクイナ嬢もよくやってくれた」

「おかげで今年の体育祭、実害はほとんどなかったよ。警察に突き出した人も何人かいたけどね」

「それは何よりです。皆さんが無事に体育祭を楽しめたなら、僕としても嬉しい限りですよ。」

「わ、私は……」

生徒会室に呼ばれた僕とクイナさんは、まず琴音さんと奏さんにねぎらいの言葉をかけられましたが、それを受けたクイナさんはどうにもバツが悪そうな顔をしてもしもじとしています。

そんな様子に目聡めさとしく気付いた琴音さんは、クイナさんの方を向いて再び口を開きました。

「クイナ嬢、あの程度のミスで負い目を感じるな」

「え？ いえ、あの……」

クイナさんとしては、何らかの叱責を受けるものだと思っていたのでしよう。そんな折に掛けられた意外な言葉に、目を白黒させながら言葉に詰まっています。

そんなクイナさんが二の句を探し終わる前に、琴音さんが口を開きました。

「クイナ嬢はまだ若い。なら今のうちに甘えて、ミスをして、学習しろ。自らの伸び代しほひしろを出来る限り広げておくんだ」

「……伸び代、ですか」

「そう、伸び代だ。人の器の大きさはごく短い時間に決まる。その時期が今だ。その瞬間を見逃すな、惰性で生きるな。その時を見誤れば底が知れる人間になってしまふぞ。それにな……」

話を一端そこで切ると、琴音さんはちよいちよいとクイナさんを呼び寄せる仕草をします。

クイナさんはその行動に面食らった顔をしましたが、すぐにハツとしたような表情になり、琴音さんのもとに小走りで走り寄りました。

そんなクイナさんを迎えるように琴音さんはイスから立ち上がると、机ごしのクイナさんの耳に小声で何事が吹き込みます。

その瞬間、ボンと大きな音をクイナさんの顔が赤く染まりました。

「……そ、そんなことはっ！」

「おや、否定するのか、クイナ嬢？　それで数多い恋敵らいてきに対抗できるとでも思っているのか？」

「あ、え、うう、それは……その………認めます」

非常に長い沈黙のあと、諦めたようにクイナさんはカクンと首を縦に振りました。

「……ふふふ、すっかり成長しているようだ。何事もまずは己を知ることからだ、クイナ嬢」

そんなクイナさんの様子に、満足したように琴音さんは笑うと、更にヒントだ、と言って再び小声でクイナさんに何事かを吹き込み、同時にクイナさんの髪をくくっていた髪ゴムをとりました。

突然のその行動に、てっきりクイナさんは戸惑うかと思ったので

すが、一瞬動きが止まってから、まじまじと琴音さんの顔を見てから『ホントですか?』と問い返しました。

そんなクイナさんの問い掛けに琴音さんは大仰に頷いて見せると、話の矛先を僕の方に変えてきました。

「なあ、義弟君。今のクイナ嬢の髪形を見てどう思う?」
「へ? え、ええとても似合ってるんじゃないですかね?」

突然予想だにしない話を振られた僕は、変な声を出してしまいがらも何とかそう答えると、今度はクイナさんがガバツと音がしそうな勢いでこちらに向き直りました。

「マジッすか!? それは心の底から思っの言葉っすか!?」

何と言いますか、鬼気迫るものを感じさせるほどのプレッシャーを感じる詰問に思わず頬が引きつります。別段、嘘をついているわけでも、やましいことがあるわけでもないのですが、なぜか、こう……、背を押されるような焦燥感を感じなければいけないのでしょうか。

とりあえず、落ち着く意味を込めて頭を振ってから、改めてクイナさんに目を向けます。

いつも頭の頂点に纏められ、頭を下げると遅れてお辞儀をする髪の毛が、今は背を撫でるようにクイナさんの後ろで揺れています。一度も脱色をしたことがないのか、痛みの見られない髪が窓から入ってくる陽光を反射して白い光を生み出しています。いつも髪を結っている姿しか見たことなかったので、それを解いた姿は新鮮に見えます。

顔は上級生、しかもプレッシャーの塊みたいな琴音さんと話していたせい、微妙に緊張して紅潮しているように見えます。身体も

やはり緊張しているのかモジモジと小さく身動きみじろしています。

まあ、総評しますと

…心の底からそう思いますよ。すごく似合ってます。
「……ッ!」

イメージとしては小動物。若干、緊張しているところが余計にそう感じます。何と言いますか、真君や波音さんに近い感じでしょうか。頭を撫でたくなります。

さすがに、『小動物みたい』とは言いませんでしたが、概ね思っている事を正直に口にする、クイナさんは目を白黒させながら言葉を失っています。

琴音さんと奏さんは、何故か後ろを向いています。あれ、お二方も笑っていませんか？

なにやら皆さんが皆さん、よくわからない反応をするので首を傾げていると、午後の授業の予鈴が鳴りました。

その予鈴が鳴り終わる頃には、琴音さんは何事もなかったかのように表情を正して、口を開きました。

「少々雑談が過ぎたな。まあ、今日はさして目的があって呼んだわけではない。問題は無いか」

「じゃあ、クイナちゃんは今授業が始まる前に教室に戻ってね。ヒロくんは少し残ってね」

「……あ、はい、えっと、失礼します」

…僕ももう教室に戻りたいので

「義弟君は残ってくれ」

「ヒロくんは残ってね」

…はい、わかりました。

目的はないと言っていたにも関わらず、強制的に居残りを決定された僕を置いて、我に返ったクイナさんがそそくさと生徒会室の入り口に向かいます。

クイナさんは、一瞬いつぞやの射殺さんばかりの視線をこちらに向け、ぺこりと一礼をしてから生徒会室をあとにしました。

僕、クイナさんに何かしてしまっただんですかね……？

どうしてクイナさんに親の仇を見るような目で睨まなければならないのか、よくわからずに悩んでいると、奏さんが苦笑いを浮かべて口を開きました。

「あはは。まあ、あんまり気にしないであげてね。クイナちゃんは自分を表現するのが苦手なだけだから」

…は、はあ。

首を捻って奏さんの言葉の真意を理解しようと色々と考えを広げてみましたが、結局わからずじまいのままその場は過ぎてしまいました。

…ど、どういうことですか、これは？

「……まさか、ここまでとは」

本題三割、雑談七割の話し合いを終え、なんとか六時間目が始まる前に教室に到着した際、やたらとふりふりしたドレスのような服が何着も教室をいつたりきたりしていました。

目くるめく嫌な予感に、思わず口をついてこぼれた言葉に、横から返答がきました。

その言葉に、横を向くと脱力して机に寄りかかっているタロ君がいました。

煌びやかなパーティードレスを着て。

…え、ええ？ その格好はいつたい

「皆まで言っな、ヒロ。それ以上言っなら俺はその窓から飛び降りるぞ……！」

何故そのような格好をしているのか問い質^{ただ}そうとしたところ、悲壮な決意を感じる声音でタロ君が僕の言葉を遮りました。

どうしたものか……。そう考えていたところに、テクテクと波音さんが歩いてきました。

「…全ては自然の摂理。敗者は勝者の成すがまま。……………ぶっ」
「ああ、今日はいいい天気だ。こんな日は空を飛びたくなるよな」

突如としてスカートを翻し窓に向かって走りだしたタロ君に追いついたのは、窓からギリギリ一歩手前でした。

第二十一話 青空パレット（後書き）

「思ったよりもみんな乗り気になっちゃって……。特に女子がすぐって」

「そうなんですか。さすがに皆さんそこまで悪乗りしないと思ったんですが。」

「演劇部の人なんかは小道具のドレス持ってきてちゃってるし」

「あー、そのー、なるほどー。」

「……ヒロ、俺からあからさまに視線を外すな。善意はときに悪意よりも人を傷付けるんだぞ」

「……配役も決定済み」

「僕は忙しいですからたいしたことはできないですよ？」

「……折込済み。ヒロ君はもしもの時の代役」

「代役ですか？ それならなんとか……なるんですかね？」

「……大丈夫」

「……ちょ、波音さん鼻血出てますよ！」

「……大丈夫」

「……いえ、力強くサムズアップしても鼻血は止まってませんからね？」

次回『デートに行こう！』

「………つてか何で俺だけ着替えさせられたんだよ」

「……何となく」

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0873e/>

姉びっくばん+（ぷらす）

2011年4月7日17時53分発行